

転生したら狩人×狩人

楯檣

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰の意味でもなく、どこかのうっかりやな神様のせいでもなく。ただ転生した前世の記憶持ちの前世オタク現幼児な未来の美少女は何をして、何がしたいのか。

群像劇にもならない転生者の物語り。 ※マイページから設定集にとべます……参考にでも。

目次

自己紹介でもしましょうか。	1
ジャポンっていいよね、ジャポン。	7
変態？ やだなあゝ生まれても無いですよ。	13
二百階クラスは思ったよりも……ねえ？	22
私が過保護？ ……良いお姉ちゃんだと 言ってくれ。	29
突撃！ 隣じゃないけどゾルディック家	37
！	37
婚約者だと ……大人の階段、昇ったの	37
か…？	44
ハンター試験に向けて。 ……あ、いや私 じゃないよ？	51
二人のスカウトだって……私はされない よね？	60
別に私が太っている訳ではなく、貴女の サイズが大きいんです！	68
試合、私棄権しても……あ、ダメですかそ うですか。	75
試合後、全治三ヶ月……一週間の間違い では？	84
雨の日は憂鬱になって、変な事をやりそ うになるから困る。	93

待ち合わせはドーレ港。――

私が人外過ぎて妹のストレスがマッハ。

私にとってハンター試験はハイキングの

――

ようなもの。――

私は和服派……貴女とは違うんです！

ちっちゃい子は可愛い。……弟のみなら

171

ず。――

お酒は念に変えました。――

バレンタイン……昔はリア充爆発しろと

妹は言わずもがな、意外と弟の猫耳が似

か思っていました。――

合っている件。――

アキバの次は、そうだキョートへ行こう。

くじら島って狭いように見えて結構広

――

かったり。――

ジャポン語を知らず知らず使う弟……お

二人が覚えるんじゃない――私が覚え

姉ちゃん怖いー(棒)――

させるんだ。――

ゴシックドレスってなんかロリータな感

微笑みって本来威嚇を隠すために生まれ

じがするのは私だけ？――

たってエロい人が言つてた。――

155

219

147

207

139

200

129

188

120

179

111

163

101

友人の息子に先を越されたアラフォーの
心境は複雑。 ————— 228

いや、五歳つて幾らなんでもペドいよね。

ベア○ド様もびつくり。「この——(ry

————— 237

皇帝と妖狐つて聞くと気になるのは私だ

け…だと…!!? バカなつ ————— 248

自己紹介でもしまししょうか。

——目が覚めたら知らない天井だった……という訳でもなく見飽きてきた天井。

俺がこのHUNTER×HUNTERという名の漫画の世界に転生してきて早一年。

俺は俗に言うTS転生者だ。

男から女にね。……良い体験だろうと割り切っている。

良かったら良いんだ！

ホントに気にして無いからあ……うう。

閑話休題。

……失礼。

そしてまあご想像通りかもしれないが俺には前世の記憶がある。

記憶といってもひじょーにお粗末な、引きこもりなオタクの前世の記憶だが。

しかし、あるっちゃあるのだ。

——……この死亡フラグだらけのとんでもない世界についての記憶が。

何時気づいたのかといえれば生まれてから一週間ぐらいした頃だろうか？

ベビーベッドの上、朝食を食べているあきらかに二十台に見える、黒髪イケメンな父

親の手にある新聞で分かった。

あの象形文字のようなカタカナのようなハンター文字を見てだ。

そのときは泣いたね。

だってあれだ。

新しい人生、まともに生きようと思っていたら、いつ死んでもおかしくない……そんな世界だって知ったら親の手がそんなにかからない赤ちゃん、と評判だった俺でも泣きたくなる。

しかしまあ、すぐに金髪ポインで美人な御母様に口を塞がされたが……いや、いいんだよ？ 別に。俺も飲まないと成長しないし、役得だなって思ってるから。

……ナイスオツパイ。

と、まあ絶賛幼児な俺ではあるが、気がついたその日から念の修行……主に精孔を開くために瞑想を始めた。

結果……二日目で精孔が開いた。……これが第一成長期という奴か！

才能（多分）無いだろうと思われる俺にそんな真似が出来るわけ無い。——げに恐ろしきは成長期よ……！

と、それから三週間は夜寝る前に全力の練、起きている時は絶と凝を親にばれない様にやっていた。

何故かというところ……多分おそらく両親は念について知っている。

たまたま凝をして両親を見てみたら二人ともオーラが垂れ流しでなかった……つまり纏をしていた。

職業は知っただけでは父親は普通に会社勤め、母は内職をたまにする専業主婦。……何処で念について知ったのかは分からないが、そのときはそれなりに実力は高いと見た。

目の精孔が開いてからというもの、強者特有のオーラが目に見えて分かる。

で、それが分かったビビリな俺はというと……ばれないよう、常人と同じような量のオーラを垂れ流してごまかした。

だつて……恐いんだもの。

そして二人は、俺が念を使えるということに気づいている。

しかし俺には話しかけてこない。

幼児だから言っても分からないと思っっているだろうか？

まあ、この際いいだろう。

そして現在。

今ではオーラ総量も着実と上がってきており、練をした状態でまだ一年目だろうかから一秒間20オーラとして一時間。計算して72000。

頭在オーラ量はわかんない。二十分の一くらいだろうと思うから多分、3600。
ちなみに水見式はやって無いから系統は不明。

身体の成長具合は四足歩行から二足歩行に。やっと舌が思うように動くようになってきて言葉も話せるようになってきた。

そして、離乳食を食べた俺は

「此処がHUNTER×HUNTERの世界ってわかってるよな？」

「へ？」

な、何を言ってるのでしょうかお父様!?

「まさか私達の娘まで転生者だったなんてね、お父さん？」

「まったくだよ、母さん。」

父と母の会話を総合すると、両親は俺と同じ日本からの転生者とトリップ体験者でしたー(笑)

って笑い事じゃねえよ!

ちなみにオトンがトリッパー。オカンが転生者。

念能力は両方とも特質系。

修行は俺と同じくオカンは生まれた時から始めて、オトンはH×Hの世界に来たと気づいてから始めたんだと。

で、二人のうち親父の方はハンターライセンスを持っていると。

……もうやだ、この家族。

「……それでどうする?」

「そうねえ、どうしましょうかね?」

「えっと……」

なに? もしかして俺……捨てられる? 流星街に?

そんな事を考えていた俺の顔を見てお父さんは、

「何を考えてるのは分らないけど……念の修行だよ。しゅ・ぎよ・う。……隠れてやってただろ?」

「あ、うん……」

……よかつた〜! 捨てられるんじゃないやなかつた……!

「それじゃ、こうしましょう?」

朝は瞑想。昼からは私と主に体作りの修行。夜は父さんと念能力の修行という事で「うん、いいんじゃないかなろうか。……どうだ?」

喜んでいられるもつかの間。話は進む、進む。

でも話の内容は悪い事じゃない。

死亡フラグは叩き折っておくに越した事は無い。

そして俺は、

「えっと、うん。お願いします……」

……この日、両親という名の師匠を得た。

現在二歳と一ヶ月。

俺、カトリアークルーガーは今日も元気にやっています。

ジャポンっていいよね、ジャポン。

今日も今日とて修行漬け。

ちなみに今五歳。

今年、1941年。原作の約60年前。

そして去年HUNTER試験第229期が終わった。

……原作関係ない年代じゃねえかと思った人。

私の念能力にかかれば原作介入なんて簡単なのだよ！

とまあ、些細な事は置いといて。

両親の生い立ちやら、私の正体がバレた後。

それから大変だった。

まず、TSしたと聞いたお母さんは教育的指導により私の一人称を“俺”から“私”に変えることに成功。

どうやら自分が転生した時苦労したんだとか。

実体験込みだったので説得力があった。

……というかお母さんもTSしたのか。と突っ込んだ時は笑って誤魔化された。

その次、生身の能力。

わざわざパドキア共和国、ククルーマウンテンゾルディック家の試しの門を開くと4まで空いた。

ようするに素の力で三十二トソの扉をひらけた。

勿論、開けただけですぐに帰ってきたけど。

そして、何時の間にかこんな力が!? と思つてついでに二人に聞いたら、家の道具や家具が既に小さいもので百キロは超えているらしい。

恐いわっ!!

次に、水見式。

正体バレの後、両親の協力のもとしてみるとなんと変化系と操作系……対極の性質を持つている事が発覚。

両親が特質だから特質と思つたが違つた。

想像していたのと違つたが、おr……私の考える発は使えるので問題なかつた。

対極の性質を持つ事に、「もう特質でいいじゃん!」と思つたのは当然だと思われ。

次、念の応用技。

三年で円が半径約二百メートルまで伸び、流が実戦レベルにまであがった。

あとは父さん直伝の『絶をしたまま練をする』という無茶苦茶な応用技、体内で練のエネルギーを圧縮させて防御力、攻撃力、隠密性を上げる『臨』と、『纏と絶の応用』で、オーラを高速で循環させオーラの運用率を上げ纏の十倍まで防御力を上げる『廻』を習得。

そして上の二つをあわせて行くと『剛』という硬の約20倍の攻撃力と防御力が得られる、特質系の両親でも強化系を圧倒できる応用技を教わった。

剛については教わっただけで実際にやると三十秒しか持たない。

難易度で言うと、

廻≦臨<剛

といった感じ。

到底実戦では使えないのでモノになるまで多分あと十年はかかると思う。

ちなみに両親は二人とも実戦レベルで剛が使える。

新しい応用技があれば流なんて必要ないんじゃないかって思うだろうが、残念。そこまで精度が高くないんだ。……それに出来て損は無いらしい。

以上のことで分かったと思うが私以上に両親はチートだった。

ネテロ会長にも勝てんじやね？　と思って二人に聞いてみると、やった事が無いから分らないんだと。

そりや当たり前か……と思っていると、本気でやれば勝てるというお言葉を頂いた。

あれですか、普通にやったら引き分けですか。

こえーよ。

と、こんな感じに考え事をしつつ瞑想していたが母さんの呼ぶ声がするのでやめて食卓に向かう。

「今行くよー！」

充実してるなあ。

ご飯を食べ終わり、しばしの食休み。

ジャポン製のテレビを眺めていると父さんが話しかけてきた。でも今丁度アニメのいいところなのだ。

流石ジャポン製。性能が桁違いだ。

他が地アナ放送とすると地デジという位に画質が良い。

「カトリアー、幼稚園とかどうすんの？」

「うーん？ ……行かなくていいんじゃないの？」

「いや、まあそうかもしないけど。」

でも、ほら。娘の成長の記録を残して置きたいと言うかさ？」

ちなみにこの親父、親馬鹿な感じがスゴイ。

まあ、子供が出来て嬉しいのはわかる……成長している姿を残しておきたいっていうのもわかるけども！

「いいじゃん。私、転生者なんだし。父さんも同じように思うと思うけど？」

「はあ……そうかあ……」

残念そうな顔をしている一児の父、デイトライトIIクルーガー。

シヨボンとした顔でも絵になるからイケメンはいいよな！

ちなみに本名は安曇幸。

日本に居た時から顔は変わっていないらしい。

あー妬ましい。

まあ、娘の私も美形になったから許してやろう。

「それで？ ほかにも用があるんでしょ、父さん」

多分幼稚園に関してはついでだろうとあたりをつけた私はテレビを消して父さんの方に向き直る。

「うん、正解。 天空闘技場に行っておいで」

「……マジで？」

「うん、本^{マジ}気で。」

……本気と書いてマジと読む。

変態？ やだなあゝ生まれても無いですよ。

みんな大好き！

……かは分からないが格闘家達にとっては腕試し、プロハンター達にとっては良い金儲けの場所。

此処、天空闘技場。

『天空』と名がつくだけに雲をつき抜けるほど高いこの塔、二百階以上の高さがある。

そして現在そのデカイ建物の下で長い行列に並びながら塔を見上げていた。
すごいよなあゝ……どうやって建てたんだろうか。

——見上げながら並んでいると後ろから声がかかった。

「……うん？ なんですか？」

「お嬢さん、アンタの番だ。早くしてくれ」

「あ、ホントですね。すみません……」

私は謝りつつ受付で登録を済ませます。

それから声の主の顔を見るとコレはまた私より四歳ほど年上そうな銀髪の男の子が……。

「ほー…えらくしつかりしてるんだな。お嬢さんは何歳だ?」

「五歳ですが……って知ってました? レディに歳を聞くのはダメなんですよ?」

「ぷはー!」

少年はつぼに入ったのか腹を抱えて笑い出す。

コイツ……!

ひとしきり笑った後、少年は受付を済まして私のほうに来る。

「あんた、ホントは何歳だよ……! 五歳児はそんな捻くれて無いぞ?!」

また笑う。

イラツとくるなあ……

「いいですよーだ。……試合の時覚えてなよ?」

「へえ言うじやねえか。ま、すぐに片がつくと思うけどな?」

少年は笑うのを止め目を細めながら調子づく。

……私の事、舐めてかかってら。

「いいよ、じゃあ試合のときにやろう。……お互い頑張ろうね?」

私は最後、ぶりっ子をしながら手を差し出す。

そして少年は毒気を抜かれたように呆気に取られた表情をしていた。

「お、おう! ……泣いても後悔すんなよ?!」

そして私と少年はこんな感じに握手をして分かれた。

それから私は選手控え室に行き、出番を待つ。

周りからは何であんな小さい子がなんて声が聞こえるけどとりあえず気にしない方向で。

それからしばらく待っていると呼ばれる。

審査会場に行くのと相手が居た。

どうやら相手はムキムキの自分の肉体に自信を持つている選手のようなだ。

「嬢ちゃん、大丈夫か？」

相手は身体に似合わず私の事を心配してくれる。

やさしいなこの人。

……気絶で許してあげるか。

「大丈夫ですよ。審判、始めてください」

審判からの説明が入る。

そして『初めッ』という掛け声とともに相手の背後にまわり、首に手を当てて気絶させる。

……この間僅か0・3秒。

私は元の位置に戻ると呆気にとられている審判に声をかけて正気に戻させる。

「か、カトリア選手ッ! べ、べ、五十階へどうぞ」

……どもり過ぎだろ審判さん。

初めての試合から一ヶ月経った。

その間は百五十階から百九十階までを行ったりきたり。

おかげでポケットマネーが五億くらい手に入った。

さて今日もがっぽり稼ごうかと思っていると、今居る階の受付から二百階にあがらないと向上心が無いものとして除名するといわれたので、無理を言っただと一回受けたら上がると言う条件で最後一回、百九十階レベルで受けさせてもらった。

で、最後の試合の相手というのが、

「あー!」

「よっ! 久しぶりだな、お嬢さん?」

……イケメンになるであろう、あの銀髪だった。

審判が『ゼノ』って名前らしい少年と私に確認をとりながら始めの合図をする。

私は自然体でありながらゼノ少年に話しかける。

うん? ゼノってどっかで聞いたことあるぞ?

「上がってこれたんだ……意外だわー」

「お前なあ……観てなかったのか、俺の試合」

「だって上がってこないって思ってたから……ね！」

ゼノは私と同じように背後に回って首に手刀を入れてこようとしますが後ろに手を回してガードする。

ゼノからは、へえーと感心したようなそんな声が漏れた。

「……で、ゼノは観てたの？ 私の試合……！」

私はガードからゼノの手首を持ち場外へ向かって彼を投げつつ訊く。

「ああ、観てたぞ。悪かったな馬鹿にして……化け物みたいに強いって噂が立つくらいだったからな……！」

「うん？ あー気にして無いよ？」

ゼノは空中で体勢を変えながらリング内に音も無く着地し、私に向かってくる。

——……ほうー、中々やるではないかゼノ君。

……というかそんなに有名だったのか私。

私はゼノの脳天ぶち抜くつもりで左の拳を振るう。

「実感無いんだけどなあ」と

「は、何言ってるんだか！」

彼は軽々と避け私のボディを狙って殴りかかってくる。

左手のパンチの勢いと足のステップで一回転してかわし、空いていた右腕をがら空きの彼の背中に叩きつける。

彼はそのまま避けて……ってあれ?

「ぐはっ!」

避けずにもろ喰らってそのまま床に叩きつけられた。

あ、ステージが窪んだ。

「おーい、ゼノ君」

「……………」

……無反応。

「しんぱーん、カウント」

「はっ!?! 1、2、3……………」

審判のカウントはそのまま続き、

「ゼロ! ……試合終了! 勝者、カトリア選手ッ!」

……歓声が響いた。

百階台、最後の試合が終わった後。

私はゼノの部屋に見舞いに行っていた。

「おーい、ゼノ君ー。入るぞー……って何やってんの？」

「うん？ お前か。見ての通り筋トレだが？」

……何処に指一本で針の上に逆立ちしつつ腕立てをやる奴がいるんだよ！

「はあ………とりあえず降りなよ」

「後一回。…5000と……で、何の用？」

針から降りたゼノはベッドの上に座ってくつろぐ。

「いや、怪我して無いかなくて思ったから来たんだけど………元気じゃん」

「あ？ その事………別に怪我はして無いな。うん」

「………やつぱり。なんで続けなかったの？」

やつぱりこいつ、わざと負けたな？

「いや、そんな凄むなよ。多分あのままやってたら俺負けてたし、それにお前なんか隠し

て戦ってたみたいだったからな」

“二百階までが目標だったし”とゼノは付け加える。

あーなるほど。いい判断だ。

「それで今日中に百九十階台をクリアしたって訳ねえ……」

「そういう事。………という訳で俺は家に帰るんだけど………お前はどうすんの？」

二百階か……上がってもいいかな?

……ヒソカという名の変態はまだ生まれて無いだろうしね。

「あー……上に行くけど?」

「そっか。じゃ、コレ渡しとく……お前のこと気に入った。暇な時にでも遊びに来いよ!

ちよつと俺の家変わってるけど……歓迎するぜ?」

「そう? まあ、ありがたく貰つとく」

私は彼がポケットから出した名刺みたいなのを貰って自分のポケットにしまう。

その様子を見て彼は立ち上がって近くに纏めてあつた荷物らしき鞆を背負つて扉に向かつていく。

「じゃあ俺、帰るから。また今度な」

「うん、またね」

「あ、そうそう」と彼は立ち止まって、私のほうを振り向いて言う。

「……俺達つて友達になるのか?」

「うん? そうじゃない? 私はそうかなって思ってるけど?」

「ふーん。そっか、そうだな! じゃあなカトリア!」

私の言葉を聞いたゼノは何処か嬉しそうにして帰っていった。

この後、ゼノから貰った名刺を見て彼がゼノルゾルディック……遠くない未来でのゾルディック当主その人だという事に気づいて驚いたのは忘れてもいい記憶だと思う。

二百階クラスは思ったよりも……ねえ？

翌日。

ゼノと別れてから早々に二百階にて受付を済ました私は、受付に来て試合の登録をしていた。

「それでは試合の希望日はいつがよろしいですか？」

「うーん……じゃあ一カ月後で」

受付に居るのは原作には出てなかったけどもこれまた美人なお姉さん。

「分かりました。それでは一カ月後の今日で登録しておきますね」

此処は一つ感謝を込めて、お礼をば……

「ありがとうございます、お姉さん♪」

「はうっ……!」

ま、前のめりに物凄い勢いで倒れた……。

いや、確信犯なのは分かってるから、別に驚く事も無いんだけどね？

試合登録を済ました私は自室に戻り実家に電話をしていた。

「もしもし。お父さん？」

『はいはい。うん、カトリア？ 久しぶりねー元気してた？』

電話に出たのはお父さんじゃなくて女性の声。

まあ、聞きなれた声な訳で。

「およ？ この声は……お母さん？」

『そうよ？ みんな大好きレミリアお母さんですよ』

そう私の最愛のお母様兼師匠であるレミリア＝クルーガーである。

私が電話を掛けた理由といえば、まあ現状報告のつもりな訳で。

お父さんに話そうと思ったんだけどなあ……

「いや、自分で言うなし！ それでお父さんは？」

『お父さんは仕事だけど……』

「そっかー……じゃあ、お母さんにまず言っとくね？ 私、二百階クラスまで来たよ！」

『ホント？ もう一ヶ月か。早いもんねー……』

確かに月日が流れるのは早く感じたけど、クラスが上がるのが早いかどうかは……基準が微妙なところだなあ自分の場合。……両親とも私以上に実力持つてるんだから。

「うん、自分でもビツクリ。それでね私友達出来たんだー」

『友達？ 年上おじ様とかじゃなくて？』

いやいや、お母さんみたいに女だつてまだ自覚して無いからね。

……男になろうとは思わないけど。

「いや、流石にそこまで元男だつて事、割り切つてないから。四歳くらい年上の子で名前がゼノ」

『へえ〜……これまた原作に関係してそんな名前ね』

「いや、本人。ゼノさんその人だつた」

『おう……マジで？』

うん、お母さん流石。ノリ良いね。

「マジマジ。『やべえーよ私』つてなつてるんだけど……どうしたらいいかな？」

『いいんじゃない？ 友達が暗殺一家の次期党首でも。それと今度家族で訪問しよう？』

「なんで家族で訪問すんのさ？」

……理由は大体分かるけどもー

『だつて……原作キャラじゃん？ お近づきになりたいじゃん？』

「やつぱり……良いんだけどさ別に。お父さんとお母さんなら暗殺一家なんて赤子の手を捻るようなもんだと認識してるから」

『うわぁー娘からの評価が酷い……』

「それくらい強いんだよ、二人は。特質系が強化系と肉弾戦やって勝てるとかありえないんだからね？」

『あー…うん。そうだね』

とまあ、他愛も無い事を話して。

「そういえば私、こつちにどれくらい居ればいいの？」

『うーん。ゆっくりしてもいいからねえ…一年くらい居てもいいわよ？』

「ホント？　じゃ、ゆっくりフロアマスターにでもなるよ」

『片手でフロアマスターになる娘が怖い』

「お母さんが言っても実感湧かないから。じゃあ、また今度電話するね」

『あ、うん。天空闘技場頑張ってるねー。』

“またねー”と言って電話を切った。

……一年も掛からないと思うけど。長いなあ。

そして私はこの後念の修行と外食をしてゆっくりと体を休めた。

一カ月後、試合当日。

『さて、今日もやって参りました！　天空闘技場二百階クラス初めての挑戦となる過去最年少カトリア選手！　対するは現在五勝〇敗の記録を持つクロード選手！　カトリ

ア選手は僅か一ヶ月という短い期間で此処まで上り詰めてきています！ 対するク
ロード選手……』

会場のスピーカーからかなり元気の良い声が聞こえてくる。

念が使えるようになった事で少しわくわくしている私。

……相手が念覚えてたらいいなあ。

ま、五勝してるらしいから覚えてるだろうけどね？

私がステージに上がると相手選手は声をかけてきた。

「くつくく……お嬢さん。今までは楽々と此処まで上がってこれたようだが此処から先
はそうはいかないぜ？」

「わかってますよ。さ、構えてください」

私と相手選手が言葉を交わすと審判が始めの合図を出す。

……まずは小手調べ。

私にとつての絶の役割をする臨を使い気配を消しつつリングの周りを走る。

『み、見えないーッ！ どうしたことだ！ カトリア選手の姿が消えたーッ！』

あれ、そんなに早いのか？

ちよつと駆け足でリングの周り走ってるだけなんだけど。

ま、いつか。

私は相手選手の背後へと近づいてわき腹に回し蹴りををいれる。

「な……ッ！」

相手選手が気づいた時にはもう遅く、観客席のある壁の方に吹っ飛んで壁にめり込んでいた。

審判が確認すると相手は気絶しており、私の勝利が確定。

こうして私の二百階クラスの初戦はあっけなく終わった。

私はそれから一年、一ヶ月くらいのペースで試合をしていき無敗。

十ヶ月くらいで悠々とフロアマスターになり、さつさと辞めて家に帰った。

このときの私の財産、約30億。

公営賭博（自分の出る試合では自分以外に賭げられない）で自分に賭けられる最大限度を自分に掛けておいたらこんな風になってしまった。

僅か五歳で億万長者になってしまった。

「マフィアとかに狙われないよな……？」と思っていたらフラグが経ったのか家に帰る道中、人攫いがかなり来て引つ切り無しに連れ攫われそうになった。

人攫いの中には念能力者もいてやばかったよ……臨して逃げたけどね。

とまあ、色々あったけど良い経験だったと思う。

剛も一年で30分くらいに伸びたし、廻と臨は両親レベルまで上がった。死亡フラグは減ったような気がするよ！

……ただ、ね？

「うあうー！」

「可愛いなあービスケットは……！」

「もう、お父さん！ 気持ちは分かるけどビスケだけじゃなくてお兄ちゃんのほうも抱いてあげたら？」

「おおー、ごめんごめん。ラディストもかわいいーなあ……」

「うー！」

親馬鹿になるのはいいけど姉弟きょうだい出来るなら一言言ってくれてもいいじゃない……。

1942年 双子誕生。

弟ラディスト⇨クルーガー、妹ビスケット⇨クルーガー共に健康。

私が過保護？ ……良いお姉ちゃんだと言ってくれ。

『家に帰るといつの間にか家族増えてました事件』から一ヶ月。

家の中の道具も一般的な重さのモノに変わってから一ヶ月たつたとも言う。

私は、現在進行形でまだ小さい兄妹のお姉ちゃんを頑張っていた。

……うん。赤ちゃんの世話って大変だね。

いや、私みたいに一歳の頃からペラペラと喋るわけでも無いから、意思疎通がホント難しい。私ってば親孝行者だね。

……と、私の事は置いといて肝心の二人はというと、

弟、二人のうちではお兄ちゃんになるラティスト、愛称ラディは男の子だけあつて元気が良い。

起きている時は手足を一生懸命に動かして運動している。昼間しつかり起きているだけあつて、夜は夜泣きも少なく、お母さんの睡眠時間に貢献している。（おねえちゃんに似て嬉しいよ！）

逆にビスケットはお昼寝の時間が長く、夜の寝つきも悪くて夜泣きも多い。（くっ…我俣娘め！）

……ただ、お父さんが甲斐甲斐しく世話をするのでお母さんの負担も軽くて済むんだけど。(ちなみにお母さんは双子を生んだというのに抜群のプロポーションは今だ健在。私の時もそうだった)

まあ、あれだ。

「うおーう?」

「むー……」

「あーもう! 可愛いなあ私の姉弟♪」

……可愛いは正義なのだよ。諸君。

……ところで、この私の可愛い妹ビスケットIIクルーガー。

姓クルーガー、名ビスケットであるこの子は原作に出てくる、主人公達の第二の師匠である「ビスケットIIクルーガー」である。

初め私がこの子の名前を聞いたとき、親の感性を少し疑ってしまった。

——だってあれだよ? アニメのキャラクターの名前を子供につけると同じことだよ?

そこで私は二人に『なんで原作キャラと同姓同名にする訳?!』と訊いた。

訊いてやったよ！ 私は！ ……そしたら二人は、

「クルーガーの姓があるのは戸籍上私達だけなんだから、この年代に生まれたこの子は
バスケット以外にありえない！」

……つて言いやりました。

情報元、HUNTERサイト。

開いた口がふさがらないとは、まさにこの事。

…身内は主人公の師匠じゃないですかー、ヤダー。

と、苦い思い出を思い出しつつ。

私はラディをお父さんに預けてビスケとお話する。

「ビ・ス・ケ」

「うーあーう？」

……二人が生まれてからは修行は御休み。

育児休暇らしきものをとった普通のサラリーマンお父さんは二人に付きっ切りで、主
にお母さんのサポート。そして私と偶に組み手をやってくれる。

素晴らしいお父さんの家族孝行。

ただ、ご存知だろうか？

赤ちゃんの頃からきちんとした発音で言葉を覚えさせると、赤ちゃん語を直すことをしなくてもいいので大変教育にいいのだ。

だからお父さんみたいに、

「ほーらラディー…お父ちゃんであちゅよ〜?」

「うおーうー!」

……こんな風になると後々きちんとした言葉遣いを赤ちゃん達は覚えなくちゃいけないため、彼らにとっても負担がかかる。

いや、気持ちは分かるんだよ?

二人、滅茶苦茶可愛いから。

ただ父よ…顔がニヤケ過ぎだ。

ほら、せつかくのイケメンが残念な事になってる。

だから、洗濯物を畳んでいるお母さんにいつもお父さんは、

「……お父さん! ちゃんとした言葉遣いで話さない!」

「うっ……はい……」

「うーう? きやつきや!」

可愛いがついている子供の前で恥をかかされてばかりいる。

はあ……先が思いやられる。

——でもある意味始めての子育てのようなものだから……この二人にとっては。目の前のビスケを見ながら思う。

……私のようなイレギュラーな存在がいるから仕方ないの……かな？
ちよつと悲しくなってきた。

「カトリア」

洗濯物を畳んでいたお母さんは手を止めて私の名前を呼ぶ。

「……うん？ なに、お母さん」

「貴女も私達の娘よ。例え前世の記憶があったとしても。例え前世が碌でもない人間だったとしても……貴女は大切な私達の可愛い子よ？」

「そうだよ、カトリア。お前もこの子達と同じくらい愛してるからな？」

「……うん」

……お父さんもきやつきやと笑っているラディストから目を離して、いつの間にか私とビスケ……いや、私の方を見ながらお母さんと同じ気恥ずかしい事を言ってくれる。

「……ありがとう。二人とも……」

「うん？ いや別に？ 私はカトリアがビスケとラディに嫉妬してるのかと思っただけ

よっ？」

「……カトリア。甘えたいなら僕の胸に飛び込んで来てもいいんだよ?」

「お父さんキモイ……」

「酷いっ!」

分らない振りして察してくれてるお母さん。

優しいけど親馬鹿なお父さん。

ああ、やつぱり。

……私はこの二人が大好きだ。

弟と妹が生まれて早3年……つまり私9歳、ビスケ達は3歳。

お父さんの腕に収まる大きさだった二人も、私の腰の辺りまで大きくなった。

……初めて「カトリアおねえちゃん」と二人に言ってもらえたときはどんなに嬉しかったか。

死んでも良いときさえ思ったね……いや、死なないけど。

そして、今二人は両親二人に見守られながら、テレビでよく見るような『一人で出来るかな』的な感じで幼稚園に通うため服を一人で着る事に挑戦している。

「……はい、二人とも袖に手を通して?」

「うん!」

元気よく返事をする二人と、ちよつとづつ二人に指示を出すお母さん。
「おぉー！ 上手に出来たなー！」

……で、その様子をビデオカメラを携えて見守るお父さん。
流石親父、抜かりない！

いや、でも気持ちは分かる。……二人可愛いから！

あの愛くるしい二人の姿といった r……

——しばらくお待ちください——

……あまりの可愛さに発狂してしまった。

録画した映像は後で見せてもらおう。

とりあえず今はまだ食パン食べきってないから急がないと！

「カトリア！ 遅れるわよー！」

「ごめん、お母さん！ 今行くー！」

玄関に居るお母さんに急かされてしまった。

えっ？ 『何で』ってそりゃあ二人の護衛のために決まってるでしょ。

あの可愛い二人が攫われでもしたらどうすんの！

36 私が過保護? ……良いお姉ちゃんだと言ってくれ。

……
過保護とか言うな。
世の中には危険が沢山あるんだよ!

突撃！ 隣じゃないけどゾルディック家！

九月三十日

私は少し汚れている名刺を見ながら電話を掛けていた。

「うーん……出るかな……」

プルルルル…

コール音3回。

4回目が鳴ろうとしたところで電話が繋がる。

『こちらゾルディック家使用人室。暗殺の御依頼なら現在受けと「あ、違うんです。私、カトリアつて言います」……ああ、ゼノ様の御友人。私、ゼノ様の専属の執事をさせてもらつておりますので話はよくよく聞かされております……十年経つても連絡来ないと。して、何の御用でしょうか？』

電話が繋がったのは使用人室のようだった。

十年間音沙汰無しは拙かったか。悪い事しちやったかな？

……というか当主になったのか、ホントに悪い事してるわ、私。

『……御用件は？』

「あ、御免なさい。えっとですね、近いうちに家族で訪問しようと思っていました。何時頃伺ってもいいのかなあ……」と思つた次第です」

『……はい? 御家族で、ですか?』

「そうです」

『そう、ですか……分かりました。今現在ゼノ様達は長期の依頼に出ておりました、帰ってくるのは一ヶ月ほど後になりますが……よろしいですか?』

「一カ月後……了解です。じゃ、一カ月後家族で訪問しますのでよろしく伝えといてください」

『……わかりました。それではまた、一カ月後に』

ガチャ

私は向こうの電話が切れるのを確認して受話器を置く。

これでアポイントは取れた。

あとは一カ月後を待つだけだ。

十月三十日。

前の世界では段々と冷え込んできたと感じるだろうこの季節に、私は生まれた。

今日は私の十五歳の誕生日である。

そして今は家族全員とクルーマウンテン行きのバスに乗っている。

「……十五年か……早いもんだなあ……」

「姉ちゃん、オッサンくさい……」

「もううるさいなあー。馬鹿ラディの癖に」

私が少し眩くと弟のラディストがすかさずツッコんで来る。

ラディストは父さん似の黒い髪を短めに切っていて、イケメンになりつつある。

あと、なんか最近生意気でお姉ちゃんとしてはちよつと悲しい。

「なっ！ 馬鹿じゃないし！ 姉ちゃんこそ学校行つて無いくせによくそんな事言えるなー！」

「ラディ。リア姉さん学校行つて無くても私達に勉強教えられるほど頭良いのに……何つまらない意地はつてんのさ（……確かにおっさん臭いけどね）」

「うぐう……」

で、妹のビスケットはそんな双子の兄をなだめる。

うーむ。仲良い事は良い事だ。

あ、あとビスケ。聞こえないように言つたつもりか知らないけど聞こえてるからね？

……いや、わざとか？

「はいはい、静かにしなさい二人とも。カトリアがおっさん臭いのは今に始まつた事

じゃ無いでしょう?」

「…はい」

…お母さんは今も若々しい。

この前幾つになつたか訊いたら40だつて。

やべーよ。まだ二十代後半にしか見えん。

今、空気になつて外の景色を眺めている父さんは母さんと同い年で、童顔から少し大人の雰囲気帯びて少しかつこよさが増している。ま、普段の行動が未だに若々しいけども。

ちなみに私は少しくすんだ金髪にウェーブがかかった髪型で、お父さん譲りの黒目。それからお母さんみたく将来に期待が持てる胸のサイズをしている。

別に毎日揉んだからということは決して無い。マジで。

ああいうのは、他の人のを揉むのが一番いいのだ。

自分が持つていても肩が凝るばかりでいい事なんて一つも無いんだから。

『…次のククルーマウンテンは暗殺一家、ゾルディックの私有地であり…』

つと、ガイドさん曰くそろそろ着くつぽい。

そろそろ降りる準備をしますかー。

「うおーでけー！」

「……………（開いた口がふさがらない）」

上から順にラヂイスト、ビスケット。

それぞれ1から7と数字が書かれている大きな扉を見て思い思いに驚いている。

まあ当然か。

私は五歳になる前来た事あるから別段と思うところは無い。

懐かしいなーって事ぐらいかな。

「いやー懐かしいわね……………前来たのは十年くらい前？」

「そうだな……………前はカトリアが四の扉まで開けたんだっけ？」

両親二人はうんうんと頷きながら感慨に耽ってる。

でもちよつと待て二人とも！

「え……………リア姉この扉開けたの?！」

「あつちの小さいほうの扉じゃなくて!？」

ほらあ……………今それ言ったらこうなるでしょうが。

「はあ……………そうだよ。多分二人も開けると思うけど？」

「はい!？」

そうだ。多分4の扉くらいは行くだろう。

なんせ今ではいつも使う箸ですら合計二百キロくらいなんだから。

軽いなーと思っていたら、いつの間にか重くなっていたという不思議。

私はまだ見ぬ両親の発じやないかと考える。

「ちよ、バスの中でも聞いたけど! …ホントに姉ちゃんの友達って暗殺一家なの!」

「そだよ」

「あはは……」

ラディは何処か目が虚ろで乾いた笑いを漏らしている。

……信じてなかったのか弟よ。

「じゃ、まずはビスケから開けてごらん」

「う、うん……」

父さんは固まっていたビスケットに声をかける。

ビスケは恐る恐る扉に近寄って遠慮がちに押す。

重いものを引きずる音がする。

結果……4の扉まで開けた。

「うそっ……!」

「うーん。4までか……。あ、そのまま中に入っといで」

「じゃ、次はラディね」

「う、ん……………ビスケにも出来たんだから僕にも出来る！」

ラディは扉まで近づくと、ビスケみたいに恐る恐るではなく力一杯押す。

そしてラディも自分の力に驚きながら、同じように4の扉を開けて入っていった。

「はあ……………次、私行くね。……………二人とも後であの二人に説明したほうがいいよ？」

「うん、そうね。後でしとく」

「あはは……………」

私は念無しに五の扉^{64t}を開け、両親は七の扉つまり256tの扉をこれまた念無しに開けて入った。

……………やっぱり怖いね。うちの家族。

それから遠くの方に見える大きな屋敷を目指しながら弟と妹の二人に、お父さんがハンターだという事、あの扉を開けた理由を話しつつ、えつちらおつちら家族仲良く歩いていった。

婚約者だと ……大人の階段、昇ったのか…?

敷地内に出てくる魔物などを軽く追い払いながら、程なくしてゾルディックの屋敷に着いた私達。

お父さんとお母さん二人に守られながら、びくびくとしていたビスケ達二人は今も絶え絶えで肩で息をするほど疲れている様子である。

両親二人がビスケ達に手をとられているので、私は一人魔物を蹴散らしていた。

……結構大きいサイズの犬?の魔獣が出てきたけれど、あれは原作に出てくるミケの血縁とかじゃなからうか? ……違うかな?

ま、いつか。

「ささ、二人ともへばってないで。もうちよつとだから頑張つて!」

「うえー……」

「も、もう…嫌……」

ばてている二人を元気付けているお母さんだが、それは結構酷いと思う。

二人とも念使えないんだから。

早く覚えさせた方がいいのかなあ……？ と私は考えつつお父さんと一緒に、屋敷の周辺を見ながら二人とお母さんを待つ。

「広いなあ……」

「そうだねえー」

うちとは大違いである。

……まあ当たり前か。

しばらくして家族5人で表玄関らしき扉の前に立つとひとりでに扉が開く。

「皆様、お待ちしておりました……当主様自らお会いになるそうです。さ、奥へどうぞ。

……あ、手荷物の方はこちらで預からせて頂きますのでそのメイドにお渡しください

い」

中からは執事らしき人とメイドさんが出てきた。

おお、メイドだ。

結構若い。

……あ、勿論由緒正しい格好をしている。

メイドさんに荷物を預け、執事さんについてく。

後ろでお父さんと並んで歩いているお母さんの手を握って着いて来ているビスケとラディは、始めて見る高そうな壺や絵画を珍しそうにして、キョロキョロと視線をさま

よわせている。

で、その様子を苦笑いしながら見つめるお母さんとお父さん。

……仲いいなあ。

と、私は後ろの様子を見るのを止め前を歩く執事さんの背中を見ようとして……

「——このヤローツ！」

前からいい年したお兄さんが念の籠ったとび蹴りしながら突っ込んできた。

すかさず私は廻をし腕を前にクロスさせ防御する。

金属を殴りつけた様な音をたて止まったお兄さんは跳びはねて音も無く廊下に着地した。

まあ、このお兄さんは彼な訳で。

「やっぱり防がれるのか……」

そして私は

「……お久しぶり、ゼノ君」

十年前、会ったきりの友人、ゼノールゾルディックと再会した。

「はあ……で、なんで今の今まで連絡無かったんだ？」

「いや、弟妹の事とか色々……ね？」

……絶対言えない。二人可愛さに忘れてたとか絶対言えない。

ゾルディック家の廊下でゼノと遭遇した後、ゼノの私室と思われる中華っぽい部屋に通されていた。

私以外は普通に客室に案内されていたから命の危険とかはなさそうだ。

いや、お父さんとお母さんいる時点で初めから危険なんて無いようなものなのだけだ。

つまりだ。

……逆に言うとは私は現在ピンチである。置らしき物が敷かれたこの部屋で正座をしつつゼノによる尋問を、私は甘んじて受けていた。

そして今ではゼノの愚痴を聞いている。

「……ふん。ま、仕方無かったんならいいけどさ。

ただ一つくらい連絡入れてくれたって良かったじゃないか。……俺から連絡しようと思っても連絡先知らないし。それに住所すら教えてもらってないから、直接会いに行く訳にも行かないしな……」

うわあ……暗殺一家の当主凹んでる。

ヤバイ。罪悪感がハンパ無い。

「いや……私も色々忙しかったから……ごめん」

うう……マジで御免よ……ゼノ。

ただ、そろそろ話題転換させた方がいいかなあ。

今のまま空気悪い状態なのも困るし。

「……とりあえず、さ。此処十年なにかあったか互いに情報交換しよ?」

「はあ……? ……そうだな、そうするか……じゃ、まずお前かr」ゼノからどうぞ?」……

はあ。わかったよ。それじゃ話す……」

ゼノの言葉を遮り、私は彼から話をさせる。

だって私の事なんて、修行して弟妹の護衛して世話して……くらいしかして無いから聞いても面白く無いだろうしね。

「……で、最近婚約者が出来たかな」

「はい? ……婚約者が出来た?」

うわ、マジか。

……しばらく話を聞いていると最近の出来事になってきた。

そこまでの話の内容としては、ゼノが念を覚えたり、当主になったり、その事を私に伝えたかった等を聞いた。

いや、私に知らせたかった云々は暗に言っていないかったが、態度に表れていた。

くうく……うい奴め。

それで、今ゼノは少し気恥ずかしそうに婚約者が出来た話を頬を掻きながらしている。

……うん。ゼノはクーデレだ。

私はニヤニヤとしそうになるのを抑えて、ゼノに相手の……婚約者の事を訊く。

「それで……その相手は？」

「ああ、同業者の娘。」

嫁入りだから相手側からとやかく言われる事は無いと思うから良いのだが、ただ

……」

「ただ？」

……歳が十歳も離れているとかじゃないよな？

「……どう彼女と接したらいいか判らなくてだな……どうしたらいいと思う？」

あー……良かった、違つたみたいだ。

どうしたらいい……か。

「笑えば……いいと思うよ？」

「……はい？」

いや、冗談で言ってるんじゃない、私の予想では多分ゼノは緊張して相手の前では冷

たく接してそうだと。

なので私は掻い摘んで理由をゼノに話す。

「あー…なるほどな、確かにそうかもしれない。今度試してみる事にするよ…で、そっちの方はどうなんだ？ あの後200階クラスでフロアマスターになったって言うのを風の噂で聞いたんだけども。ってそうだ！ お前あの時から念使えたのか！」

「あーあ！ ちょっと待つて…順を追って説明するから。じゃ、まずは別れた後のことから…」

こうして私はゼノと別れた後の事を説明していき、私が転生者だということは伏せて、念は両親から教えてもらった事、帰ったら家族が増えていてビックリしてしまったことなどを話した。

…ただ、私より両親の方が強いという事が発覚して呆れられたり、弟妹可愛さにゼノ事を忘れていた事がバレて怒られたりしたのは、余談としてしておこうと思う。

ハンター試験に向けて。……あ、いや私じゃないよ？

ゾルディック家で軽く二、三日ほど泊めて貰い、帰ってきた私達五人はいつもより遅い朝ごはんを食べていた。

ま、理由としては全員が全員寝坊したからなんだけども。

ちなみに二、三日ゾルディックでしていた事といえば、ゼノの婚約者との会話、ゼノとのガチバトル、両親とゼノのお爺ちゃん……マハさんの手合せ。

それからゾルディック式暗殺術を両親が習ったくらいである。

いや、暗殺術とか一朝一夕で覚えられるもんじゃないんだよ、本当は。

でも一日で習得しやりましたよ！ あの二人は！

あー……やだやだ。

チートにも程があると思います！

……はあ。

それから私とゼノとのガチバトルは私の臨を使った圧勝。

『絶並みに気配が無い癖して、堅してる時と同じくらいの防御力と攻撃力があるとか反

則だー！』とか言っていたので、私に勝てたら教えてあげると提案したら、ゼノは喜んで提案に飛びつき20回ほど手合せさせられた。

要所所で廻とか使ったが仕方ないと思う。

私一応女の子だからコレくらいのはンデは……ね？

ま、でもあまりにしつこかったので仕方なく、臨だけ教えてあげた。

……絶対に他言無用という条件で。マハさんにも、家族にもである。

お父さんから、あまり広めたらダメだと言われたので致し方ない。

二人もマハさんには、廻や臨、剛については教えて無いとのことだから広められては困る。

……ゼノの婚約者とは、ゼノの仲介で知り合った。

コレがまた大和撫子の代名詞かと言いたくなる様な、おっとりとした美人だった。

ただ、私と顔を合わせた時、ゼノが浮気したんじゃないかと心配になったらしく震えていた。

勿論ちゃんと説明して誤解は解いた。

その後は政略結婚とは言え、ゼノの好きな所や今のゼノに対する気持ち、本人の目の前で聞いたり。ゼノが『接し方がわからない。どうすればいい？』と私に聞いてきた事をばらしたりして私としては、大いに楽しんだ。

うん。あの人はゼノには勿体無いくらい可愛らしかった。

……さてと。ここ数日の事を思い出しつつ食べていたらいつの間にか朝食を食べきっていたので、ご馳走様をする。

「ご馳走様でした……じゃ、私部屋に戻るから」

「あ、ちよつと待って姉ちゃん。ビスケと俺、大事な話があるから」

「うん、だからちよつと待って」

「う、うん。いいけど……」

それから私は部屋に戻って修行しようとして席を立とうとすると、ラディとビスケが真剣な顔して引き止めるので、仕方なく席に着く。

……どうしたんだろ？

思えば私より先に食べ終わっていたお父さんもイスに座ったままだ。

ちなみにお父さんとビスケ達は職場と学校にお休みを取って、此処一週間程は何処にも出ていない。

私の誕生日祝いとして予定を空けてくれていたらしい。

……知った時はちよつとホロリと来たね。

こんな無駄思考はともかく。

お母さんが席に座るのを待っていたラデイとビスケは、真剣な表情のまま話を切り出す。

「ごめんね、姉ちゃんに父さんたち。ちよつと俺たち相談事があつて……」

「……うん」

ビスケはラデイの言葉に続いて頷く。

ラデイは私とお父さん達を一度見渡し、切り出す。

「俺達……ハンターになろうと思うんだ」

「私達もハンターになりたいの。お父さんみたいに」

うんうん、なるほどなるほど。

私はわかった。

ただ父さんたちはというと、

「……二人はハンターになつて何がしたい？」

「私も同じ。二人とも何か目的があるの？」

「それは……」

「……」

黙り込む二人を見てお父さんは二人に話し続ける。

「父さんは戸籍が無かったから仕方なくハンター証が必要になった。ただお前達は……何がしたいんだ？」

「僕は……私は宝石ハンターになりたい……！」

「……宝石ハンターねえ……いいんじゃないの？ ビスケは昔から宝石とか好きだったしね」

「え……う、うん！」

ビスケはお母さんに認められたようで嬉しそうだ。

「じゃ、ラディはどう？ なにかある？」

お母さんはビスケに話を遮られたラディに今度は話を聞く。

「まだ、決まってる……でも！」

「……でも？」

「僕は世界を見てまわりたいんだ！ だから……」

ラディは拳を握り締め必死な様子。

それに対してお父さんは……

「うん、いいよ」

さっきまでの雰囲気とは違い、空気が少し軽くなる。

そりゃあそうか。お父さん少し念出してたもん。

「……へっ？」

ラディは空気の変わりように驚き声を上げる。

「だから、二人がハンターになるのを認めていいよ」

「……ほ、ホントに！」

「……や、やった！ やったよー！」

お父さんのお許しが出た二人はイスから立ち上がり、思い思いに喜んでいる。

「ただー！」

喜んでいる二人は動きを止め、声の主であるお母さんを見る。

「これから始める修行が無事終わったら……ね？」

「ひいっ！」

あー……だろうと思った。

それにしてもお母さん………いい笑顔してるわ。

ラディストとビスケットが念の修行を始めてから早くも一年が過ぎた。

一年で変わった事といえば二人が小学校、中学校を飛び級し卒業した事。

二人はハンター試験に向けての本格的な修行をするためあの話し合いの後日、二人に飛び級試験を受けさせた。

勉強は元より両親（偶に私）が教えていたのだが、試験を終えた二人に話を聞くと、どうにも試験内容が簡単すぎたらしい。

両親曰く、前世……つまり私がいた現代の中学修業レベルまでしか教えていなかったらしいので、この時代の勉強のレベルが低いのだと思う。

次に念の修行。

始めの一週間で二人とも精孔を開き、二週間で纏と絶を修得。

三週間で練ができるようになり、四週間で堅が二十分ほど続くようになって、おまけに凝と周を習得。

流も四週間の終わりに基礎が固まってきた。

五週間目には円が二人とも50m、隠と硬もいつの間にか習得していた。

いや、二人がチートなんじゃなくて両親の教え方が上手いんだ。

なんだろう……きつと両親二人にかかわった人間はみんなチートになるような気がするよ……ははは。

あ、でも精孔がすぐ開いたのは、恐らく私と両親のオーラに当てられたせいだ。

……訂正、私と関わってもチートになりそうだ。

そして練が出来るようになって行った水見式ではラディが特質、ビスケが変化だった。

ビスケについては予想通りだったが、本人は両親と違ったので残念そうだった。

ただ、私も変化系だということを教えてあげると、少し元気が戻った。

うむ、大変可愛いらしかった。

思わず抱きついてしまったのは仕方ないと思う。

離れたとき私の胸で窒息して気絶してた件についてはホントごめん。

それから半年ほどは系統別訓練と基本の四大行と一般的な応用技の技術の向上をしていき、偶に私や両親と組み手をしつつ過ごしていたのだが、それからが二人にとって地獄だった。

何かと聞かれれば勿論、臨・廻・剛の三つの応用技の修行の事だ。

臨にしてみれば、絶をしたまま体内で練をするといった、半年間で学んでいた事を覆されるような応用技だし。

廻なんてのは体内でオーラを高速で循環させつつ体外に出さないといった、オーラ操作が流の数倍難しいし。

剛に至っては……臨・廻の二つができない事には話にならないし。

まさに二人にとっては地獄以外のなにものでも無い。

しかし、この三つができない事にはハンターになる事は絶対に認めない、とお父さんもお母さんも言っているのだからやるしかなかった。

下手なハンター試験よりも難しい気がするが、言っちゃおしまいなので気にしたらいけない。

……軟やわな考えで生き残れるほどハンターの世界は甘くないのだから。

そして二人がハンターになると決意して一年後の今日。

——廻と臨が二人は出来るようになっていた。

勿論剛は出来るそぶりも見せていないが、二人にとっては確かな進歩だ。

また同時に臨と廻の習得は、

「ラディとビスケ、天空闘技場200階以上で十勝して来なさい」

「いってらっしゃい！」

「えっ?!」

……お父さんとお母さんからのお小遣い稼ぎのお許しがでる事も意味していた。

二人のスカウトだって……私はされないよね？

下の二人がお小遣い稼ぎ……もとい、天空闘技場に参加するため家から出て行った翌年。久しく連絡が取れなかった二人が家に電話をかけてきた。

二人が電話をかけてきたということはつまり、

「200階に到達したのか……」

『うん？ そうだけど……どしたの姉ちゃん、感慨深い声出して』

「あ、いや、懐かしいなーって思ったただだから気にしなくてもいいよ。……それで、元氣してた？」

『うん、元氣してたよ。あ、勿論ピスケも元氣にしてる。……ところで姉ちゃん昔フロアマスターだったの？ ……なんか “あの幼児と知り合いか!” とか “もしかしてあの子の御兄弟?!” とか審判の男の人とか、受付のお姉さんや解説のお姉さんが言ってたんだけど……』

うわっ！ 懐かしー……。

「うん、それ私だわ。なんか迷惑かかってた？」

『……確か俺たち生まれる前には200階来てたんだよね』

「うん」

『つてことはカトリア姉ちゃん6歳の時にフロアマスターなつてたの!』

「えつと……………ごめん?」

『はあー……………ま、姉ちゃんが規格外だつて事はずっと前からわかつてた事だから……………もうあきらめてるよ』

……………電話先からため息が聞こえる。

「なんか御免ね?」

『いいよ、別に。それよりさー聞いて欲しい事があるんだよ』

「うん? お父さん達には言つた事?」

『いや、まだ言つてない。それがさ……………』

多分お父さんやお母さんにまだ話してないような事は重要じゃ無いだろうと、聞き流しつつ此処一年間の私を振り返る。

……………弟妹二人から、200階に到達するまでは連絡はしないとわれ待ち続けること一年間。

この一年間は頭の隅でラディは元気にしているか、ビスケは悪い人に捕まっていたりしてないだろうか、と考えて修行に身が入らなかつた。

初めにお父さん、次にお母さんが電話に出て、ようやく私の番がまわってきて二人の

元気な声を聞いたときは泣きそうになった。

うん、でも二人が元気なら私は良いんだ。

可愛い弟と妹に会えなくてもっ……！

「ううう……二人に会いたいよ……！」

『……きゅ、急にでた。姉ちゃんのブラコン・シスコン……！ やめてよ、恥ずかしいんだから！ ……おいビスケ！ なに笑ってんだよ。ば、馬鹿！ 後でかわったとき姉ちゃんに変な事言うなよ！ ……って、ああー！ もう！ 姉ちゃんも俺の話聞いて無いし！』

「うん……？ ああ、ごめんごめん聞いてなかった。で、なんだって？」

いかんいかん、本音がもれてた。

『はあ……それがさ、試合見に来てた変なお爺ちゃんに “一番弟子にならないかって誘われてんの……どうしたらいい？”』

うん？ ……変なお爺ちゃん？

「あー……えっと、ちなみにそのご老人の名前は聞いた？」

『うん、なんか……ネテルだかネテラとか言ってた』

『……ちよつとごめん。後でかけ直す……』

——ガチャリ。

ふうー……。

「おとーさん！ おかーさん！ 家族会議ツー!!」

お母さんが皿を落としそうになり、新聞を広げつつソファアームに座って舟を漕いでいたお父さんは『何事か!』とキョロキョロしながら目を覚ました。

全然重要な話じゃん弟よ……

「……じゃあ、二人がネテロの弟子になるのは賛成という事で。……それから、私としては不本意ながら一度顔合わせをする……で、OK?」

家族会議で議長をしていたお母さんが言う。

「OK!」

「……私も不本意ながらおーけー……」

全然不本意じゃないのはお父さんのみである。

くっ……お父さんめ、ネテロ会長と手合せしたんだなんて!

家族会議は30分ほどかかり、結果二人の様子を見ると同時にビスケとラディを一番弟子にしたいらしいネテロに会いに行く事になった。

私の予想では、ネテロが二人に声をかけた理由は、二人の事を私の親族、又は縁ある人物だと判断したためだろう。

あー……私も手合せ付き合わされるんだらうなあ……。

確かに可愛い息子達の預け先が本当に大丈夫なのか、気になる気持ちはわからんでも無いけども。

だからといってなんで私も会わなきゃならんのだあー！

まだ決まった訳じゃないけど！

私の本能が「絶対手合せするだらうな」っていつてるんだよお……

「……それじゃ、これから会いに行こう！」

「おおー……」

……マジ不本意。

二人の電話から三日ほどして天空闘技場についた私達三人は、ラヂイストが貰った部屋で一人の老人と対面していた。

「……一人は此処天空闘技場で最年少のフロアマスターとなり、早々に行方をくらましたカトリアールクルーガー。一人はハンターの中でも特異な運輸会社のサラリーマンをやっており、ある意味得体が知れないデイトライトールクルーガー。おまけにその妻も念能力者とは……ホント何者じゃよ」

言わずもがなネテロ会長である。

ラデイの部屋に入ったらいたのでビックリした。

二人はビスケの部屋に移ってもらってる。

ちなみに部屋番号を聞くため受付で私の名を名乗ったら、著名人の如く扱われた。

そんなに有名になってたのか、私。

「……ははは、会長。僕はハンターのつもりは無いんですよ？ 試験を受けたのはホン

トに戸籍が欲しかっただけですから」

「そうじゃのう。確かにあの時の記録にはそう書いてあつたな」

うん、そうだろう。

お父さんはトリップしてきた訳だから。

そのためじゃないとお父さんはハンター試験を受けなかったと思う。

「……しかし、しかしじゃ。こうしてお前さんの近くには、双子にその娘……そしてお前さんの伴侶までもが念能力者。ハンターのお前さん以外に念が使える者が四人もいるのじゃ。」

……それなのに、“お前さんが何も企んでいないと考えるな”と言われるほうが無理な話ではないか？」

……確かに。

「そうですね。……ですが私達は特に企み事なんてしてないですよ？ ま、強いて言う

ならば、この過酷な世界を生き抜くために画策している、とでも言っておきましょうか」
今まで黙っていたお母さんは、父さんを弁護するためネテロに反論した。

「……客観的にこの世界を見れば会長でも自ずとわかります。僕も妻と同じで客観的にこの世界を見た故で子供達に念を教えますから。念という能力の存在や、災害指定級の生物が跋扈するこの世界を生きぬく為には念能力が必要だと判断した上で。」

お父さんもお母さんに続いて自身の考えを言う。

私も同じく、客観的に見た上でこの世界で生き残るため念を習得した。

お父さんたちが言う『客観的』はハンター×ハンターを読んでいたあの時の事だろう。言い方を変えてはいるけど確かに説得力がある。

「ふーむ……わからんでもないの。納得した事にしよう。

……よし、これでこの件はお終いじゃ。それで、あの双子についてなのじゃが、わたしに預けるつもりは無いかの？」

「納得してもらいありがとうございます。二人については預けてもかまいません。ただ

……」

「……ただ？」

こ、この流れは……

「その前に僕と手合せ願いますか？」

「ほう……」

やっぱりお父さんやるんだー。

……どうか私には飛び火しませんように。

「………なら後で娘さんともやらせて貰おうかの？」

——イ、イヤーツ!!

別に私が太っている訳ではなく、貴女のサイズが大きいんです！

ビスケットの部屋にお母さんと一緒に泊まる事になった私はお風呂から出て、ウエーブのかかった髪から滴る水滴をタオルで拭き取る。

そして次にドライヤーで髪痛めないように乾かしながら地肌に残っている水分を拭き取る。

昔……前世を思い返せば碌にドライヤーを使った記憶が無い……うん、というかちゃんと髪を拭いた憶えも無いような気がする。

……今ではちゃんと髪の手入れをしないとお母さんに『将来禿げるわよ……』と脅されるので馴れた作業だけ……。

そして髪が乾いた後はポケットマネーで買った結構高めの化粧水を少し手にとって顔に塗る。

私は元が良いので化粧はしないんだけど、コレもまたお母さんに『化粧水だけはしときなさい』と言われるのでやっている。

お母さんも前世は男だったはずなんだけど、なんでこんな女子力高いんだろ。

……疑問に思うと恐い目に遭いそうなのでこの辺で止めとこう。

部屋に備え付けの回転椅子に座って、ちよつと今日あった出来事を思い返す。

——ネテロ会長と三日後に此処：天空闘技場200階台の戦闘フロアで手合せをする約束をした。

私とお父さんが、だ。

……真に遺憾でござる。

何で私なんだよ！ 私とやるくらいならお母さんとやって下さい、お願いします！

(土下座)

ちなみにフロアが借りたのは『元フロアマスターの私とハンター協会会長のエキシビジョンマッチを行う』と天空闘技場に申請したためである。

そして『観客を入れていいのなら』ということでもOKがでた。

また、既に観戦のためのチケット、公式賭博が開催されている。

——余談だけれども倍率は私が200倍、ネテロ会長が1.1倍。

おまけに予定変更で私が戦った後、ギャラリーが居なくなってお父さんが戦うことに……。

なんだかお父さんと会長が戦う事がメインなのに、私とネテロ会長の試合がメイン行事になっている気がする。

……はあ。

——で、私としてはしたくなかった約束の後、下の双子二人に事の顛末を話すと、二人は『あの爺さん何者?!』と疑問に思っていたようなので、ハンター協会の会長である事を教えた。

二人は、自分達をスカウトしてきた人物がまさかハンター協会会長その人だなんて想像出来ていたはずもなくかなり驚き、また『ハンターに一步近づけた』と喜んでくれた。少し話は変わるけど、私は原作と同じ第287期のハンター試験を受けようと思っている。

ただそれまでには45年近い期間がある。

そしてもし弟達がハンター試験に合格したときには『どうして試験受けないの』的な事を言われるに違いない。なにせハンター試験と両親による念の修行では、念の修行の方があきらかに難易度が高い。

普通の念の修行でさえハンター試験の裏試験と評されるくらいだから当然の事だろうけどね。

……そして三日後に迫るネテロ会長との手合せでは済まなくなってきた試合ではお父さんが十二支ん並みに注目される事は勿論、私が勝ち負け関係なく、また自惚れでもなく会長自身にハンターとなる事を薦められる可能性が高い。

そうなればこれから先45年もの間、肉親である双子とハンター協会のトップからの追及から逃げ続けなければいけない……そして逃げ続ける事は多分私には無理。

「はあ……」

……あくまで全部、可能性があるというだけだけど。

無駄な気苦労かなあ……。

「出たわよ〜ってあら？ どうしたのカトリア、ため息なんてついちゃって……」

「……いや、ハンター試験受けるの早めるべきかなって考えててね。……ところでビスケは？」

「うん〜？ ぐったりしてたからもう少ししたら出てくるんじゃない？」

「……ぐったりしてるの、お母さんのせいでしょ？」

「テヘツ☆」

「くっ……無駄に可愛いな……」

「……無駄は余計よ♪」

私がイスに座ってぐるぐると回転しながら思考に耽っていると、ビスケが先にお風呂に入っていた所へ突撃して一緒に入っていたお母さんが出てきた。

長い髪を頭に巻いたタオルの中に入れて胸元でタオルを巻いているスタイルで。

胸がでかいので下半身がタオルの丈ぎりぎり隠れている。

狙っているやつてるのか実に艶かしい。別に慣れたからムラツと来たりしないけど。

……私も下着姿だから似たようなものだし。

「……それで何でハンター試験早めに受けようなんて考えてるの?」

持ってきた旅行鞆から下着を選びながらお母さんは私に聞いてくる。

「うん。ビスケ達二人が合格したらきつと私に『何でならないの?』とか追及してきそうだし、三日後のネテロ会長との試合が終わったら絶対勧誘されそうだし……」

「なるほどねえ……私はもう四十だし、念が使えるただの専業主婦だし、今の生活満足してるからなんとも言えないけどねえ……」

お母さんは選んだ下着をつけながら……つて、

「お母さん、それ私の……」

——何がと言わないけど。

「あ、ホント。どおりでフックがかからなかった訳ね。ちよつとサイズも小さいし……」
というか貴女のが大きいんですうー!!

私のより痩せてて二周りほどサイズ大きいのにフックが掛かるわけがない。

……確信犯め。

ちなみに私はG。……何がと言わないけども!

お母さんは「まだまだだねえー」と言いながら自分のを選びなおしてつけている。

「うん、とりあえず私が言える事は……」

「……ことは？」

「こまけえことは気にすんな！」

「……はい？」

サムズアップしてニコリと笑うお母さん。

私いま『何言つてんだコイツ』みたいな顔になつてる気がする。

「うっ……いやそんな顔しなくても……結構本気で言つてるのよ、私。——今気にしてもわからないこと、気にしだしたら限りがないじゃないの……その時その時考えていけばいいと思うわよ？」

……確かに。

「そっか。そうだよね、その時考えればいいか……」

「そう。いま考えても答えはでないし、ね？」

うん、なんだかすつきりした。

お母さんがお母さんでよかった……ちよつと尊敬。

「ありがとう、レミリアお母さん」

「……どういたしまして」

「……とここでビスケ出てくるの遅くない?」

「そうねー……って、ちよつとやばいかも!!」

この後、浴槽の中で気絶していたビスケは無事救出された。

本人曰く、『カラダ中揉まれた。もうお嫁にいけない……ぐすん』とのこと。

——まったく、お母さんって人は……。

試合、私棄権しても……あ、ダメですかそうですか。

ネテロ会長との試合二日前。

私は裸になり、姿見の前に立って鏡に映る自分を見ていた。
何故か。

それは私の作った能力の説明が必要になる。

……私は全裸の自分を見て喜ぶような趣向は無いからね？

確かに元男として自分でも惚れ惚れとするようなプロポジションを持っている事は違い無いのだけでも。
とりあえず一つ目の能力の説明。

【理の眼】

・操作系

自分の生息情報（念も含む）を読み取る。

・制約と誓約

鏡の前に立って全身を見れる状態で無いと発動しない。

凝をしていなければならない。

1分間その場から動いてはいけない。

動けない1分間の間誰かに見られると発動しない。

前世の記憶は読み取れない。

……ご覧のようにかなり発動条件が限られてくる。

記憶や生態情報を読み取ったりするのは特質系だろうと考えたが、自分の生態情報に限っては操作系でも何とかできるんじゃないかと考えた次第だ。

そして結局のところ出来たか出来てないか。

結果で言うとな出来た……ただ物凄く頭が痛い。

何コレ、死ぬ！　ってレベルの痛さだ。とつさに念で脳みそ強化出来てなかったら多分死んでた。

得られた情報は体重や身長、スリーサイズ。遺伝子の配列、病気の有無、念の得意不得意、忘れていた記憶から何から何まで。

前世の記憶まで読み取らなくてほんとに良かったと思う。

30年に及ぶ記憶だ。交通事故で死んだ時の痛みの記憶まで思い出したら吐いていた。

今度発動した時は一度見てるからそこまでの情報量にならないと思うけど、この頭痛は覚悟しておこう。

もう一つの念能力は私の残りのメモリ、全てつき込むような能力だ。

ただ発動できれば、それこそ神の御業であり、残りのメモリ全て費やしたとしてもお釣りが帰ってくるほどの能力だ。

ただ今行った生態情報を知るという前提が必要で、おまけに制約と誓約を此処までか、と思うくらい厳しくしないと発動できなかった。

生態情報を知る事が能力の行使に必ずいるかと聞かれれば、実際の所知らなくても使える。

知っていないと後々後悔する事になる事が目に見えているから知る必要があった。

もう一つの能力。それは……

「姉ちゃん入るよー……は？」

私の姿を見て段々と赤くなるラディスト。

うん？　なんでだ？

「ラディ？　……いや、ら、らラディストおッ！」

そういや今、全裸じゃん私！　弟に痴女扱いされるーっ！

「な、なんで姉ちゃん裸で鏡の前座ってんのッ！」

「の、ノックしてから入れーッ！　バカーッ！」

「うわっ、ちよ、念弾飛ばすなーっ！」

「煩い五月蠅いうるさーい！」

うう……ノックくらいしろお……。

案の定両親とビスケに、鏡の前に真っ裸で座っていた事がラディスト経由で伝わり、家族全員から大笑いされた。

そんな中服を着た私は、肩をすぼめつつ念能力の行使に必要なだった事を話すと『それなら仕方ないね（笑）』と半信半疑だが一応納得してもらえた。

——ラディめ、一生恨んでやる……。

で、そんな事があったのが二日前の夜。

今日はネテロ会長との試合だ。

私は万全の態勢で試合に挑むため廻をしつつ、体力の回復と精神統一をする。

廻は実の所、オーラの循環速度を上げる事で通常の絶よりも体力の回復が出来る。

循環速度を上げれば上げるほど防御力も上がるので戦闘中の体力回復にはもってこい。速度が早いと、例を挙げるなら擦り傷なんかは一分くらいで完治してしまう。

しかしお父さんは広めようとはしない。何故なら悪用されるのを防ぐためだ。

——臨、廻、剛。

傍から見るだけなら、どれも世間一般には防御力がなくなる絶の状態にしか見えな
い。

廻や臨が悪用されれば人目を忍んでの犯罪が増え、才能はあるが指定級犯罪者になっ
ている人物達……幻影旅団の団員達が覚えればそれこそ手に負えなくなる。

だからこそお父さんは世間に広めない。

私はゼノにこそ臨を教えたが、ゼノの祖父であるマハさんにも、ついこの前生まれ
らしいシルバにさえも、教えてはダメだときつく脅しをかけておいた。

……アイツも親ばかになってたっぼいから教えそうだけど。

「ふう……」

目を開けて瞑想である点を解くと、時計は試合二時間前の時刻を示していた。

……私が瞑想してから優に一時間近く経っている。

さてそろそろ、

「……死地へと逝きましようかね、と」

——やかましい。

それがステージに出たときの私の感想だ。

私のジーンズを履いた足が光の下に出た瞬間のあのギャラリーの声と言ったら。

なんだ、『俺だー結婚してくれッ!』とか○chスレッドのようなテンションの高さは！……結婚なんてしてやるものかバカヤロウ。

「ふむ、人気じゃのう。カトリアちゃんよ」

「はあ……喧しいだけですつての。……この試合私の負けでいいですから勘弁してくださいませんか？」

「い・や・じゃ♪」

……こんのジジイ。

いいさいいさ、やってやろうじゃんか。

こんな試合、玉砕覚悟じゃーッ!

アナウンスによってルール確認が行われる。

ルール内容は

・観客席にまで及ぶような広域攻撃は禁止。

——以上。

単純明快すぎる……。

私は少々呆れながらも、周りのギャラリーからの試合開始を告げる5カウントの中、試合前から行ってた絶を剛に切り替え初撃に備える。

自分の体からオーラが流れ出るぎりぎりまで臨をし、臨で出来た膨大な量のオーラを廻りて身体奥底から高速でかき回すように循環させる。

会長は、堅ではなく絶をしている事に少し短い顎鬚を弄りながら私を興味深げに堅をして見ている。

ちなみにだが、もちろんの事会長は心Tーシャツは着ていない。

ネテロ会長、私が子供だからって甘く見ないほうがいいと思うけど。

……なんせ今の私は全力全開なのだから。

そして私が自然体のままネテロ会長の様子見をしている中、ギャラーリーからは『0』のカウントが数えられた。

『……両者共に——ファイッ！』

アナウンスが試合開始を告げる。

試合開始と同時に私はステージに足を踏み込み動く。

その踏み込みで私の立っていたステージの半分が壊れた。

……くそっ壊れたせいであまり加速できなかったっ！

私は、過ぎた事は仕方ないと高速化された頭で切捨て、そのままネテロ会長に音速に近い速さで近づく。

「……………」

——一発。

……会長の懐に入り込み、水月に掌底を一発入れる。

そして肉と肉が決して出してはいけない音が響く。

どうだ？

相手からは反応がなく、いまいち決まったとは思えない。

……良くて内臓、悪くて骨か。

踏み込んでいる私から見れば少し高い位置にあるネテロ会長の顔を見上げる。

——この人は笑っていた。心底嬉しそうにしながら。……まるで新しいおもちゃを見つけたときの童子のように目を輝かせながら。

「此処までとは嬉しいな……それに効いたぞ。……そしてまだまだ捨てたもんじゃないこの世界に感謝するぜっ！」

「くっ……！」

嫌な予感がし、私はその場からバックステップで飛び退く。

……正解だった。

私が居た所にはあの音速を超える正拳突きが打ち込まれていた。

ネテロ会長は口から血の混じった唾を吐き捨て、正拳突きの構えを解く。

——内臓は破壊できたのか。

「ふん、避けるか……ではコレは避けれるかッ！」
「なっ……！」

——《百式観音・三乃拳》

そして私は、ネテロ会長の背後に現れた観音と、左右から迫る手のひらを最後に見て意識を失った。

試合後、全治三ヶ月……一週間の間違いでは？

私が目を覚ましたのは天空闘技場近くの総合病院だった。

目を覚ましたのが二日前。

会長と私の試合があつたのが四日前。

最後の《百式観音・三乃拳》をくらつて二日も眠っていたのだ。

「……林檎いる？」

「うん、食べる」

今はお母さんが見舞いに来てくれていて、私の世話をしてくれている。

聞いたところ全治三ヶ月の全身打撲に全身の骨にヒビ。

うん、一人で着替えとかまず無理。

絶賛全盛期なう、であるネテロ会長の攻撃を受けて治療に三ヶ月は、結果としてはいい結果が残せたと思う。

最後にしていたのが剛じゃなく廻や臨だけだったらもつと酷い事になっていた……舐めてかかっていたのは私のほうかも。

何で一発しか入れなかった、私。

はあ……。

ま、初めから負け戦だと思つてやつてたから負けても仕方ないっちゃ仕方ない。

……そして私が寝ている間に“お父さんがネテロ会長を手合せを行つた”と今見舞いに来てくれたお母さんから聞いた。お母さんだけなのは、ビスケやラディはお父さんの方にお見舞いに行つたからだ。

お父さんの容態と言えば、発の行使でオーラを枯渇しかかつたらしい。

彼らの、ウチのお母さんしかギャラリーの居ない試合は、辛くもお父さんの勝利だった。

何故ならお父さんの能力《一抹ならぬ引力／インフィニット・グラビティ》による単純な肉弾戦と化したからである。

能力の詳細は、簡単にまとめると円の出せる範囲内で引力を発生させたり重力を操る能力だと説明を受けた。

発生させた引力や重力はオーラにすら干渉し、具現化させられたあの千手観音ですら動く事が出来ず、会長の最高のアドバンテージである《百式観音》を封じ、私より俄然精度の高い剛と堅、鍛えた肉体と技同士ぶつかり合い、ぎりぎりのところで勝つたと聞いた。

というかお父さん、どんだけ重力大きくしたんですか。

多分百式観音が動かなくなるレベルって何千万トンとかのレベルだと思う。

あと何でウチの箸や小物が百キロや二百キロといった重さだったのかようと謎が解けたので、能力を知ったとき少しすっきりした。

ちなみにネテロ会長は、やはり私との戦いで内臓をやったらしいのだが、お母さんの《完全治癒／オールリカバリ》によつて私と戦う前のダメージの無い状態に戻したらしい。

お父さんにやってないのは『ちょっと痛い思いしておいたほうがいいのよ』とお仕置きしたいが為だと……ただ何処か堪えている様子だったので本心としては治してあげたいのだと思う。

それでも、無茶をするつて言い出したお父さんが悪いんだし、それに一歩間違えば私じゃなくお母さんも巻き込まれそうになったから、反省しろつて言うのも本心だと思うけど。

お母さんの《完全治癒》は対象の記録しておいた時間の状態に、記憶以外戻すというもの。なので修行の後使つたりすると、時間が巻き戻るわけだから修行をした意味が無い。

あと死人には使えないとか色々誓約があるそうだが割愛。

で、結局の所使うのは、もつぱら実戦の後とか治せないような怪我をしたときくらい

だ。

——私は今回ネテロ会長に対して浅はかな考えだったのを戒めるため、してもらっていない……自力で治すつもりでいる。

とりあえず話を総合すると……ウチの両親マジパナイ。

でもそんなチートで半端無い二人だけど、

「……林檎剥いたけど、自分で食べられる？」

「無理かも……お母さん食べさせて」

「はいはい♪」

……優しい事には変わりない。

さて私が目を覚まして一週間。

今では骨も完全に治って試合前よりも元気かもしれない。

全治三ヶ月？ ……廻が使える私に抜かりはなかった！

と、おふぎけもさせておき、今は私の主治医である先生に体を見てもらっている。

ボーイッシュな感じの女の先生だ。

第一印象は男女問わず好かれそうって感じ。

「うん、むくみも見当たらないしレントゲンにもひびは見当たらない………完治して

るね。まったく君といい、君のお父さんといい何でこうも医者泣かせなんだろうね……」

「ははは……」

——まさか、念能力者だからなんですーなんて言える訳無いよね！

「……ま、いいさ。元気な事には変わりない……もう退院してもいいよ。ただし、一週間は様子をみて無茶な事はしない事。わかった？」

「はい。じゃ、今日でもう帰ります……ありがとうございました」

「うん、もう来る事が無いようにね。身体は大事にしないとだめだよ？」

「はーい。それでは失礼しまーす」

私は深く礼をして診察室を出る。

ふうー……一週間何もする事がなくて暇だった。

実は剛をして四時間くらいボーっとしてたら直ったなんていえるわけが無い。

じゃあ一週間何してたか？

読書したり怪我人をいいことにビスケやラデイに抱きついたりしてました。

はっはっは、笑いたければ笑うがいいさ。

あの二人が可愛すぎるのが悪い。

恨むなら自分を恨むのだなあ！（おい

と、心の中でセルフツツコミをしながら、私は院内の出口に向かって廊下を歩く。着替えとかの荷物はずっと前から私が完治している事知っていた両親に先に持って出してもらっている。

忘れ物は無いは？「おお、お嬢ちゃん。ちよつと相談があるんじゃないか……いいかの？」

……。

「うわーこの人セクハラですうー（棒）」

「そんな棒読みで人聞きの悪い事言うんじゃないわ！」

ゴスツ

「いだい、なぐら、れだ……」

「はあ……お前さん、わしの事嫌いじゃろ？」

「なにを当たり前な事を。試合したくないオーラ出してたのに試合させられて……なにが『お嬢さんと出来ないんなら試合せんもん、わし』って。駄々っ子ですかっ！ それに最後はつちやけて私に必殺技っぽいのは放ってくるし……私じゃなかつたら死んでましたっての」

「ちよつと気になつてなあ……いや、百式観音使ったのはスマンかった。それでなんじゃがお詫びとしてハンターライセンスを……」

「しついでー」

「むう……」

と、こんな風に病院の廊下の真ん中で馬鹿やっている相手って言うのが、ご存知ネテロ会長である。

この人、私が病室にいる間ずっと訪ねてきて『ハンターになれ』とか『あの時やつてた奴剛教えてくれ』とか非常にうるさかった。

剛についてはお父さんが教えてくれなかったから私に頼み込みに来たらしい。

教えてあげてもいいんじゃないかな、お父さん。多分教えるまでずっと言ってくるよ？

あ、でもわかった。

教えたら自分が負けるから嫌なのか。

……子供か親父い〜。

それにこの会長、とことん私達の事が気に入ったようでお母さんにもハンターライセンスを渡そうとしていた。

ただお母さんの場合、ハンターのルールに『配偶者である人物、血縁者の使用は認める』というルールを作ってくれてお願ひしてた。

母さん、お父さんの流用する気満々だな。

話聞いただけでも公共料金の免除とか指定のお店での商品半額とかいろいろあったし。

で、今ネテロ会長は納得がいけないと言う様子で顔をしかめて私と一緒に並んで歩いている。

はあ……

「だからハンター試験ちゃんとして受けてから貰いますって。前言ったようにも私が試験受けずに貰ったら恨んだりする人出たりしますし」

「……わかった。もう言うまい……気長に待つことにしようかの。ちなみにいつ試験受けるつもりなんじゃ？」

「うーん……ビスケ達を受ける時私も受ける事にしますね」

「そうか、わかった。わしはあの二人を鍛える為戻るとする。基礎が出来ておるし、変な癖はついていなかったようじゃから、技術だけ教えてやればいいじやろうな。念についても知って居るようじゃし。まったくあれ等を鍛えたのは一体何処の化け物じゃ……」

会長は苦笑しつつ、私と一緒に病院の玄関を出る。

「両親ですよ。……それじゃ」

「おお、またな」

そしてネテロ会長は短く挨拶をしてこの場から去っていく。

私はそんな満足感に溢れた様子の会長を見てから、久しぶりに浴びる日の光の中で、
両親二人の所へと歩いていった。

雨の日は憂鬱になつて、変な事をやりそうになるから困る。

ハンター協会会長との試合から早いもので半年経つた。

今日は1954年5月19日昼。天気は曇り時々雨。

霧雨が時々降るといった、出かけるのにも向かず、蒸し暑いだろうと言うような空模様。

そして五月病のように今私は大変憂鬱である。

どのくらいかと言うと床にうつ伏せになつてグダるくらい。

……でもうつ伏せだと胸がつぶれて痛いので、実際は仰向けになりグダっている。

家の中でのんびりしようにも携帯ゲーム機もありそうにないこの時代ではせいぜい読書をする、またはこの世界の原作……どつちかというと未来予知の様な記憶を、分かる範囲頭の中から引つ張り出すとかするくらいしかやる事が無い。

「はあ……」

あー……弟達に会いたいよ……。

ちなみ二人と会つたのは少し前。

一ヶ月の内、一日は帰ってきてもいいと言いつ聞かせてるので一ヶ月に一度は会える。だけでもそれがつい四日前のことだから、一ヶ月近く二人とは会えない。

二人は優しいからちやんと一ヶ月に一回は帰ってきてくれる。

ちなみに脅したわけじゃないよ？

帰ってこなかったら私のほうから会いに行くし。

ふふふ……私のブラコン・シスコン舐めんな。

さて、と。

……少しばかり念能力《神と悪魔の体現者》を使いますか。

——この前……つまり半年ほど前、私が裸になって鏡の前に立ち、自分の生態情報を知ったのは、全て『私の考えた最強の念能力』を使うためである。

そして『私の考えた最強の念能力』である《神と悪魔の体現者》は簡単な話、念の性質・肉体・細胞・遺伝子の変化と操作。

なぜ念の性質が操れるのか。

それについて私は念の性質・才能が遺伝する要素があると考えた。

自分の生態情報について調べた結果わかった事でもあるが、

遺伝的な要素について導き出した理由は、じきに生まれて来るだろうゴンやキルアな

どの才能が、親からの遺伝要素が非常に高い事が挙げられる。

ほら、原作でも特質以外は遺伝によつて念系統が継承される可能性が高いって言つたし。

とりあえず能力の使用例を挙げてみようと思う。

まずは、○ヨ○ヨ奇妙な冒険に出てくる柱の男と同程度いや、それ以上の不死力・強靱性・回復力を生身の体で得られたり。または他人の記憶や意思を、脳細胞をいじる事で操つたり出来る。……逆に人の怪我を治したり、不治の病を治したりする事も可能と。

まあ、私としては必要に迫られなければ外道な事はしたく無いので、人を操つたりする事は自重するつもりではいるのだけれども……。

勿論こんな能力にはそれなりに制約と誓約がある。

簡単にまとめると、

- ・ 対象の生態情報を知っておかなくてはならない。
- ・ 対象の内部に自分のオーラが浸入及び、包みこんでいる事で使える。
- ・ 操作・変化させにくい生態情報ほどオーラを消費する。
- ・ 基本一度に一人まで。二人以上の場合人数の十倍オーラを消費する。
- ・ この能力でオーラが枯渇した場合には潜在オーラの99%を一ヶ月間使用できなく

なる。

・同上、枯渴した場合の一ヶ月間の強制的な絶。

……以上が大まかな制約^ルと誓約^ルだ。

すさまじい程に厳しい。

特に『生態情報を知っている』、『相手の体内にオーラを浸入させる事』と『オーラが枯渴した際』のリスクが。

当たり前と言えば当たり前ではある。

見方によってはそれこそ神の御業、悪魔の所業なわけだから。

という訳で私は、コレを使って文字通りこれから肉体改造をしようと思う。

何がと言うわけなのか皆目見当つかないけど、気にしたら負けだと思っから私は気にしない。

気にしないっいたらしないんだから！

——さてまずはこの半年、今までやってきた事の確認。

一つ目は色んな毒性物質への抗体を生成。

二つ目は電気への耐性の向上。

三つ目が怪我をした際の再生力の強化。

四つ目が細胞の不死化。

これらは半永続的に変化させた自分の生態情報で、ゲーム風に言うならパッシブスキルとも言おうかな。

細胞の不死化は単純に細胞が作られる回数減らないって事。

不老不死にはなれるけど不死身になるわけじゃないので注意が必要。

体の成長具合も22歳まではそのままにするつもりだから、そこまでは細胞の老化を止めないでいるつもり。

パッシブの逆であるアクティブスキルについてはまた追々。

うん、今回は念に関することで体弄ろう。

これ以上究極生命体に近づいてどうする私。

キメラアントでも無いのに人外指定されちゃったら堪えないし。

とりあえず今の私の系統別習得率は、

変化系100

操作系100

得意系統から一つ離れて、

強化系80

放出系80

具現化系80

で、最後……特質系80である。

いや、コレおかしいよね。

ホント初め知った時は目とどうか自分の記憶を疑ったよ。

何コレ。苦手な系統……無いじゃん。

というか特質って……まあ心当たりは無い事も無い。

初めての水見式のととき、変化と操作、二つの対極の位置にあるはずの変化が起きたのがおかしかった。

具体的には葉っぱがくるくると回って水がしょっぱくなっただけ……あれが私の特質系反応だったのかもしれない。

うん、そう思う事にしよう。

系統別修行については、不思議な事に特質を含めてバランス良く上がっていた。

私はいつも、操・変・具・操・変・強・操・変・放……と訓練していたのだけ別段問題無かったみたい。

ちなみに具現化系の修行は、絶をしている状態でもオーラが見えるようにするというイメージの訓練。

操作系の修行はオーラを伸ばして少し離れた所の物を動かす、念力のようなことをす

るのが修行方法。

あつてるのかは分からないけど……。

まあ、念系統を特質に変える事をしなくて良いので今日はメモリを伸ばそうと思う。

今まで伸ばしていなかったのは……恥ずかしい話、身体の方を改造するのに気をとられていたから。

……実は究極生命体目指してたなんて誰にも言え無い！

ゴホン。

——私のメモリを数値で表すなら、全部で1000メモリの所を今の私は《理の眼》に20、《神と悪魔の体現者》に残りの79くらい使っている。

残り1メモリ。

これでは何の役にも経たない。

なので才能を司る遺伝情報のメモリを試しに伸ばしてみる。

0・1メモリっ……！

0・1で約半分近くオーラを消費してしまった。

妥当な所と言えば妥当なのかも。本来なら操る事も見る事も出来ない情報を改竄してやるわけだし。

ただこれ以上はもう今日は無理。

これ以上やってオーラが枯渇でもしたら多分死ねる。
あー…もう、しんどい。

…もう止めて昼寝でもしよつと。

待ち合わせはドーレ港。

第245期ハンター試験。

この試験にビスケット・ラヂェストが出ると1957年12／1……昨日心源流の道場から連絡があった。

聞いた話では二人は既にネテロ会長から免許皆伝を受け、師範代という地位で頑張っているらしい。

姉としては二人の成長振りは嬉しいが、お姉ちゃんとしては二人がちよつと遠く離れたようで、少し寂しい。

と、まあ私の寂しい云々は置いとくとしてだ。

現在私は自室にて問題を抱えている。

それはこの第245期ハンター試験に私も参加しなければならなくなった事だ。

何故かと言うと、私が連絡を受けた時、ビスケに『リア姉も245期のハンター試験受けるんだよね。試験会場はザパン市の酒屋の〜』と正確な時間と場所をビスケから聞かされたから。

そしてビスケの声から、『姉弟全員でハンター試験を受けれる事が嬉しい』っていうの

が伝わってきた。

きつとあの会長が二人に私も試験を一緒に受けると教えたのだろう。

くそ……なんであの時弟達と一緒に受けるって言った！ 私、しばらくはアマのハンターとしてやって行くつもりだったのに！

試験がめんどくさいのも事実だが、ビスケやラデイが悲しむのも嫌だ。

それで私は部屋のベッドの上で枕を抱きかかえつつ、ゴロゴロとベッドの上を転がりながら、頭を悩ませているというわけだ。

ゴスン！

不覚……ベッドから落ちた。

お凸めつちや痛い。

打ったお凸をお母さんにもらった氷嚢で冷やしつつ手に収まる鏡で《理の眼》を発動させる。

今現在の私のメモリ

トータルメモリ229. 1

空きメモリ130・1

……あの時から三年と半年。

1日一回づつやって、ようやく元が取り返せてメモリが増えているという所だ。

うん、頑張った。私超頑張った。

修行して潜在オーラが増えたと言っても一日一回、疲れるため夜寝る前にしか出来なかったけど、約四年近く。ホントによく頑張ったと思う。

今ちよつと『潜在オーラ改造して増やせば良いんじゃないやなかつただらうか』的な声が脳内で響いた気がするけど今は放置。

多分今考え出したら引きこもりになる。

取り合えずだ、とりあえずコレで能力が新しく増やせる。

一つは決まっている。

今ある能力《理の眼》の上位互換の能力《神眼》だ。

【神眼】

・特質系

瞳の色を藍色に変え、対象の生態情報を全て見透す能力。

・制約と誓約

凝をしている事。

一度対象に触れている事。

こんな能力。

いかにも中二病っていう感じがする。

いいじゃん、カッコいいし。

さてと…出来るかな？

…。

うん、確かに出来た。

鏡に写る私の瞳の色は藍色になっていて、若干見慣れた私の生態情報が流れてくる。

…出来たけど何で80メモリも使ってしまう？

チクshh…(ry

—しばらくお待ちください—

頬を伝う苦い涙をティッシュで拭いて呼吸を整える。

うん、よしとしよう。私じゃなかったら《理の眼》のところに上書きで覚える事なんて無理だったろうし。それに上書き出来てなかったらメモリを当初の私の最大値10

0全部使ってただろうしね。……ホントに悔しくなんてないんだから！

……はあ。

うーん……残りは多分、本来作ろうと思ってた能力を入れるにはメモリが足りないだろうから、とって置こう。

後は、試験に持って行く物の準備するか。

はあ……試験面倒臭いなあ……。

ジャポンでは正月明けに当たる1958年の1/7。

この日ハンター試験の会場があるザバンのドーレ港のベンチで私は待ち合わせをしていた。

勿論待っているのはデートの相手などでは無い……妹と弟だ。

さつきから男達にナンパを受けたりしているが、割愛。

いちいち説明するのが疲れるくらい来るからナンパしてくるから仕方ない。

しばらくの間座って、段々寄ってくる男達が居なくなつた頃合いに少年少女、二人の影が寄って来る。

「おーい、姉ちゃんー！」

一人は私より1, 2 cm背が低い少年で、鍛えられた身体が服越しに見てもよく分かる

少年。

もう一人は、

「…リア姉ー！」

私よりも5 cmほど背の低い、ロリイな感じの服を着て、外見ではまったく分からないが同じように鍛えられている少女だ。

そして二人を見つけた私は、

全身の細胞を活性化させ、

臨をして音速に近い早さで二人に近寄り、

——聖母の如く二人を抱きしめた。

「会いたかったよー！ 二人ともー！」

「ふぐぐ……い！」

「んんー…ッ！」

抱きしめられた二人は私の腕と胸の間に頭をうずめて苦しそうに暴れており、今にも窒息しそうな様子。

周りからは男共の、羨ましいという羨望のまなざしが私達に降り注いでおり、私としては少し鬱陶しい。

うーん…苦しそうだから離してあげようかな。

いや、やっぱり我慢してもらおう。

……コレを周りの目を気にして止めるには、いささか勿体無い♪

気絶する寸前で私は二人の事を離し、ベンチに三人仲よく並んで座る。

「……し、死ぬかと思つたー!」

「お花畑が見えた気がする……」

二人はそれぞれ私の抱擁の感想を延べる。

うーん、おかしい。

感想としては『天にも昇る思い』とかじゃないの? ……あ、ほとんど一緒だ。

「そんなに力つよかつた?」

「うん。姉ちゃんまた力つよくなつたんじゃない? あー……しんどい」

おかしいな……私、羽を掴むように優しく抱きしめたはずなんだけど。

「はあ……。……もしかしてリア姉、臨しかしてなかつたんじゃない?」

「そうだけど?」

「はあ……」

た、溜め息吐かれた……!

「俺達心源流あのジイさんがいない時は代わりに指導やつてたの!」

「あのさ、リア姉。私達仮にも心源流の師範代な訳……なのに腕も振り解けないって……なるほどね。」

甘い！ 例えるならハニートーストより甘い！（ちなみに私の好物。

既に私は究極生命体に近い存在だ。

その私に勝てるわけなからう！

さて、冗談はともかく。

私が究極生命体以前にこの二人、師範代だからって調子にのってるみたい。

……はあ。

「……あのさ、二人ともまだお父さんやお母さんにも勝った事無いでしょ？」

「うぐぐぐ……！」

「それ以前に私にも勝った事無いし。ちよつと調子のりすぎ」

「ぬぐぐぐ……！」

二人とも悔しそうにしている。

……追い討ちかけようかな？

私は電話を掛けるしぐさをして、

「……………気が抜けてるって二人に電話しようか？」

「それだけはやめてください御姉さまッ！」

一瞬の間に二人は私の目の前で土下座をする。

この電話を掛ける二人と言うのは勿論両親の事である。

ラデイとビスケ、土下座しながら二人ともプルプル震えてる……面白い。

ま、ふざけるのはこの辺にしとこう。

可愛い姿も見れたし。

「それで、今年の試験会場は酒屋『源光』みなみつの店員に「カップ酒一杯」って言って「あんた未成年だろ？」って言われたら「これでも129歳なんだ」って言ったら良いんだっけ？」

「そうだけど……ホントに言わない？」

「お願いお姉ちゃん！ 絶対二人には連絡しないで！」

「ふっふくん。どうしよっかなあ？」

「うう……」

「ふえ……」

今にも泣きそうな二人。

……可愛い。

ただ癖になりそうなのでもう止める事にしよう。

今日分かった事。

……私には少しS気があつたみたいです。

私にとってハンター試験はハイキングのようなもの。

ザバン市地下試験会場。

今年のハンター試験は受験者は542人。

内、念が使えるのは四人。

私達三人と眼鏡を掛けた青年だ。

大分篩ふるいに掛けられるんだろうけど、どんな試験になるのやら見当もつかない。

キルア君の時のような場合は私達以外殲滅しよう……手っ取り早いしね。

会長なら分かってくれるだろうし。

うし、どんと来い！

「……コレより一次試験を始めます！」

この狭い空間の中で一つだけ、ポツンと設置された扉から試験官らしき人が出てくる。

私から見ての第一印象は人懐っこそうな印象だ。

「まずはこちらへ来てください！　そこで試験を行います！」

言い切るなり試験官は歩き出し、受験生はモーゼの海割りのように道をあけ、試験官

は何も無い壁の前に立ち、壁を押し。

すると押しした所から亀裂が入り壁のように見えていた大きな扉が開き、下へと続く階段が現れた。

「……さあどうぞ、この下にあるフロアで行います」

私達は試験官に続いて階段を降りていく。

降りた先にあつたのはリングだった。

そして審査員と思わしき男性が二百人近く。

記憶に間違いがなければ、あの天空闘技場の一階と同じ造りだ。

なるほど。コレは……

「コレから皆さんには一人相手を見つけてもらい戦ってもらいます。そして勝った人が次の二次試験に進める……」

単純明快、戦闘力と対戦者を見極める能力のテストね……

「……ちなみに対戦者の取り合いは禁止です。話し合いで決めて下さい。そして無理やり相手を試験に誘う事も禁止しています。試合内容も相手と話し合いで」

おまけに自分に有利な状況へ動かす能力も試される、と。

うーん。これは弟達とやるのは得策じゃないか。

「制限時間はコレから二時間。それまでに勝負をつけてください」

制限時間二時間。

うん、此処で全員気絶させても上がれるわけか。

ちよつと派手な事させてもらおう。

「二人とも、剛しときなさい……」

「はい？」

「え、まさか……！」

戸惑う二人。

そんな事は気にせず私は円でこの会場を包みこむようにオーラを伸ばす。

試験官の人がこちらを見ている気がするがそれも気にしない。

今から使うのは本邦初公開、私の開発した応用技……旋せんである。

念の応用技。

私が両親二人から教えて貰ったのは臨・廻・剛の三つ。

常日頃から臨や廻、剛をしている私だが、同時に何か新しい応用技ができないものかと考えた。

そして出来たのが三つの応用技の内の一つ。廻をつかった応用技だ。

普通の纏の状態で廻の応用で纏っているオーラを回転させる。

そうすることで某忍者漫画の螺旋丸のように、もしくは銃弾のように硬のみで行う攻撃よりも格段に威力が上がる。

そして変化系でオーラに切断力を付与、もしくは具現化系でオーラをダイヤ粒子のようにして、ダイヤモンドカッターの如く抉るようにしてやれば、さらに攻撃力を持つ。本来防御用の技術である廻を、攻撃用に少しベクトルを変えたものが旋という認識でいい。

家族四人そろった時に見せたら、両親からは『その技術を広めるかどうかは自分で考えなさい』と言われた。

強化系や変化系能力者が習得すれば、今まで以上に他系統に対して優位性を持てる。

そして特質よりの人間は少ない。

犯罪者が増えるor強くなるのは目に見えてわかる。

よって他系統に有利な技術を考えるまではお蔵入りになっていた。

まあ、他にも応用技作っているだけだね。

今回するのは、円で広範囲に伸ばしたオーラを風に変化させ、竜巻の如く受験者にぶつけようって事だ。

ちなみに殺傷力は無いのでご安心を。

……吹き飛んだ時に骨の二、三本折れたらごめんね。

結果……使えませんでした。

隣に居た二人に剛で取り押さえられて、「試験官攻撃したことになったら失格になるよ！」と思いきさせてくれたおかげだ。

何故気づかなかった私……。

地味に、他の受験者から「なにやってんだよ……」と呆れた視線を受けた事が、一番ダメージを受けた。

試験官の人はなんだか安堵して息を吐いている。

いや、なんか……すみません。

私の一次試験は、あきらかに武闘派らしき男の人に声を掛けて、単純な戦闘試合にして軽い凸ピン一発で勝負をつけた。

二人はというと、ビスケットは私と同じように武闘派の男の人に声を掛けて、軽い正拳突きで合格し、ラゲイストは中々相手が見つからず少し時間が掛かったが、無事合格。周りが私達に戦々恐々とし始めたのは仕方ない事と、あきらめた。

……そして続く二次試験は、高校入試レベルの筆記試験になったので、勝ちあがってきた脳筋のほとんどが脱落。

そして続く三次試験は危険いっぱい・仕掛けいっぱいの迷路を抜けるというものだった。

これは三人仲良く円を使いつつゴールした。

迷路を抜けたのは、私と弟達、あと眼鏡青年が残った。

そして既に念能力者四人になってしまったため試験は予定よりも早く終了。

結局の所、合格者は私達3人と1人となった。

で、最後眼鏡が私の連絡先をしつこく聞いてきたので、軽く念を当て気絶させ私は逃げた。

はあ……仮にも念能力者なのに私の念くらったくらいで気絶するなんて軟弱すぎる。

と、私は呆れながらハンター証を持って説明会場を後にしようとするが、

「少し待てカトリアちゃん」

「……なんですか会長……」

……じじいに呼び止められました。

「とりあえず合格おめでとう、と言っておこうかの」

「一応ありがとうございますと言っときましょう」

「……つれないのお」

仕方が無い。ビスケ達と一緒に帰れそうだったのを邪魔されて不機嫌なのだ。
くそー！ ご飯一緒に食べる約束してたのにー！

——呼びとめられた私が案内されたのは会長の仕事部屋らしき場所。机の上には書類が20cmくらいの高さまで積んであり、仕事してなさそうである。もしかしたらこの量が毎日の事なのかもしれないけども。

「……で、何の用なんです？ こんな所に連れてきて」

「いや、ちよーとだけ相談があつてなあ……」

「始めに言つときますけど書類整理みたいな事は手伝いませんからね？」

「うぐ……」

凶星かい。

「ま、まあ書類の事は置いとくとして。儂が相談したい事と言うのはだな……実力のあ
るハンターの中から何人かを選抜、もしくは育て上げたい」

——ちよつと興味深いな。その話。

「……それで？」

「儂としてはソレをおぬし等に手伝つて貰いたいんじゃないが……どうじゃろう？」

「……私達つていうと両親も含めて？」

「そうじゃ」

うーん……私の一存では決めにくい。

私だけなら手伝って上げて構わないけど……両親もとなると厳しいかもしれない。

「……私だけってというのは駄目なんで？」

「そりゃあ構わんが……私的に言うとお前さんの両親にも手伝ってもらいたいの」

あー……なるほど。

「実の所、あの時の応用技について知りたいんですね？」

「なんとというか……バレルの早いのが。師匠に敬意を全然しめさんあの馬鹿弟子二人に名前だけ聞いたんじゃが……全然教えてくれんかったよ……」

やっぱりまだこの人は習得して無いわけか。

ここまで残念そうにされると可哀相な気がしてきた。

教えて上げて……いいかな？

「臨と廻、お前と父親がやってた剛。誰かに知れ、悪用されても対処できるよう儂にも教えて上げてもいいですよ？」……は？」

急な事で会長、目が点になってる。

あー……どうしよ。

「おーい、かいちよー」

「……ホントだな？ 絶対だぞ?!」

「はい。ただかわりに頼み事したときは聞いてくださいね」

「…うむ、出来る範囲でならやってやる！」

……。

言質、ゲットだぜっ！

ちっちゃい子は可愛い。……弟のみならず。

私とネテロ会長の話合いは滞りなく終わり、ハンターを何人か選ぶという話は、ハンターを初めから育成する人数を増やし、選り抜く人間は後でという形で決まった。

ちなみに何年も掛かる壮大な計画になる予定。

そして会長とは四つ約束事をする事になった。

一つ、誰にも応用技の存在を言っではいけない。

二つ、私の要求には出来るだけ応える事。

三つ、会長の要求にも出来るだけ応える事。

四つ、私達一家は会長職以上の人物（例・V5とか）以外からは、強制力を持たない。

と、なんとも私に得が多い内容である。

そしてネテロ会長の臨・廻・剛の習得及び、ハンター育成に私は力を貸す事となったのだが……

「……会長のお眼鏡に叶う逸材がない、ねえ……」

……育てるべき人間が居ないのでどうしようもない。

「……急にどうしたの姉ちゃん？」

箸を咥えたラディストが私に尋ねてくる。

ちよつとアホの子みたいに見えるが、尚のこと可愛いと思うのは私だけだろうか。

いや、多分お母さんとお父さんも同意してくれるはず……!

と、他愛も無い事を考えつつ私は、何でも無いと平然を装いながら答えて、注文したカルボナーラを口に運ぶ。……今は食事に集中しよう。

——会長との会話を終えた今、私はラディと一緒に夕食を食べに来ていた。

ビスケットは心源流の道場の方に『師範代の役職をしばらく休むから後の事よろしく』の電話を入れたに行つたので今は居ない。

で、今は私とラディの二人きり。

所謂デート。

つまり私のテンションうなぎのぼりである。

ただ、ラディストに言うのと赤面確実なので少しの間黙っておく。

初々しい所も可愛いよね、ウチの弟はっ!

会長の趣味か、此処ザバン市にはジャポンにあるような店が多々あり、私にとつては非常に懐かしい気分が味わえる。そしてそんな中でも美味しいと評判だったファミレスでの食事だ。おまけにこの店、なんと和洋中なんでもござれ。

で、私が頼んだのはカルボナーラ。

……好物故致し方無し。

「ねえ、ラディスト。その天ぷら一つ頂戴？」

ただ、カルボナーラだけって言うのもあれなので、ラディから少し貰おう。

ちなみに弟は、昔から好きな天ぷらの定食（味噌汁付き）、横から盗ったら絶対怒る。

「ええー…嫌だー」

ケチ。ちよつとくれたっていいじゃない。

「私の一口と交換じゃ駄目？」

「むー…それならいいけど……」

……よしっ。

「ふう……食べた食べた」

「いや、姉ちゃん食べすぎ……」

「え、そんな事ないよ？」

失礼な、私は小食だ。

まったく……おかわりの十杯が多いだなんて。

「はあ……自覚無いの？ 昔はそんな食べてなかったじゃん」

「細かい事は気にしないの。……少しは自覚してるから」

「……ならいいんだけどさ」

訂正。小食と言うのは確かに嘘だ。

体を弄つてからエネルギー摂取量があきらかに増えているのは分かっている。

私の考えてる能力が出来れば元の食事に戻るはずなんだけどね。

「それで姉ちゃん………なんで腕組んでんの？」

「……え、駄目？」

「いや……いいけど」

赤くなつてそっぽを向く我が弟。

うーん、周りからの視線が鬱陶しかったから、カッパルのふりを協力して貰おうと

思ったんだけど……うん、いい事思いついた。

……このままラディをからかう事にしよう♪

そうとなればすぐさま実行、私は組んでいる腕に双丘を押し当てる。

俗に言う『当ててんのよ!』と言うやつ。

「ね、姉ちゃん?!」

「うん? どうかした?」

「い、いや何でも無いけど……」

狼狽してさらに赤面する弟。

ニヤケそうになるのを抑えてごく普通に返す私。

『おい俺、コレは姉だ。血の繋がりのある姉だ。だから赤くなるのは間違い、赤くなるのは間違いなのにく〜!』とラディストの脈拍が訴えているように感じるのは気のせいじゃ無い。

……可愛いなあ。

少し落ち着いた弟は、腕を組んでいる私の方に向けて口を開いた。

「えつと、カトリアさん」

おお、丁寧語になった。

「なんでしようか、ラディスト君?」

「ちよつと離れて貰ってもよろしくて御座いますでしょうか?」

「よろしくないですラディスト君!」

「私は笑いを堪えつつ返事をし、さらに胸を押し当てる。

「うぐう……」

弟はぐうの音しか出ず、また真つ赤になる。

くそ……やっぱり可愛いなっ!

……しばらく街の中を歩いて私達の事を探していた妹に見つかるまで、私は顔が真つ

赤なラディストとデート気分を堪能した。

見つかった時ビスケに呆れられたのはお約束。

「はあ……どうしようかなあ」

「何が？ ……というかお前、堂々として来過ぎだろう、ええ？」

「え、私ノックして来たよ？」

「いや、試しの門ノックしても意味無いだろう！」

「まあそうだけどねえ〜」

「お前と言う奴は……」

ズズ……とお茶を啜る。

私は今ちよつとしたお宅へ来ている。

ハンター試験から一ヶ月。のんびりと家で過ごすのもつまらなくなったので遊びに来た。

いや、一般人からしてみればちよつとどころか、一生掛かっても来れないような場所。

まあ私の唯一の友人、ゼノールゾルディックのお宅なんですけどね……って

「うえ、コレ毒入ってるじゃん。アーモンド臭がするー」

「お前なあ……人の家に勝手に上がり込んで来て勝手に飲むなよ、というか平気なのか

「お前」

「はー……何が悲しくてリアル『ペロツ、これは青酸カリ!』をやらなきゃいけないの」
「……いや、知らねえし。つか、マジでお前帰れよ」

「やだ。……だつてまだシルバ君見て無いもん」

「あーもう。なんであいつこんな時に電撃の訓練してんだ」

「はは。ま、少しの間だつて。それまで私の話相手になつときな」

「……はあ」

心底つかれた様子でゼノ。

ひどいなあ……私とていつ暗殺されるか分からないのに。

まあ常に廻やつてるからそう簡単には死なないけどね。

にしても私つて交友関係少ないよなあ……23年近く生きてきて友達が1人しか居ないつて。

会長は友人にカウントしないのであしからず。

あれは好敵手であり、先生と生徒の関係だ。先生と生徒と言つても、あの応用技に関してだけなので人生感で言つたら後輩と先輩。この前、臨と廻の習得率を確かめるため、ガチでやりあつたら十一勝十敗。今私が勝ちこしているが、多分次やつたら負ける。なんだかそういうジnkスのような気がする。

それにしてもあのジジイ、どさくさにまぎれて私の胸やら尻を触ってこようとしゃがって……!

あ、もう22とつくに過ぎちゃってるので私の体は不老不死になっています。

「永遠の二十二歳です☆」をまさか自分がやる事になるとは……どうでもいいけど。

いや、でもホントどうしようかなあ……。

とりあえず原作開始まではトレジャーハンター兼賞金首ハンターでやっていこうと思っている。

ほかには……旅でもしようかな。

「親父ー電気への耐性訓練終わったー……あ」

銀が濡れたような髪を持った五歳児が私の居る、ゼノの私室に入ってきて来る。

「あ、シルバ君だ」

「……親父、誰コイツ。……と言うか、いつの間にこの人の膝の上に座らされて頭撫でられてんの?!」

訳が分からないといった風に今置かれている状況を分析するシルバ。

うーん……将来美形になる子って可愛いんだよなあ……よしよし。

「あー……覚えて無いか、俺の友達だ。ちっちゃい頃会った事あるだろう」

「一歳の頃? 流石に覚えて無いわ……あ、親父が『化け物みたいに強い女がいる』って

良く愚痴ってたけど、この人のことか。……というかい加減離して貰えませんか？」

「……無理かな」

ほー……ゼノの奴、そんな事言ってたのか……覚えとけよ？

「いや、その胸が頭に押し掛かって……」

「はいはい、子供はそんな事気にしちや駄目だぞー……こういう体験できるのは子供の内だけなんだから」

必死に私の膝の上から抜け出そうとする、照れているシルバくん。

残念でした。そう簡単には離しませんよ？

「くうー……親父、なんとかして！」

「無理だ。……世の中あきらめる事が必要な時もある。それがその一つだ」

なんだか無駄に悟った顔をして息子に言い聞かせるゼノ。

「……くっそおー！」

そしてシルバ少年の、世の中の不条理に対する叫びが屋敷の中に響いた。

……ま、全部私が原因なんだけどね。

バレンタイン……昔はリア充爆発しろとか思ってた。
た。

1960年二月十四日。

かつては忌々しいと思っていたリア充どもがキャツキャウフフするイベントがある日。

一回も他人からもらった事が無かった私は、今では貰う側でなくあげる側になってしまった。

今日チョコを作るのは妹が居ないので私1人。主に自分用とラディの分、それからお父さんの分作る予定でいる。

ただその前に発の開発を行う予定。

——試験から約二年。

二年で会長への指導は終わり、ネテロは剛が二時間近く使えるようになった。

一ヶ月で臨と廻をさせるようになってたからチートだなと思ってしまう。

そして多分もう誰も勝てないと思う。

いや、私が結構前《神と悪魔の体現者》で出来るようになった、アクティブスキルの

《軟化》を使ったら人外認定される代わりに勝てる気はする。

もしくは直接ネテロに《神と悪魔の体現者》使ってしまうか。

《軟化》はまあ……自分の骨肉を軟らかくして、衝撃を吸収して逃がすスキル（頑張ればスライムみたいになれる）。勿論まだ人として認識されてるから、引き分けか負けてる……ちよつと悔しい。

直接使うのは……なんだかねテロの今までの努力というか、積み上げてきたものとかを尊重してやってない。

妹ビスケは、宝石ハンターとしてトレジャーハントしつつ宝石買ったりと、色々しているため家にいない。

ラディはとりあえず何になるのか決めていないから、という理由で私の予定する旅についてくるんだと。旅に出るのは6月の予定なので今は私と一緒に実家にいる。

近況はこの辺にして発を作っていこうと思う。

ただ、発の開発の前に私について変わった事。

少し前に気がついた「メモリの増加でオーラ総量の半分消費するなら、総量増やせばいいんじゃない」理論。気がついた時、あのコツコツ頑張っていた三年間返せと言いたくなつた。

で、現在のオーラ総量は50万ちよつと。

《神眼》を作ったときが10万少しだったと記憶しているので、今では1日に1メモリ増やせる。

そして蓄えてるメモリが、能力の作成に1050ほど使ったため、小数点切捨てで今あるのは約2920。

作った能力はこれまたメモリの消費が激しく予想外だった。ただし作れたおかげでオーラの消費なんてなくなっただけ。

理論に気づかなかったお馬鹿さんな私のままだったら、千日間、馬鹿にならない食費で減っていく貯金をみて、泣きながらメモリを増やしていただろう。……考えただけでも恐ろしい。

で、作った能力は《生髪舞剣／ダンスマカブヘア》。

【生髪舞剣／ダンスマカブヘア】

・特質系＋具現化系＋変化系

伸縮・自由自在に動かせる髪の毛からオーラを吸収する

・制約と誓約

髪の毛からしか吸収できない。

使う度に毛の細胞の寿命が縮む。

発動にはオーラを消費するが、発動した後は吸収したオーラで半永続的に発動可。

摂取できるオーラは、基本髪の毛の本数×1オーラ/秒。

周囲のオーラ量によって吸収量は変わる。

人から直接奪う場合は相手の体に髪の毛が接触していなければならない。

ON/OFF可。

意外！ それは髪の毛ツ！ ……な感じの能力。

いや、これしか名前が思い浮かばなかったんだから仕方ない。

能力の用途は髪の毛（既にカーボンファイバー以上の強度）を強化し、伸縮自在、自由自在に動かし操作し髪の毛から常時周囲のオーラを分解・吸収し、エネルギーと栄養に変化・具現化させて摂取する。

またオーラのまま摂取し潜在オーラを回復する事も可能。

そして髪の毛が抜けたとしても即座に生やせ、毛の細胞ですら不死化した私にとって、寿命も有って無きが如し。金髪のため約十四万本生えている私からだと、最高でも発動さえすれば毎秒14万オーラ回復できる。

うん、素晴らしい永久機関。

おかげで食事すら不要な体になっちゃいましたけどね！

娯楽になったけど食事は一応している。

カルボナーラとかハニートーストが食べられ無くなったわけじゃないしね。

そろそろ本題に入るけど、今日は新しく能力を作ろうと思う。

これ以上最強になってどうする、とか思う所はあるけど私、人体改造系しか能力持つて無い事に気がついた。

こんなんじゃ旅なんて出来るわけない。

なのでコレから作るのは移動系と運搬系の能力……あと消化器官を強化する能力。

まあ簡単に言えば、どこでも○アと四次○ポケットを作ろういうわけだけ……消化器官の強化は酷く個人的なので後回し。

さてと、まず移動系は放出系空間移動なので転移場所にはオーラを混ぜた、他人には絶対に消せない血を垂らしておいてマーキングしよう。

名前は……よし決めた《あの場所にもう一度／テレポーション》。

【あの場所にもう一度／テレポーション】

・放出系

オーラの混ぜた血を垂らしてマークキングした所へ瞬間移動する。

・制約と誓約

マーキングした地点から半径5メートルの空間がある所へ移動する。マーキングした地点5メートル以内に空間が無い場合は発動しない。血が消されると移動できない。

制約のおかげで『*いしのなかにいる*』は防げるはず。

メモリの確認……50減ってる。

成功かな？ ……試しに紙に血を垂らして床に置く。それから5メートル以内から出て発動。

……気がついたら血のついた紙の上に立っていた。

あー………凄いいこれ。

やりすぎたらハマりそう。

あ、血を体に回収して実験終わり。

次は運搬系能力の開発。

これは念空間を作ってしまうおう。

えっと………重力制御と時間制御、あとは………で………

よし、出来た！ 《王の箱庭／ゲート・オブ・バビロニア》！

【王の箱庭／ゲート・オブ・バビロニア】

・具現化系＋特質系＋放出系

望んだ場所に作成した念空間及び現実世界への入出口を作る。

・制約と誓約

自分の視認出来る範囲内までにしか作れない。

……仕方ないじゃん。

私の中二病的な思考回路が四次元ポケ。トなんて名前つけたくなかったんだもの。

うん……パクリ乙。

まあ能力の内容としてはゲート・オブ・バビロンの類似。ただ、念空間自体には重力の操作とか時間の流れの操作とか、オプション満載なので下手をすると本家本元よりやばいかも。

じゃ、まず手元に発動。

……空中が金色に波打っている。

手をつ突つ込む……何も無い。

出来た？ ……メモリの確認をする。

嘘、70メモリ残して全部吹っ飛んでる。

確かさつきまで2870あったから……昔の私28人分。

……マジでありえない。今度からは、ちゃんと考えてから能力作ろう。

というか元から能力って良く考えてから作るモノだった気がする……私の価値観がぶっ飛んでるのか。

とりあえずメモリを元に戻そう。

すぐに《生髮舞劍》でオーラを吸収しつつ《神と悪魔の体現者》でメモリをもう一度増やしていく。

毎秒1メモリのスピードで増えていく。

やっぱり回復スピードが少ない。元に戻るまで結構掛かりそう。

……まあ人工物が多いから仕方がないか。

ポーとするのも仕方がないのでチョコ作りに行つてこよつと。

「——どうしよう」

うーん……作り過ぎた。

調子にのつて、強化系の発浴びせながら湯煎してたら凄い量になってた。

流石にこの量が多いぞ。いや、私なら食べられるけど……多分飽きる。

ラティストとお父さんに食べさせるにしても多いな……

「うわ……凄い量作ったわね」

「あ、お母さん」

丁度洗濯物を干し終わったお母さんが私のいる台所へやってきた。

手を前掛けで拭いて、私が作ったチョコクッキーを一つ食べた。

「美味しいけど……どうすんのこれ。ラディとお父さんでも無理じゃない？」

「だよねえ」

私はペろりと手についてたチョコを舐め取り同意する。

「……究極生物（笑）のカトリアなら一人で食べれそうだけど」

「あながち間違つて無いけど酷いっ！」

まあ言われても仕方ない。……一時期凄い食べてたから。

お母さんは間違つて無いのか、と笑つて案を出してくれる。

「とりあえず他の人であれば良いんじゃない？」

「他の人つて誰に？」

「ゼノくんとか……ネテロのクソジジイとかに」

「あー……そうだね……」

うーん、よし二人にもあげよう。

協会に届けられるネテロには宅配使えるけど、ゾルディック家には無理そう。

今日作った座標マーキングのついでに直接渡しにいこう。

それにしても……お母さん会長の扱いざつだな。

まあ私が、試合中パイタッチとかされそうになつたって愚痴ったせいだけだ。

……なんかごめんネテロ。チョコ多めにあげるから許して。

外に追い出しておいた男性陣は、帰ってきた時作つてあるチョコの多さを見て「一人で食べるのこの量!」とか言いやがってくれたので拳骨を頭に落としておいた。

二人の少なくとも、ゼノの分を増やそう。

そういやわたし、元男だったよな？

ずいぶん女子力高くなつたな……まあいいけどさ。

アキバの次は、そうだキョートへ行こう。

両親の元から旅立ち三ヶ月。

私とラディストは少し肌寒いジャポンに来ていた。

「うわぁ……これ欲しい」

「なあ、姉ちゃん……凄い見られてるんだけど。……というか何見てんのさ」
うるさいラディスト……私の邪魔をするでない。

ただ、確かに見られてるのはウザイので、コレをさっさと買って帰ろう。

「よし。…店員さん。コレ買いたいんですけど」

「はぁ?! 姉ちゃん!! これ幾らすると……」

「30万でしょ? 私のポケットマネーから出すし」

「はぁ…。また電腦の掲示板が荒れる……」

なんだか私の事が一部掲示板で有名になっっているらしい。

主に、天空闘技場での事とか、『カトリアちゃんハアハア…』的な感じで。……氏ね変態共。

そんな自分の身の振り方に気をつけないといけない私が、ちよつと注目を集めつつ買

い物をしているのは、ジャポンのアキバ……言うなれば日本の秋葉原に近い都市。電化製品やらマニア向けのグッズや製品を売る店が沢山あるのだ。

ジャポンに来たらこない訳無いでしょ、この私が。えっへん。

いや、胸張るような事じゃないんですけどもね。

というか今サラシ巻いてて胸張ったら痛いから出来ないし。(主に胸に) 注目を浴び過ぎるので仕方なく巻いてる。所謂……隠れきよぬー状態？

そうこうしている内に男性の店員さんがやってきて、冷や汗を掻きつつショーウインドーの中から出して運んでくれた。

ところで私が何を買ったか？ それは、

……後に有名になるであろう Joystick Station である。

「いや……いい買い物した♪」

アキバから離れて、同じくジャポンのキョート。

此処ジャポンでの拠点の一つが此処にあり、移動には私のテレポーターションを使っているの、アキバとキョート間を一飛び出来る。

ホクホク顔で肩から掛けてあるポシエットをポンポンと叩きながら情緒溢れる街並みを歩く。

「はあ……もう少し待てば安くなるだろうに」

対して呆れ顔を浮かべている弟は、溜め息をつきつつ呟く。

「いいじゃん別に。早期購入者特典いっぱい貰えたんだから」

「……はあ」

「ふうー……」

私は、またも溜め息をつくラヂェイストに少し居た堪れなくなり口をすぼめる。

——最近弟が主婦の如く節約に気を使い始めて辛い…。

そもそもラヂェイストに私が、私の財産について言つて無いのも悪いんだけど。

何で言つて無いか？ ……言つたら絶対引かれそうだから。嫌われたらやだもん。

ラヂェイストと違つて私は天空闘技場で200階入つてからフロアマスターになるま

でに、自分に所持金全額を掛け、無敗で勝ち続けた。結果30億^{ジエニ}。

そして銀行に預けているお金は利息が付き、悠々自適に20回分の人生を歩める位の

量になっている。

最後に確認した時は……60億超えてたかな？ 使わないと逆に経済が混乱したり

して、大変な事になる金額だ。

なので最近では難民への援助としてNPO法人のような所へお金を寄付したりして

いる。……知らない内に有名になっていく気がしないでも無い。

どうしよう、ふらつと訪れた所で『カトリア様だ!』とか言われたりしたら。……流石に無いか。

とにかく、

私にお金の事に関してとやかく言う必要はないんだよ?

……だから姉の事をそんな呆れた目で見ないで下さいお願いします!

しばらく歩いていると前方から人が押し寄せて来る。

何かから逃げているようで、通り過ぎていく人達の目には恐慌と焦燥の色が浮かんでいた。

「キヤーツ!」

「ひ、人殺しだー!」

……あきららかに尋常じゃない出来事が起きているらしい。

「どうする姉ちゃん?」

「どうするも何も……もう巻き込まれるのは確実みたい」

「血、血ガ、血ガ欲シイイイッ!」

通りには既に私達と、騒動の発端らしい怪しく光る血濡れの刀を持った男、そして既に事切れた様に見える人が転がっていた。

「……ラディスト少し時間稼いで。斬られてる人が治せないかどうか確かめてくる」

「ん……」

ジリジリと迫ってくる男相手に間合いを計りつつ移動する。

「一応注意しとくけどアイツあの刀に操られてる……あの刀、死者の念が籠もってるよ」

「……了解」

私とラディストは二手に別れる。

ラディストはあの男の剣戟をかわしつつ翻弄している。

私は私でやる事をしましょうか。

……被害者は全員女性。一番酷い人から《神眼》で視ていく……うん、全員ギリ

ギリで生きてる。

円をしてオーラを広げ、傷口からオーラを浸入させて彼女達の身体を私のオーラで包み《神と悪魔の体現者》を発動させる。

彼女達の生命オーラに私のオーラを同調させて回復。

次に細胞操作と治癒力を上げて、傷口と酸欠で死に掛けていた脳細胞等を癒す。

最後に彼女達の身体に残った私のオーラを、流れ出た血の分だけに具現化させてお終

い。

その間約45秒。

うん、この前やった時より若干早くなつたかな。

「ラディスト終わつて危ないッ！」ええ？」

「オンナノ血イイイッ！」

——二人に背を向けていた私が振り返るとそこには、あの男が私に向かって刀を振り下ろそうとしていた。

……はあ。まつたく。

私のほか。これくらい予想出来てただろうに。

斬られてるのが全員女性って事に気が付いとけつての。

ガギンッ

——《硬化》を使い細胞の強度をあげて刀を防ぎ、

「まあ、でも……」

シユルルル

「……丁度私もお腹減つてたから」

「血、血イイん、ん、ん——！」

——《生髮劍舞》で伸ばした髪の毛を男に巻き付ける。

「オーラ、ちよつと頂戴ね？」

……いただきます。

「(ピクツピク……)」

「いや、ゴメンね？ ちょっとやりすぎたかも……つて聞こえて無いか」

「うわあ。……男の人が可哀想になって来た……」

生命維持が出来るギリギリのところまで搾り取ったから仕方ないといえば仕方ないか。

……ちよつと悪乗りし過ぎた。

「ま、この男の人は今は置いとくとして。この刀なんだよねえ……神字刻んであるし、妖刀の類かな？」

「ちよ、姉ちゃん大丈夫なのかよ、それ」

「うん？ この程度の精神干渉系の念だったら大した事無いよ。多分これ念能力者用の刀みたいだから……開け《王の箱庭》。もしホントにやばかったら除念よろしく」

「……その前にその蒐集癖なんとなかならない？」

「無理！」

「はあ……」

この後私達は警察が来るまで被害者の彼女達の様子を見ていた。

彼女達が起きた時になんて説明しようかと考えながら。

「ジャポン語を知らず知らず使う弟……お姉ちゃん怖いー
 (棒)

「「ホンマにありがとう御座いました」」

「いやいや、ほんと気にしなくていいですよ。当たり前のことをしただけです……いだった……なにすんのさ……」

「べっつにい〜?」

私はジャポン語日本を喋っているいつに無く紳士な様子の弟の足を踏みつけ、そっぽを向くようにして団子を頬張る。

くそうく……コイツ、私が彼女達を助けたつてのにさも自分が助けた風な口利きやがって。私だよ……あなた達助けたの……。

多分言つても信じて貰えないだろうな……ラデイ、イケメンだし。おまけに彼女達、ホの字のレのタな様子だし。

やっぱりイケメンは何処行つても得するね。

ちなみにラデイストが日本語を使える理由は、物心付く前から私や両親が日本語を使いなから生活していた事に起因する。……英才教育のおかげかな。

で、助けた三人はしばらくして目を覚まし、誰かが呼んでくれていたらしい救急車によつて近くの病院まで運ばれた。しかし検査の結果、異常が何処にもないどころか怪我をした痕ですら見当たらないとの事だったので、その日の内に帰された。

とまあ、我が弟のイケメン故の役得なのか、助けた三人……現役の芸妓さん達はお礼にと言う事で行きつけの茶店でご馳走になっている。

「どうやら『1日安静にしなさい』と言われたらしく『それならお礼に……』との事らしい。」

うー……お団子は美味しいけど納得いかないぞチクシヨウめ。

ちなみに、気絶した男性はと言うと白黒の警察車両に連れて行かれていった。目を覚まし次第、事情聴取を受けるらしいけど……多分二、三日目を覚まさないと思う。警察署から連絡があるとの事だがいつになる事やら。

私を余所に、和気藹々と談笑する三人と一人。

何も付いていない団子の串を皿に戻してお茶を啜る。

ズズズ。

「ご馳走にもなった事だしそろそろお暇させてもらおうとしよう。」

「……ハンターさん、ちなみにどんな仕事をしてるんです？」

「えつとですね「ほらご馳走になった事だし、行くよ愚弟。……あ、お団子とお茶ご馳走

様でした」ちよ、姉ちゃんっ！ あ、ありがとう御座いました！」

ぼけーつとしてゐる芸妓さん達を置き去りにして、私は弟を引つ張りながら茶店をあとにした。

……これ以上私達ハンターに深く関わってもいい事なんて無いだろうしね。

……別々に弟だけモテたのが悔しかったわけじゃ無いんだからっ！

「ハンターだけしか使えない曰く付きの刀。一般人が使えないだけで、ハンター以外が抜いたりすると操られる……というか暗示に掛けられる。性能としては振る速さが速いほど切れ味が上がる。やっぱり相当の業物だねコイツ……今更だけど貰ってもいいのよね？」

私は警察に赴き、スーツ姿の男性に話しかける。

「ええ。本人も良いって言っていました。『お礼になるのなら是非にと』と」

「それで、どういった経緯で事件が？」

刃の部分が妖しく紅く光る刀身を鞘にしまい、机の上に置いて私は耳を傾けた。

三日して目を覚ました男の事情聴取が終わり、今私は警察署に来ていた。

大体予想は付いているが、おそらく彼も好き好んで刀を抜いたわけではないだろう。

……不慮の事故というやつだ。

独身のその男性は、鍛冶屋の跡取りで両親共に既に他界していたので被害者はあの三人の女性のみ。

事件の現場近くに彼の自宅兼鍛冶場があり、本当に被害者は三人だけとのことだ。

「……はい。本人は『家に代々受け継がれてきた物で、抜くなど伝えられていたにもかかわらず、売りに出そうと思ひ抜いてみた』といっていました」

「ふうん。じゃ、その人お金に困ってるんで？」

「ええ、そのようです。借金が二千万Jほどあるらしく……」

うーん……それじゃあタダでこの刀貰うのは可哀想か。この刀、売る所によれば十億やそこらはするだろうし。

「……よし、きーめた」

「うん？ 一体何をですか？」

今の会話で要領を得ないといった様子の男の人は、まだ若さが残る顔に疑問の表情を浮かべつつ私に訊いてくる。

私の考えてる事を全部話す必要性も無いし、

「彼……ある意味被害者の男性に会わせて貰えませんか？ ……少し話がしたいので」

「え、ええ良いですよ。どうするかは分かりませんが……とりあえず彼に今回の事で非はないって事が貴女のおかげで分かりましたから。釈放手続きが済んだら案内させま

すので少々お待ちを」

「よろしくね、刑事さん。私は休憩所でコーヒー飲んでるから」

「は、はい！ ご足労有り難うございました。それでは！」

私はニコリと彼に微笑み、彼が去るのを見送る。

……………確信犯ですけど何か？

警察署から、釈放された男性の自宅に場所を移した私は、畳みの上に彼の目の前に座り、本題に入る。

「はい、これ刀の買取代金。貴方の借金二千万で良かったよね」

あらかじめ《王の箱庭》から出してポシエツトの中に入れておいた二千万を渡す。

「は、はい！ ……いや、でもホントに良いんですか？」

「全然平気だから気にしないで。それでこれが見舞金……とでも言おうかな」

私は肩から提げている《王の箱庭》と繋げたポシエツトの中に手を突っ込み、八千万Jの札束を出す。

目を見開いて驚いているが気にしない。

「……………これで弟子の二人や一人雇って技術を広める事を条件に今回の事はお咎め無しにしてあげます」

「……………」

あらら……目を見開いたまま固まってらっしやる。

「おーい」

「はっ！ ……いや、でもこんなに……」

「まだ若いみたいだけど才能ある貴方とその技術を此処で絶やしてしまうのは非常に残念なのよ。……私みたいなハーフが言えるような事じゃないけど」

彼に才能があるのは《神眼》で確認済み。努力を怠らなければきつと大成する。

そして此処ジャポンでも有数の鍛造技術の一つ『御影流』最期の後継者、十六代目『御影秋久』。私のお母さんの使っている包丁も御影流から派生された『烏丸流』の銘が入っていたのを覚えている。三十年近く使って居るらしいが、刃毀れなど一切していない。そしてあの念刀『斬桐舞』きりぎりまいには『御陰流三代目』と彫つてあった。

念の影響もあるだろうが、腕が相当良かったのだろう。人殺しを誘導させるような性質の悪い念になっているのは頂けないけども。

「……………」

「どっつー」

俯いて何かを堪えている様子の彼の顔を覗くようにして、私は彼に訊いた。

「わ、かり……ました。恩に……報いるためにも……精一杯頑張ります……」

「うん。じゃ、頑張つて。私はもう行くから。腕の良い鍛冶屋が居る噂をいつか聞かせて頂戴ね？」

「あ、いつ！　ありがとうございま、しだ！」

手を畳みに着き、彼は深々と頭を下げる。

男は簡単に泣くと言われるが今は元男の私が許そう。

そうして少しの間、彼が頭を下げたまま静かに泣くのを見届けた後、彼の黒髪をぐしゃりと撫でる。それから『頑張れ十六代目』と声をかけ、私はその家を後にした。

「ただいま〜」

「姉ちゃんお帰り。今日の晩御飯天ぷらだから」

私が出駄を脱いで台所に顔を出すと、中々様になっているエプロン姿のラディストが向かえてくれた。

ちよつとおかしくなつて笑つてしまう。

「くすつ……ホント好きだよね、三日に一回とか。……なんか手伝う事ある？」

「んー……今の所無いかな。それでどうだったの今日は？」

台所で手を洗つて私は、油の中で撥ねる衣の着いた海老をつついてはいる弟に訊く。

「えつとー——」

揚がった天ぷらを油切りの上から皿の上に箸で並べているラディストに私は、今日一日を思い出しながら説明していく。

話しながら出来たばかりの海老の天ぷらをつまんで指と口の中をちよつと火傷したりして、ラディストに怒られたり、『晩御飯抜きにするよ』と脅されたり。

そうして何だかんだで忙しかった一日の日が暮れていった。

ゴシックドレスってなんかロリータな感じがするのは私だけ？

念能力《ゲイト・オラ・バヒロニア王の箱庭》。

異次元に作った空間に出入りする能力だが、能力の一番の要は念空間の方にある。

異次元に作られた空間……いや、一つの世界と言えるは其処は、使用者のオーラ総量によってその広さを変える。また白く広大な其処は念じれば造形を変え、時の流れ、重力でさえ思うが侷となる。

かつては一面真っ白だったその世界には念で具現化された造形物である草木があり、空は蒼く彩られ白い雲が浮かんでいる。また蒼い空の上には太陽のように光り輝く光球も存在していた。また、気流も存在しており、まさしくもう一つの現実世界と言えるようだった。

そして、その世界を構成する念以外の存在として、一振りの刀と正方形に固められたJ札の束。そして本が納められた書架が設置されていた。

——と、回想をしていた私はその《王の箱庭》内でラディストに稽古中である。……

私が厨二臭いのはご愛嬌ですよ？

「……………」

「ほつと……………」

とりあえず今は目の前の事に集中しないと駄目だね。

内容は一本入れたらおしまいってだけの重力負荷を掛けたちよつとした模擬戦。

ただ、重心の移動を間違えば、即這い蹲ってしまうという重力負荷。負荷の掛かったラディストは額に汗を浮かばせ、私の右肩口を狙って左ストレートを放ってくる。……

外の時より若干遅い位で。常人なら多分呼吸が出来なかつたりで死ぬレベルなのにね。

私も大概だけど弟や妹も相当だよなとか思いながら、迫る手首を持って後ろに引き、私自身が弟の右側に来るように軽くいなす。

同じ負荷が掛かっているとはいえ、普段通り動ける私にラディストは驚きの表情を浮かべていたが、バランスを取り直し攻撃に転じて来る。

——ホントやるようになったなあ。弟も。昔はいなされただけでこけてたのに。

悲しきかな既に彼も今年で二十歳になる……昔はあんなに可愛かったのになあ。

……って駄目だ駄目だ。集中集中。

足を踏み込み私のお腹めがけてラリアットを仕掛けて来る。

私は数歩後ろにさがり、弟の蟀谷へと左足で回し蹴りをしようとするが、上体を起こ

し回避される。……うーん、甘かったか。

弟は近づいて来てまた蹴りで攻撃を仕掛けてくるが、私は左腕でガードして防ぐ。しばらく肩で息をしている様子を見て、

「……うん、今日はこの辺で終わり」

「あー疲れたあー……」

宣言すると同時に重力を元に戻すとラディストは草原に後ろに転ぶ様に倒れた。

今日は二時間ほど続けたが、私はまだ五割位しか出していない。そのまま寝る体勢に入っている弟の顔を見て『おつきくなったなあ』と歳をとったお婆ちゃんのような気分。……まあ、前世も合わせれば60近いから普通かも知れないけど……。

悪戯するつもりも含めて、寝た様子の弟の頭を膝の上に乗せ、《神と悪魔の体現者》を使い彼の疲労をとっていく。

弟が起きるまでのしばらくの間、仮初めである蒼い空を眺めながら弟の黒い髪を梳いたりしてぼーっとした時間を過ごした。

……あと2日でラディストと別れる事になる事を考えながら。

念空間……自称《バビロニア》から時間の流れを戻して部屋の置き時計の時間を確認する。……入ってから一分も経ってないね。時間の流れを3000倍位にしていたか

ら当たり前前といえば当たり前前だけど。ちなみに仕舞ってる物は時間を止めて劣化とか防いでる。

「あー……ホント規格外。毎回思うけどさ……やっぱり世界一つ作ってるって尋常じゃないよね」

私が出てきた後に出てきたラディストが同じく時計を見ながら言う。

「当たり前でしょう？ お姉ちゃん究極生命体（仮）なんだから」

「……ハア」

くっ……。毎度の事ながらアメリカ人みたいな反応をくれる我が弟君。……いいじゃん、老い止めてあげてるんだからさ。

まったく酷いったらありやしない。

「そうだ。いまビスケットって何処にいるんだっけ？」

「あー……この前連絡とった時はヨークシンのオークションに出るとか言ってた。なんかいい宝石でも見つかったんじゃないかな」

ラディストは冷蔵庫から出した水を飲む。

「ふーん。そういうビスケ今シングルのハンターらしいけど、ラディはどうするのそこら辺」

「別にどうって事はないけど……」

気にして無い風を装っているけども、実は羨ましかったりするのはお見通しである。
むー……

「可愛いなあーラティストお〜……!」

「うわ、ちよ、いきなり何! とうるか頭ロックして撫でるな! ……………あ、良い匂い」
なんかボソツツと言ったような気がするけどそんな事よりも!

「ふっははは〜! 弟分補給だあー!」

「ちよ、やめ! に、臭い嗅ぐなあ!」

「ふへへへー」

「いやあー放してえー!」

……………後々になって気づいたけど、やる方とやられる方普通逆じゃない? これ。

「うし。じゃ、元気だね」

「うん、姉ちゃんも」

今現在いる場所はヨークシンシティの広場。

《あの場所にもう一度》を使い、やってきたと言うわけ。
恐らくビスケットがこの近辺にいるはずなんだけど。

「あ、来た来た……おい! こっちこっち!」

「ラディースト……リア姉……」

世の中噂をすれば何とやら。ロリロリしいゴシックドレスを身に纏ったビスケットが広場に顔を出していた。

ただそんなドレスとは対象的に体つきは女の子から女性になってるし。

主に何処がとは言わないけど。げに恐ろしきは母様かかさまの遺伝子か。

「うわ、ラディーストが大きくなってる……！ もう私よりも身長高いのね……。リア姉は……髪伸びた？」

ナンパでもするかのような髪伸びた？ 発言。

そうか、そんなに私は変わってないのね……。まあ、成長と言うか老いが止まっているから当たり前と言えば当たり前だけでも。

……というか私はあなたの胸を揉みた……。ゲフンゲフン。

よーし、自重しろ私。これ以上姉の尊厳を失ってどうする。

「そういうビスケはオバサン臭く……。つてやめろお！ 手を振りかぶるな！ とうるかそれぜつたい剛してるよね?!」

馬鹿なラディーストは言うなりゴスゴスといいパンチを顔に貰う。

ラディースト。それはお前が悪い。

年頃の女の子にオバサン発言はよろしくないな。

……『女らしくなったね』とか言えたら完璧だった。

本来なら私も制裁を加えるべきだろうけど……赤面したビスケットが見れたので不問にしよう。……というかグツジョブ！ 可愛いから許す！

「……ふう。それにしても相も変わらず頑丈ね。なんで特質系の癖してこんな硬いの
さ」

「いゝやゝ、じゆうゝぶんいゝだいつて。……まあ頑丈になった理由は色々あるけど」
「……あー、なるほど」

ちらちらと私の方に目をやる復活したラディストと、なんか納得してくれちゃってる
ビスケット。

……私のせいと言いたいのかこのヤロー。

おっと、そういやそうだった。

「ビスケット、ちよつと私と来る？」

「はい？ なんでまた急に？」

「あ、そういやそうだ。ビスケ、行った方がいいと思うぞ」

「ゴメン、意味わかんない。何でラディストも勧めてくるの？」

「いいから、いいから」

ちよ、え、なに?! と驚くビスケットを即座に気絶させ《王の箱庭》に回収。

ビスケットの滞在している宿に私とラディストは行き、ビスケットの荷物を全部回収し、私は気絶したビスケットの待つ《王の箱庭》に入ってラディストと別れた。

私が人外過ぎて妹のストレスがマツハ。

「う……うん……—え？」

「あ、おはよう。いい夢見れた？」

膝の上で寝息をたてていた妹は、ご自慢の身体能力で飛び起き、私と距離をとる。

くツ……もう少し可愛らしい寝顔を見ていたかったと言うのに……!!

という訳でヨークシンシティの郊外にあるホテルから場所を移して箱庭^{パレロニア}。

私の念能力で作られた、なんちゃってな世界である。

首尾良く弟のラティストと私に誘か……お持ち帰りされた我が肉親の妹は、念空間に

再現されたちよつとした河川敷で目を覚ました。

「——あれ？　ちよ……リア姉?!　な、なんで私膝枕されてたの!?　というか此処、何処

!？」

「まあまあ落ち着いて。あ、お水飲む？」

状況把握に頭を回しているようだけど、そんな姿も可愛いと思ってしまう私は末期だ

ろう。

和むわあ……。

そんな寝起きの彼女に私は水とコップを具現化させて彼女に渡す。

眠気覚ましになればいいけど。……そうだ、ミントの成分を少し入れておこう。

「う、うん……—というかコレ何処から出したの!？」

えーつと、こういう場合なんと答えたらいいのかな。

強いて言うなら、

「……虚空?」

「……具現化させたわけ?」

「うん……そうだけど」

軽く睨まれた後、何をやっているんだこの人は、というような目で見られ、お姉ちゃ

んちよつと傷ついた。

悔しい、でも (ry

……いつか責任とつて貰おう。そうしよう。

「ハア………メモリを一体なんだと思ってるのよ、まったく。この水も返す!」

「ええー……飲めばいいのに」

「飲みません!」

水 (ミント成分配合) の入ったコップを投げ返される前に消す。

この妹、姉の好意を無下に扱うとは。まったくもって酷い奴だ。

「はあ……うん、もういいよ。……それで此処何処な訳？」

私に怒鳴っても何も変わらない事を悟ったらしいビスケは、私の隣に座り、若干疲れた様子で訊いてきた。

多分その質問に答えたらまた怒鳴られる。

きつと恐らくメイビー。

「言っても驚かない？」

「……………驚かない」

今の間はなんだと聞きたいがその前に答えることにしよう。

あ……

「……念空間」

「は？」

「だから私の……念空間」

「……………」

目が点になって口が開きっぱなしになってしまった。

綺麗な白い歯が顔を出している。

その口の中に指を突っ込みたくなる衝動に駆られる。我慢我慢。

「おーい。ビスケットー」

「……ホントに念空間なの、此処……」

「そ。それでさビスケ。そろそろ本題に入らせて貰ってもいい？」

「う、うん……」

じゃあ、と前置きして話す。

提案する内容はある意味全人類が望み続けてきたソレ。

神や悪魔と呼ばれるような私の能力による——永遠の若さを手に入れるかどうかの話だった。

「ああ……」

「ビスケ、大丈夫？」

「大丈夫じゃないかも。はあ……なんだかなあ……」

モノの十分で永遠の若さ——つまり身体の細胞を全部不死化させられたビスケットは見事なorzの状態になっている。

「そんなにシヨックだった？」

「うん……確かに嬉しいよ？ ずっと若いままでいられるのは。でもそんな、こんな

あつさり……はあ。私が作った念能力、一つ存在意義を失ったって言うか、なんていうか……」

ビスケットの能力は原作と変わらない魔法美容師マジカルエステのクツキイチちゃん。

私の能力に似通っているとところがちよつと微笑ましく感じるのは内緒。

原作そつくりのビスケットだが、一つ違うのがもう一つ能力があるという事。

内容は要約すると、あの本来の姿（この世界じゃ違うけど）の如く、自分の筋力だとかをブーストさせれるんだとか。

人外家族と暮らしていながら能力があんまり変わつてない所を見ると、なにか神の意思を感じたりする。

もしくはお父さんかお母さんが暗示か何か掛けていた可能性も無きにしも非ず。

ちなみに私は何もしていない。私は無罪だ（キリッ）。

「まあ良いじゃないの。別に死ぬわけじゃ無いし。むしろ寿命が伸びたんだし」

それに細胞の不死化の副作用として一生癌にならないというオマケつき。

研究機関に捕まったりしたら解剖されるの間違い無しだけど。

「ほら、元氣出して」

「うん……」

こつちまで辛氣臭く成りそうなほど落ち込んでる。

はあ……仕方ないなあ。

「能力、改良してあげよつか？」

「……………え？ そんな事も出来るの？」

あれ？ これ、言って無かったけ？

「出来るって言って無かった？」

「言って無いよ。ははは……………ウチの家族が人外過ぎて生きるのがつらい」

うわあー双子だあ……………ラディストも同じ事言ってた気がするぞ。

「……………ちなみに自分もその中に入ってるからね？ 分かってる？」

「あーさつき仲間入りしたしね、うん。もうどうにでもなれ……………」

半ばあきらめの境地に入ってるようだけど一つ訂正。

妹よ。君は不老になる前から人外だから。

決して私のせい……………じゃないかもしれないけど直接的には絶対違う。……………大体両親のせい。

私との修行三日目。

一日目はあの後すぐ初めて、重力二千倍くらいで呼吸が出来るように。

二日目は五千倍で呼吸が出来るように。

そして三日目の今日は、自分が気がつかない内に背後に回れるようになった弟との差を埋めれるようにと、ビスケは自分から『カトリア式修行 ハードモード』に切り替え

た。

「ぬぐぐ……なに、これ？」

「重力一万倍くらい？ ラディストはこの中で私と修行してたよ」

「お願い、嘘だと言つて。死ぬ、死ぬって」

「そんな大げさな。仮にもあの二人両親に鍛えられてるんだから死なないって。とりあえず

立ち上がるのが今日の目標。ラディは一日でクリアしたよ？」

「ふぬぬぬ……なら半日で私はあ………」

やっぱり双子。発破を掛けるには丁度いい。

ちなみにラディストは二日掛かっているのでむしろ半日で出来たら凄い。

二日目まではノーマルモード。念能力者なら一日で疲れが取れる内容。

で、そのハードからは並の念能力者なら二日は寝たきり。

後エクストラモードがあるが、私やネテロ、両親レベルじゃないと確実に初日から死

ねる内容なので勧めなかった。

幸いな事にビスケにはクツキイチちゃんがいるのでかなり回復出来る。

なんといつても新しくなった魔法美容師によつて、五分程度でオーラ、体力等が回復出来るようになったので必ずその日のノルマはクリアできるようになった。

やらされる方としては地獄でしかないけど。

「はあ……はあ……うんっ……」

というかエロく見えてきた。

もうちよつと重力強めてやりたいとか思ったり、思わなかったり。

「ねえ、お、お姉ちゃん？ つ、強く……んっ……なつてない？」

「なつてないよ、……うん」

強くなつてない……と思う。

うん。10001倍とかにはなつてないよ。

「ね、ねえ！ やつぱり、こ、れ！ つ、強く……なつて、るよ?!」

「なつて……無いよ？」

「嘘だー！」

この後ちよつとづつ重力上げてた事がばれた。

一週間口を利かないと言われて泣いて謝った。

つい魔が差してやった。

後悔も反省もしてる。

だからお願い、そんな無表情で殴らないでえー！

私は和服派……貴女とは違うんです！

1961年4月7日。

晴れ晴れとした天気この日。

……私は不老化して以来行動を共にしているビスケと近くの森の奥、古代の遺跡があると噂される街に来ていた。

此処へ来た主な理由としては、此処しばらく修行漬けで限界が近かったビスケの息抜きと、ハンターとしての仕事の最低限の仕事をこなすためこの街にやってきた訳である。

先程、屋台で買ったねぎまのような串を食べながら見てまわったが、街は活気に溢れ、私の第二の故郷であるジャポンとは違うものの観光としてはそこそこに楽しめた。

ちなみに私のハンターとしての主な仕事は未だ決まっていない。

強いて言うならば悦楽ハンター……とでも言った所かな。

内容は一般常識内で自分が赴く俣に動く事。

傍から見ればハンターらしくないと思われたりするかもしれないけど、ハンターなんてそんなもんだらうとか思ったり。

……ほら、ジンIIフリークスなんてゲーム作ったり遺跡の発掘したり分野問わずで将来するっばいし。

自分で言うのもなんだけど、駄目人間になりそうだとかわれそうでちよつと嫌な仕事名だったり。

まあ、そんな事よりも……

「うわあ……リア姉ー、これ可愛いと思わない?」

「あー、はいはい可愛いよー」

「むっ、お姉ちゃん酷くない? それに一応女の子だからちよつと位興味持ちなよ

……もつたない!」

「だーかーらー! 私の服の趣味と全然違うでしょうが! 私は着物が好きなの! 異

論は認めん!」

「……!?!」

「くく!!」

ゴシックドレスをひらひらと自分の胸に当てながら訊いて来る妹。

正直私の服の趣味とはかけ離れているので可愛いとしかいいようが無い。

……妹の買い物に付き合うのホント大変なだけだ。

「ふうー……買った買った♪」

「はあ……私の事ぜつたい荷物運びにしか考えて無いでしょ？」

「そんなことないよー……つて痛い痛い！ アイアンクローしないで！ マジ洒落になんないからあー！」

……ふんぬ。

「め、メキつていったあー！ わ、私が悪かったですうー！」

まったく……分かればよろしい。

ふおおおお、と頭を抑えながら唸っているビスケットの頭蓋骨の形を治し、再び森の中を進む。

通称迷いの森。

現地では人が入ってくる事を拒む神霊が住む森だとか。そして森の奥には神霊を祭る神殿がある、と。

だが来て見ればなんのその。

その実態は、昔森の中で住んでいた先住民族が念によって作り上げた自然の迷路だった。

ついでに言うのと今向かっている遺跡もその民族が作り上げたピラミッドだという話らしい。

情報元はその民族から追い出された女の人の曾孫。

その人自身が年老いてもう自分では確かめる事が出来ないと言う事で、ハンター協会に依頼投稿されたものである。

ただこの依頼。十年近く前からあって、誰一人としてこの依頼を受け、帰ってきた人間はいない。

依頼者も既に死んでおり、ハンター協会が「お手上げ」とした内容だったりする。そしてこの依頼を勧めてきたのがあのエロジジイ、もといネテロ会長。

あの臨・廻・剛を齡82歳で修めちやった私より人外なお人で、笑わせる事に、最近若返ってきてる、セクハラが増えたと協会の方に遊びに行つた時秘書が愚痴つてた。

そして最近では修行にばかり打ち込み、書類整理とかを完全に副会長と秘書に押し付けているんだと。

副会長はこの前、会長仕事しろ! とぐでんぐでんに酔つた時言つてた。

ちなみ言うとにまだパリストンっていう『ハハッ!』って笑つてそうな子ねずみは副会長じゃないし、勿論秘書もビーンズっていう豆みたいな人じゃなく、妙齡の女の人の。

多分あの二人が苦労している原因は私にあるのでちよつと気まづかつたり。

ともかく未だ元気な、いや元気すぎる会長から勧められた依頼だ。

どんな事があるかわからない。

久々に円を20キロほど飛ばしてみてるけど、白骨死体らしき形状の物体が10体位反応するし。……ちよつとこの依頼ヤバイかもかもしれない。

「いたた……リア姉。さつきから円してるみたいだけどなんか見つかった?」

「ん〜? 白骨死体が10体……今もう一つ見つかつて11体位見つかった」

「うげ。結構難易度高いんじゃないの、今回」

「……かもねえ」

せつかく休みが取れたと思ったのに……クスン、と泣き真似を始めたビスケは置いて、円を50キロ程まで広げる。

……おお、あつたあつた。

「あつたよビスケ。ここから42キロ地点のあたりに人工物が」

「なんでそこまで円が広げれるかな……? もうほんつと規格外。なに、ウチの姉は何になろうとしてるの?」

「——神か悪魔?」

……主に能力的な意味で。

「もおーやだ、この姉」

自分で言うのもなんだけど、今に始まった事じゃないし気にしたら負けだと思う。

『ザシユ、ザシユ』という音と共に、ピラミッドの入り口らしき所を塞いでいる蔦を斬桐舞で切り裂く。

「ふっ……また詰まらぬ物を斬ってしまった……」

「なにやっつてんの……?」

「石川五右衛門ごっこ」

「いや、誰よソレ」

むう。妹が冷たい。

とりあえず刀についた植物独特の緑色の汁を拭い落としとして鞘にしまう。

……さて、何があるんだろうか?

結果、見つかったのは二十冊ほどの念能力者が書いたと思われる手記とこぶし大の黒い石。磁性も無いし、何故か《神眼》でも分からなかった。

「……なんだろう」

「リア姉、それ宝石? 宝石なら私に……」

「いや、違う。宝石だったら分かるし、私」

「ちえー」

この石、ホントなんだろうか。

念をレジストする能力でも備わっているのだろうか？ 《神眼》が効かなかったって

事を考えるとありうる。

後で弄ってみよう。

ちなみに手記については色々と『発』の考察について書いてあった。

その内の一冊だけは誰にも知られないようにしないといけない。

日本語で書かれていたこれを書いたのは、おそらく私や私の両親、ディライト・クルー

ガーやレミア・クルーガーと似た境遇の人物。

妹の手前言えないが、あの遺跡はまだ探索しきれていない。後で来るつもりだ。

私と同類の人間が住んでいた遺跡を何も知らないビスケと探すのは少々危険すぎる。

まあ今はともかく、

「とりあえず依頼、完了ー！」

「……何処かで遊んで帰ろう？」

「残念、今日の夜から修行再開ね」

「ウソダンドコドーン！」

残念！ ビスケの休暇は 此処で終わってしまった！

……まあちよつと遊んで帰りましたけどね。

お酒は念に変えました。

1965年九月八日。

一昨年ビスケットが私の元を離れて。

数え年で私は30歳となる。

なんとというか最近憂鬱だった。

私が死に、この危険いっぱい&未知の生物わんさかのこの世界で生きて行く覚悟をしてから三十年。

これが丁度私が前世生きた年数でもあるわけ。

新たな生が歩めるようになったのは儲けもの。

しかし、戦争や貧困に困った環境で無いにしろ、歩く所を間違えれば死亡フラグが立する世界に来る事はないでは無いか、と何処に向けるとも無い、燻る憤りを感じていた。

そして、この何処にぶつけていいか分からない鬱憤を忘れるため、私は故郷と似通った景色のあるジャポンに赴き、日本酒……否、ジャポン酒の一升ビンをあおり、望郷の念に浸っていた。

「……嬢ちゃん、大丈夫か？」

「……………うん、大丈夫」

「とは言ってもなあ……それ、五本目だろ？」

「家で一本空けてるから六本……」

「……………すごいな、嬢ちゃん。何処にそんな入るんだよ」

とまあ、人気の無い居酒屋で心配されるほど飲んでいた。

……………だつてさ。

毎日毎日、一步一步漫画やアニメ、読書くらいしか楽しみが無かった、あの日常があつさり。

それこそコンマ三秒くらいで変わったんだもの。

一気に波乱万丈、逸脱したこの世界に誰の意図かもわからず赤ん坊の姿で目が覚めて。

きつと漫画やアニメのような世界だと気づかされなかつたら発狂していたと思う。

そして両親が、自分という存在に理解ある人たちで無かつたら、とうの昔に狂つていた。

言葉の憶え直しや、異なる常識の習得。

その他諸々をしつかりとした意識がある中、再度やる事になるんだから。

転生して女に生まれて。

男だった時の自分を捨てきれず。

かといって何だかんだと同じような境遇にあつた母親に、女としての意識を植え付けられて。

それでも異性は好きにはなれなかつたし、同性を愛そうという気にもなれずに。

同性の友達も作るのに抵抗があつた。

信頼できるのはそういう関係抜きにして接してくれる家族やゼノ。

冗談半分でセクハラはしてくるけど、年齢的には一回り以上離れてるネテロとか。

ああ、なんとも厄介な自分。

「……私、どうしたらいいんだろ」

「……」

「なんかさ、私これでも年齢的には30になるんだけど……ん」

握つた一升ビンを傾け、喉を潤す。

「——ふう。……どうにも、これからどうしたら良いかわかんないんだよね」

儘なら無い。

かつて、前世でも思っていたこの気持ちは切つても切れるようなものでは無いのか。

……いや、人でなかつたとしてもきつと自意識があるのならば悩むのかもしれない。

「……そりや、人生なんてそんなもんだろ」

「……はあ」

酒気を帯びた息を吐いていると声が掛かる。

黙々と作業をしていた酒屋のおじさんだった。

「俺だつて今こうして人の来やしねえ居酒屋のオヤジやつてるが……昔はアイドル目指してたんだぜ？」

「へー……」

「信じてねえな。——家飛び出して、挫折して、情けなく帰ってきて、親父のこの店継いで、今に至るつて訳さ」

「うーん……よく見れば男前だったのは判らないでもないな、うん」

「よせよせ、照れる。ま、人生色々それこそ十人十色。こんななりでも好いてくれる嫁がいて、結婚してんだ」

まあ、居酒屋のおじさんも結構苦労してるみたいだ。

ハンターやつてて、どんな職にも就けそうなのに苦労して来たとは言えないな。

私以上に嫌な想い、気苦労重ねてきた人なんて沢山いるし。

実際のところ両親との生活も楽しかったし、良い思い出しが無い。

流石に鬼のような念の修行は良かったとは言えないけど……。

「……ん、ちよつと元気出た。ありがとね、おじさん」

「おう、そりゃよかつた」

「代金、此処置いとくから。余ったのは好きに使って下さい。それじゃ」

「は？　ちよつと……つて消えた。何がどうなってるのやら……」

飲んだお酒代と少しを置いて居酒屋をあとにした。

私は自分のやりたい事を探すため、此処から西へ。

ただその前に一度、私の両親のいる実家へ帰る事にした。

テレポートを使い、実家玄関へ。

朝とはいえ、なんだかどんよりとした空気だった。

ただいま、と声を出してみるが、返事は無い。

出かけたのだろうか、と思ったが靴があった。

「二人とも……？？」

反響する私の声。

まるで住人の住んで居ない空き家のような……そんな感じ。

「――！」

唐突に嫌な予感がした。

靴を脱ぎ少し早走りで向かうのはリビング。

「……ははは……マジか……」

思わず笑い声が出る。

リビングに入り、目に見えたソファアームの上。

……そこにあつたのは仲良く二人して手を繋ぎ、幸せそうに逝った両親。

今まで一度も親孝行を果たさせてくれなかった二人の抜け殻。

信じられない気持ちで念能力を発動。確認する。

それでも二人の灯火は感じられない。

「……こういう時、どんな反応したらいいんだっけ」

わからない。

何も分からなかった。

ただただ、涙が目から溢れていた。

茫然自失と暫くなっていたが、ふと目を向けた先にあつた手紙に気づいた。

その私宛になってた二人からの遺書らしき手紙を読み進めていく。

内容は、

兄弟仲良くやれ。

家は管理しといて。

それから二人が隠していたもう一つの念能力。

要約。

『二人して同じ世界に転生するから兄弟仲良く、それまで家をよろしく!』

……。

あ、あははは……。

「——私の悲しみを返せッ! バカップル!」

私の声はむなしく無人の母屋に響いた。

手紙に書いてあった能力は二つ。

【エターナルエンゲージリング死が二人を分かちても】

・特質系十具現化系

この念能力は死ぬと発動する。

同じ能力を持った者と愛し愛し合う関係にあつた場合、発や経験、記憶を引き継ぎ、同世界に転生し再び愛し合う仲になる。

念系統は特質を引継ぎ、転生するごとに得意な念系統は増えていく。

・制約と誓約

死ぬ前に同じ能力者以外に知られると発動しない。

同能力者同士、互いに殺しあえば発動する。

死ぬ直前に具現化した指輪を嵌めていないと発動しない。

具現化させた指輪はオーラ総量の一割を使って作られ、死ぬまでははずせない。

自分と相手がこの能力を持っており、愛し合う関係で無いと発動しない。

他の世界には転生できない。

【七つの実がつく前に】
劣化型七見式見稽古

・特質系＋操作系

一度見た対象の戦闘技術を記憶し、自分のものにする能力。

・制約と誓約

凝をしていないと発動しない。

自身が戦闘中でないと発動できない。

ああ、なるほど。

私も私だが両親もチートだった。

それもドのつくほどのラブラブぶりで。

…ビスケ達になんて言おうかな…。

妹は言わずもがな、意外と弟の猫耳が似合っている件。

実家に帰った次の日の朝。

弟達を呼び出し、《箱庭》^{パレロニア}の中にしまっていた今は亡き父と母の体と残された手紙を見せた。案の定というか二人は泣いて、それから呆れた。声を揃えて『あの二人だから仕方無いか』と呟くのも忘れずに。

ちなみに遺体の処理については、特に手紙に書いて居なかつたためそのまま《箱庭》の中にしまっておくことした。

もう二度と会えないと言うわけでは無いために、葬儀を粛々として悲しめないため。……もしやつてたら葬儀を取り仕切る人におかしな目で見られる事は必須だった。

なんせ死者の眠りの言葉を受けている途中で笑いそうになってしまう自分が容易に想像できる。

両親が死んだ事はネテロ会長、ゾルディック家当主である我が友人ゼノ君にも伝えた。

しかし、『心中お察しします〜うんたらかんたら〜』的な反応であったため、思わず

ふき出してしまい、私の品性を疑われる事件も勃発。

理由は話せないため「あの二人なら生き返る」とだけ言っておいた。

まあ、勿論疑うわけで。信じた理由が「私の親だから」なのが少し気にくわない。……まあ、それしか信じられる要素が無い私にも問題があると思うけど。

……ちなみにだけど、死体遺棄じゃない。ハンター協会会長に頼んで死亡扱いにして貰ったから問題なし。

で、そんな徒然も無い事考えてる私は……

「ん、リンさんおかわり」

「分かりました、カトリアさん」

「……はあ。人の嫁を使うな、このおバカ。……リンもついでやるな」

「え、でも……それだとお腹減らしてるカトリアさんは……」

「あ、いや……すまんな、うん。ついでやってくれ」

……嫁の泣きそうな顔に弱いゼノと、そのお嫁さんのリンさんを家に招いて昼食の最中だ。

ああ、リンさん可愛い人だよ。

ホント、ゼノには勿体無いなあ……。

「……リンさん泣かしたら怒るからね」

「お前のせいだろうが！」

「ビスケがだけど」

「お前じゃないのかよ！」「私が!？」

お茶碗を受け取りつつ目の前に座るゼノに凄んでいると、ゼノと私の隣に居る妹が叫んだ。

……ああもうゼノのやつ。つば飛んできたじゃん。

顔を拭きつつ、ビスケの顔についてたご飯粒をつまんでゼノの顔に向かって飛ばす。

案の定、箸で摘んで止められた……あ、食べた。

「……で、ビスケ。お前は私に文句があると申すのか？」

「別にそんなことはないけど。……でも今のはお姉ちゃんが「こんな可愛いリンさんを泣かしてもいいと？」駄目」

「……じゃあ泣かそうとしたゼノは？」

「ギルティ……!!」

……良い感じにビスケが怒ってくれた。

「おいお前。妹を誘導して俺を貶めようとするんじゃない……食事中だつっうのに」

「言いつつ、ゼノさんも飛んできてる箸掴むんですね……おい、ビスケ止めとけ。コップ

は危ない」

中身の無いコップを振り上げ投げつけようとした腕を、弟が諫めた。

……ビスケのヤツさらりと周してるし。

「……ちっ！ 寿命が伸びた事を有り難く思うことだナー！」

「……お前一回本気でヤルか？」

ジョ○ヨ的な「何か」を体の隣にだすビスケに、同じくして背後から龍のようなオラを発するゼノ。

「——いい加減にしなさい！」

「はいいい!!」

食事時の小さな喧嘩は、啖呵切ったリンさんによつて鎮められた。

そんな中、黙々と食事を済ませた私は、

「……カトリアさん、あとでお話しましょう？」

「……………はい」

逃げる前に猫のように襟首を掴まれていた。

……ゴメンなさい、だって二人を弄るのたのs——にやああ……。

両親の死や色々と伝えるために招いていたゾルディック夫妻は家に帰った。

私と言えば、十二歳になったシルバ君に会えなかったのが残念だった。

なんでも私に会うのが嫌で、行かないと駄々を捏ねたらしい。……駄々を捏ねる事は珍しい出来事だったそうだ。

私の自慢のお胸で窒息させてやろうと思ったのに……ああ、残念。

「姉ちゃん」

「……何かな弟」

「その耳は」

「……何も言うな。一年間コレで過ごさせてリンさんに言われたんだんよチクショウ」

「は、ははは……」

「なにそれ可愛い」

二人が欠けた、一家団欒の時間を過ごしている私はぴくぴくと頭に生やした猫の耳で答える。

ビスケの目が危ないです。ほんのり貞操の危機を感じる。

にしても、どうやらビスケちゃんは羨ましい様子。生やす。

「分かった？ それをつけると言う屈辱的な何かか」

「そんな猫の耳生やしてドヤ顔で……ぶっ」

「…………え」

呆けているのがビスケット。ビスケのほうを見て吹きだしそうになっているのがラ
ティスト。

……猫耳のビスケットは可愛いのお。

「な、なああああああ！」

「はっはっは！」

色々とおかしな事で笑う私達一家。

本来ならば超常の出来事である事ですら話の種にする私達は、やはり何処か狂っ
ているだろうと頭の隅で思う。

……といっても今更過ぎてシリアスになんてなあ、と思う自分も居るわけだけど。

「リア姉！ 治して！」

「よっし、私に一撃当てれたら治してあげる」

「うわあ……」

「というわけでラティストも……ほいつ」

「俺も!? ……あ、生えてる……」

ポン、と音がなる事も無く、頭にもう一对の耳が生えた弟と妹を足元から《箱庭》送
りに。

浮遊感に驚きの声を上げながら二人とも落ちて行つた。

……さて、ちよつくら修行しますかね。

《箱庭》の中に入り、すぐさま目の前に迫る不可視の豪腕。

まずはビスケだった。

彼女の念能力は三つのモードがある。

一つが本来の能力たる《魔法美容師》^{マジカルエステ}のクツキイチヤン。

二つ目が、そのクツキイチヤンを身に纏い、自分を会った事のある人間に姿を変える
《美之模範者》^{ビューティモデル}。

三つ目が自分の能力の名前を知る人間以外には見えない念獣で、触った対象の細胞を
弄れる能力を使える《幽波紋・クレイジー・ビスケット》^{スタンド}。

治癒の性能を極限にまで対象に与えて自壊させるのもよし。

普通に殴りつけて壊すもよし。

……まあ、言つてしまえばクレイジー・ダイヤモンドの再現なだけだ。

いや、ある程度弄れる事と自分の体もなおせる事で少しばかり違うか。

……とは言え、

「——当たらなければどうと言う事は無い、ってね」

「えっ……!」

迫る豪腕は私の体を透過し、振り抜ける。

……能力の改造でネタに走った私には弱点が分かる。

その原作のビスケットの姿をした、その腕の第二関節より下に直接当たらなければ良い訳だから。そのため念で具現化した身体に当たっても意味が無い。

「だからこうして腕を掴めると……!」

「ちよつとなんで!」

「いや、凝したら分かるんじゃない?」

「はっ! 念の具現化?!」

ビケットから見えるのは恐らく念の塊。

そして本体の私は横から殴る。

「がッ……!」

「というわけで! ……ビケットは脱落つと」

脇腹からのクリーンヒット。

空気が漏れ出て少し浮き上がる彼女の身体に、延髄に向けてのかかと落としで意識を刈り取る。

肉親にコレは無いだろう、と誰かが言いそうな気がするけど、コレが私達一家なのだ。

仕方無い。

「おっと、……奇襲？ 失敗失敗」

「ああ、クソ！」

突如として背中に生えた腕はラディストの回し蹴りを払う。
バスケットがやられた瞬間を狙ってきたようだけど甘い。

「ホンツト！ 人間の範疇超えてるよ、この姉は！」

「て、照れるぜ……！」

「褒めて無い！」

「あ、うん。ふざけてみただけ。……猫耳、似合ってるよ？」

「ガアあああああ！」

おう、こわいこわい。本心言っただけなのに。

顔が真っ赤だ。照れてるからか、怒っているかは……まあどつちともという事にしと
ころ。

でも残念ながら怒るのは得策じゃない。

「……せやつ！」

「ぶっ！」

死角から正拳で一突き。

顔面に入り、ラヂイストの美顔が痛みで歪む。

「これでも気絶してないのか。頑強になったなあ……ラヂイストも」

「う、っさ……いい！ ふうッ！」

『廻』をしたのか顔の腫れはすぐさま引き元の美青年に戻る。

それでも口の中を切ったようで、血の混じった唾を吐いた。

「うーん……次は脳を揺らすか……」

「おつそろしいこと考えるよ。……でもありがたい、おかげで少し冷静なれたから」

「……なら早く、」

「俺のためにやってくれたんだろうし、ちゃんとお礼は言うよ」

ニコリと女殺しの笑みが炸裂。

くっ……無自覚ながらイケメンレベル高すぎ。

あーやばい。顔が赤いかも。

「……姉ちゃん？」

「うるさい！ さっさと掛かってこい！」

「じゃ、遠慮なく……！」

そういつて放ってきた蹴りは防御が甘かったせいか、私の身体が少し左側に浮く。

「これ、一撃にはいる？」

「はいんないー！」

大きく一息吐いて、一回心持ちを整える。

少し思考がすすきりした。

「……ふう。ちよつと本気出すか」

「お、お手柔らかに………しまったなあ」

ボソツと言った言葉から察するにコイツ自覚してやってたか。

地面を一度に四回蹴り、一気に加速し近づく。

「や、やっぱはえー……」

「あらどうも。じゃ、気絶コース——行ってみようか？」

鳩尾へのアツパーカット。

そのまま上へ振りぬき、ラディストの身体は浮き上がり白目をむく。

呼吸困難確定の一撃に加え、拳を挟りこみつつ内蔵に直接ダメージ加えたから気絶は

確定。

内臓破裂は必至だったが、治しつつ殴ったためならなかった。

「……ほか骨折、傷諸々と異常なし」

同じく寝息をたてるビスケットも異常なし。

まあ二人とも善戦した事だし、猫耳は止めてあげよう。

……私はそのままだけだ。

私に猫耳を生やさせたままにするリンさん。……あの人、実は天然の念能力者だ。針を使うその筋の家の出身らしく、針を刺した相手に一つ命令出来るんだとか。

……だからなのか、暗殺一家として名高いゾルディックに嫁入りしたらしい。

「……やっぱりそうなるのかなあ」

ゼノの一番孫はお婆ちゃん子か、と考えが飛躍して声が出た。

傍らで眠る二人の頭を膝の上に置く。

二人を撫でながら、これからの事を考えつつまどろんだ。

——……あ、そういえば。

「二人とも。お墓の前で戦闘しちゃって……ごめんなさい」

後ろ手に見える念で出来た二つのお墓に一つ、手を合わせて頭を下げる。

……うん、居ないと思うけど……ゴメンなさい。

くじら島って狭いように見えて結構広かったり。

両親が死んで一年と少し経った1967年。

リンさんの能力で猫耳が消せないためハンチング帽が手放せなかった一年間は辛かった。

いや、ハンチング帽といってもまあ髪のを擬態させて作ったやつだけ。

現在私がいるのはくじら島にある拠点。

原作の主人公とその父親。その二人が生まれ育った決して便利とは言えない小さな孤島だ。

といつても島自体はジャポン近海にあるリュウキュウ王国（——つまり前世でいうところの沖縄）程度には面積はある。

ただ人間の生活圏が狭いので実際にはそこまで広くなかった。

で、私がいる拠点があるのは人間のいる生活圏から離れた森の中。キツネグマの縄張りの中に念で家を建てて住んでいる。

キツネグマからしたらいい迷惑だと思うけど、まあ、気にしない。

たまにやってきてお茶を振舞う仲だし。

そんな世捨て人のような生活をしている私だが、幾ら人並み外れているといつても人間であることには変わりない。

例え念オーラを吸って生きていけるといつてもだ。

……人間って会話がないと生きてけないんだよね。

だから偶に会話を求めて食材の買い出しとか色々行ったりしてるのだけど……ちよつと今日はいいいことがあつた。

「まさかね……まあ、この頃かなとは思つてたけど」

——数日前、この島に新しく男の子が生まれたらしい。

名前は……ジン。ジンⅡフリークス。

原作主人公、その父だった。

狭い島でのめでたい出来事ということで噂を聞きつけた人たちはこぞつて家を訪れていた。

ご祝儀として近辺でとれる果物等を詰め合わせて持つていたのだけど……多分。本当に多分だけど、もうはつきりとした意識があつたように見えた。

もしかして生まれつき念が使えるとか……つてないか。

転生したらしいウチの両親でない限り——あ、なんか嫌な予感が。

無いよね？　うちの親のどつちかがジンとか……無いよね？

まあ、いずれにせよ交友は持ちたい。

だって原作キャラだもん。

……まだ赤子の相手にこんなこと思うのおかしいけどね。

二、三年くらいしたら接触しよう。

ビスケと行った、私と両親の同類が作った里というか遺跡にあつた手記と残されていた黒い石。

手記の内容は日本語で書かれてあり、残されていた黒い石についてとHUNTER×HUNTERの様々な考察が書かれていた。

考察は置いておくとして、まずはあの《神眼》で解析できなかった黒い石。

曰くあつちの世界から来た憑依・転生者、漂流者達で作った念能力らしい。手記通りならそれかなり廃スペックな。

黒く丸い石ころの姿が待機状態らしく、「起きろ」とか「起動」とか握りながら念じるだけでいいらしい。

そして起動したときなんだが……なんとというかカオスというか。

本来、起動させた人の意識によって姿、能力を変えるらしい。

人型であることもあるし、リリカルな魔法少女が持つ機械杖であることも設定上では

考えられる、と。

制作に携わったのは百人強。

その全員が同じ思想を持って作ったのがこの石なのだそうだ。

しかし、それだけの人数をしても完成には至らず。

全員が死に、後に『執念』として現世に残り完成していたようだった。

この念能力の名称を『邪気眼』という。

……待機状態の黒い石が瞳に見えなくもないのが彼らの妙なこだわりなのか。

気持ちが変わらなくもないのが痛いところである……右手が疼く的な意味で。

それで起動させたのだけどなんだか不確かだった。

というのが「なれ」と思ったモノになってくれて……例えば愉悦、とか言う赤い弓兵にもなったり正義の味方気質のA U Oにもなったり等々。

元々そういうものなのか、それとも私が特別そういう風に扱えるのかはわからないが、確かに他人の手に渡れば恐ろしいことになりそうな代物だ。

試しに某騎士王の『約束された勝利の剣』を出して使ってみたら『箱庭』の中で断層が出来たし。

ただこの石、

「私には宝の持ち腐れなのよねえ」

「どうしたんじゃ急に」

「いや。独り言だから気にしなくて結構」

……自分で念獣くらいなら幾らでも作れるから本当に宝の持ち腐れ。

今度弟に会ったら渡そうかなと考えながら湯呑の緑茶を啜る。

……私は現在暇を持って余してハンター協会にお邪魔していた。

今は会長と二人、のんびりとお茶を飲んでいる。

「会長、前にも聞いたけどホントに教えてないわよね？」

「教えとらんぞ。ワシは約束だけは守るからのう」

「絶対駄目だからね？ アレ、教えたら習得できるようになっちゃうから」

言わずとも、臨・廻・剛の三つ。

実はあの三つの応用技は両親の作り出した能力で習得出来たものだった。

ある種のこの世界における事象の上書き。

本来なかった、出来ないはずのこの応用技を可能にし習得できるようにしたのは他で

もない父と母。

特質系の能力で念の概念に本来ない、精孔から続くオーラの流れる道の精脈とオーラを溜め込むタンクの丹田——つまるところNROTOにでてくるチャクラの経絡系みたいなのを、使うことのできる人間からやり方を聞いた人間に構築する、というのが

両親の作った念能力だった。

死んでも尚影響力が強いつて……はあ。

まあ、私の両親つてだけのことなのか。

くじら島にジンⅡフリークスが生まれてしばらくして選ばれた十余名。

将来、この中で『十二支ん』として残っているのは何人になるのか。

私とネテロの足元でその十余名全員が全員気を失って倒れていた。

昼寝、日向ぼっこ、十二支んメンバーの育成。

その他諸々ハンター協会の難度の高い依頼をこなしつつ数年が過ぎた。

ここ数年であの赤ん坊だったジンⅡフリークスは今ややんちゃな五歳児。

それがついこの前、私家が空けていた時此処へ来ていたようだ。

キツネグマの縄張りだというのに……大物というか向こう見ずというか……そこら辺が主人公のゴンが似たところなのだろうか。

きつと将来ゴンの養母になるだろう未だ幼いミトちゃんの心労がマッハ。

遠目ながら見ているけれどジンに振り回されてミトちゃんがため息をついてるのをよく見る。

……違うねん。ストーカーとかじゃないねん。

どうせストーリーキングするならビスケからデイストをストーリーカーしたい。常に変な視線に怯える可愛い。

……ゴホン。

と、まあ今日、ストーリーカーしたいお年頃の私は周囲に気配を溶け込ませ、やんちゃ坊主なジン君を待ち構えているというわけだ。

どうにもジンは念に気が付いている節がある。

家自体、念の塊のようなものだから気づけたのかもしれないが、立地が立地だし気になつて入ってきたというのも無きにしも非ず。

だから念のため。念のため完全に気配を失くして待つてれば警戒無く来るだろう。

後二、三十年先に起きるだろうクルタ族の事も危惧しつつ。

同類の先人が残した手記を片手に、念で作つて具現化させたす〇すく白沢をモフつて待つていた。

モデルはビスケ。

すく〇くの柔らかさは胸の柔らかさと同じです（キリッ

「……………来ない」

……結局ジンは来ないまま、モフつて一日が終わつた。

二人が覚えるんじやあない——私が覚えさせるんだ。

——1974年7月9日の出来事。

「こんにちわ。お姉さんとちよつとおはなし——」

むにゆり。むにゆり。

「ちよ、ちよつとジン！ 何お姉さんの胸を揉んで」

「うおおお！ すっげ！ だって、こんなに大きいおっぱい見たの初めて」

私は下へと視線を下ろし、状況を把握した。

——それは衝撃ッ！

——それは驚愕ッ！

初対面でまさか、まさか胸を揉まれるとは思わなかった。

いやー焦るわー胸をいきなり揉まれるのかマジ初めてだわー……とりあえず。

「——正座ね？」

「はいいいいッッ！」

私、今凄いイイ笑顔してると思うんだ。

くどくどくどくど、と。

路上の大衆の面前で。

しなくてもいいのにミトちゃんも正座をして私の説教を受けていた。

説教を受けている二人。共通していることと言えば目に涙を浮かべて正座を堪えている事か。

私が説いたことは、まず初対面の女性の胸を何故揉んではいけないのか。

それから胸とは何か。おっぱいの違い。現女性である私が説くのもなんだが、男の浪漫ではあるがそれ以上に重要なこと。子供だったから許されているが大人になってすれば確実に捕まるということ。

「そして最後。——揉むんだったら恋人の胸を揉みなさい」

「……あい」

周りから少なくとも拍手が行われた。

表情がナニカ化していた二人の顔は、拍手の数に比例して真っ青になっていく。

浪漫の話のあたりから男性の皆様が集まってきて、乳がんの早期発見に繋がるだとか、フェロモン分泌によってサイズが大きくなるだとか医学的な内容の話になると、女性の方々もチラホラと聴衆に出てきて。

どんな羞恥プレイやねん。

私だったら泣いて逃げてるわー引きこもっちゃうなー……。

「えつと、二人とも。お姉さんの家でご飯食べて行きなさい。……この場から逃げるよ」
戸惑う二人を他所に私は二人を腰に抱えてこの場から逃げた。

二人の家に二人の筆跡で『外で食べてくる』という趣旨の書置きを残して、私は自宅に跳んだ。

《あの場所にもう一度》で家まで飛んだ私は二人を椅子に座らせて、ぱぱっと料理を作り、彼らに振舞う。

二人は状況を飲み込めないようであったが、ご飯を食べ始めたならそんな様子もなくなった。

……ジンに至ってはわかりままでして、満腹になったらしい彼はソファーに横になり我が物顔で現在寝ている。

生意気な奴。……一応子供だから許すけど。

ジンが勝手に寝始めたことに代わりに謝ってくれたミトちゃんには紅茶を。私は煎茶を。

本題含めて束の間のテイーブレイクと洒落込んだ。

「……そつか。二人は幼馴染で従兄妹なんだ？」

「はい。……そういえばお姉さんはなんでジンに声をかけたんですか？」

「いや、ちよつと気になることがあつてね。大つぴらには言えないけど……もしかしたらジン君、超能力がつかえるんじゃないかなつてね」

「え、それつてどういう……」

念で創り上げた力あるヴィジョン。その腕で減っていたミトちゃんのカップの中に新しく紅茶を注ぐ。

驚いてくれたようで目を見開いていた。

「ね？ こんな感じ。……ご感想は？」

「……えつと。トリックじゃないんです、よね？」

「うん、そう。これで分かったかな——ジン君」

「——え？」

これを見せる相手はミトちゃんではなく、やたらと精度の高い狸の寝入りをしていたジンフリークス。

むくり、と起き上がつて訝しげに私を睨んでくる。

「君には何が見えた、ジン？」

「……腕。殴られたらひとまりもない腕だった」

「正解。……ね、ミトちゃん。君には何か見えた？」

「み、みえ」

「——見えなかったよね？」

「……見え、なかった……」

嘘を吐こうにも彼女を取り巻くオーラがすべて物語っている。

残念そうに、悔しそうにミトちゃんは言った。

それはミトちゃんにとって、自分は幼馴染とは違う、その再確認のよう。

きつと違いなんてないと思っていた彼女には辛いことだろう。

……だからっていえば可笑しな話だけ。

「ジン君に聞くのは勿論だけど。——ミトちゃん」

「……なんですか？」

「超能力、使いたい？」

ちよつと原作をブチ壊そうかと。

「そーいやジンってさ、私の家に勝手に入ってきたことあるでしょ？」

「……なんでそんな急に？」

「……、円の役割果たしてるからね」

「マジかよ」

ジンは「ホント師匠は規格外だぜ」としみじみと言うが、なんだろう、一ヶ月で念の応用技に入る子に言われたくない。

ミトちゃんもまた、広げた部屋の真ん中でまるで外界から切り離されたように座禅を組み『纏』のように見える速さで『流』を続けている。

ちなみに私の教えた『流』の発展形応用技、『激』だ。

簡単な話、『硬』を高速で動かすだけのこと。

コンマ零何秒とかけずに動かすので『流』が超スピードで出来ないという意味がなく、また動体視力が抜群によくないとできない。

——まあ、ミトの『発』があつてこそ使えるような応用技だろう。

さて、そんな二人の修行風景はともかく。

——二人に念の修行をするかどうか提案してから6ヶ月。

まず、念能力の危険性を忠告し、その危険性を実際に見せ改めて使えるようになるかどうか問う。

もし使わない、と答えたのなら記憶から念能力についての存在を消し、無かったことにしてこれからの人生を歩んでもらうつもりだったのだけど、まあ、面倒だから断られなくて良かった。

……で、結局二人とも使い方を習うことになったんだけど……私程度に念の才能があつたジンはともかく、それなりにミトちゃんにも『稀代の才能』というべきものはあつたようだ。

もう念の四大行を修め、ジンもミトちゃんもすでに応用技。

いまではすっかり二人だけで拠点まで通っている。

まあこれだけ成長が早いのは私の教え方がうまい、つていうのもあるんだけども。

簡単に言えば二人の身体を動かしてコツを掴ませるということ。

要するに『覚えろ』だ。

ただそれでも二人の才能云々についてはやはり遺伝だった。

調べてみれば、案の定、二人の共通のお婆様が相当才能を眠らせているようで……

しかしもう、そのお婆様は既にかなりお歳を召していらつしやるので教えることはしない。

まあ歳をとつているといっても私の精神年齢ほど歳はとつていないけど。

……さて。

「それじゃ今日の指導を始めるよ。ジン、ミト」

『堅』をしていたジンと『流』をしていたミトの二人に声をかけ、足元に《ゲート》を作り、《箱庭》へと落とした。

蹴り、肘打ち、殴打。

「はあああ！」

「うん、いい調子いい調子。でも私に『堅』をさせるくらいでないよ！」

「畜生！ 絶対師匠可笑しい！」

「ほうら！ 『堅』が甘いよ！」

肉が鋼をたたく音が連続して響く。

……ちなみに肉側私で鋼側がジン。ちなみに私は『纏』だけだ。

「なんで手ごたえねーんだよ！」

「なんででしようねえ？」

「うっぜえ！」

全身の骨肉すべてを『軟化』させた私に死角は無い。衝撃は現在地面にすべて逃げていた。

反撃に出る。ドヤ顔でジンの殴打を上に跳ね上げ、手首を掴んで捻る。

「ちい……ッ！」

「おおっと」

そのまま大人しく捕まってくれない。捻った勢いで体を回転、回し蹴りを放つてく

る。

ジンは掴まれている右手首を離させようとしたのだろう。回し蹴りは掴んでいる左腕にジャストミート。

しかしそれでは終わらない。

蹴りを行つた左足を私の腕に巻き付け、まだ小柄なジンは私の腕にくつつき、まだ手を離さない私の腕を外そうとする。

おそらく並の念能力者なら肩が抜ける。それを逃れるために掴んでいる右手首を咄嗟に離すだろう。

もし離さないとしても、痛みのがあまり離れる。

しかし……私には何の意味もなさない。

「……おいおい。師匠って人間やめてる?」

「んー……ニンゲンカツコカリ?」

「んだよそれッ——!」

ジンの思惑どおり肩は抜けた——いや正確には違う。

私は態と関節を外してしなる鞭のように腕を振り下ろし、くつついていたジンを地面にたたきつけた。

うーん。加減したけど……

「大丈夫、ジン？」

「だい、じょう……ぶ」

見学していたミトちゃんはずつ倒れたジンに近づいて覗きこむ。

あーちよつとやりすぎたかなあ…。

肺を圧迫したよう息ができなさそう。ちよつと苦しそうだ。

「ぶはあああ！——えげつねえ。自分で自分の肩外して伸ばすとか」

「やつぱりそうなんだ。カトリアさんの腕が伸びたように見えたけど」

「えっへん」

「ほめてねーし！ちっ……！なんであんな胸でかいのに早く動けんだよ……」

「いいなあ……」

何、ただのズームパンチの応用である。

やろうとおもえばロケットパンチもできるけど、切断面がグロいからそこまでの事はしない。

それにしても、ジンの戦闘センスには脱帽だ。

普通、あんな戦闘中に腕に絡みついてこない。あれにはビックリした。

まあ、そんな程度でどうにかなるような鍛え方してないけど。

「じゃ、とりあえず今日の挑戦はお終いね。残念だったねえージンー！今日も私に勝

てなくてえ！」

「うぜえ……絶対勝つてやる——！」

「大体そんな簡単に勝たせてたまるか……このマセガキめ」

「いてっ」

ふてくされる七歳の額を小突く。

まあ、私に勝つことは絶対ないだろうけど。

……ジンが私へ挑戦し、勝利に固執する理由。

「絶対勝つて——結婚してもらおうからな！」

「はあ……私のおっぱい揉みたいだけなくせに」

おう！ と意気揚々と答えてくれるんだから腹が立つ。

ミトちゃんと一緒にため息を吐きながら、これもまた一緒にジンの頭に拳骨を入れる。

「いってえ——っ！」

「……お昼飯にしようっか」

「……はっ」

涙目のジンをミトちゃんが担いで、《箱庭》からくじら島の拠点に戻る。

一つ言えるのは、一歳差のミトちゃんがジンを担いでいる姿はとてもシユールだっ

218 二人が覚えるんじゃない——私が覚えさせるんだ。

た。

微笑みつて本来威嚇を隠すために生まれたってエロい人が言ってた。

——私の攻撃を軌道をずらすように受け流す。

規則的に。時に変則的に。

……連続して行われる私からの攻撃を彼女は予断なく確実に後方に流し、攻撃の隙を突こうとしてくる。

ジンが攻撃的な戦闘スタイルならば——この子は防御的戦闘スタイルだろう。

実際攻撃的な性格ではないし、戦うことを本来嫌ってる。

その性格は彼女の開発した『発』が物語っている。

彼女は放出系。放出系の念能力者らしく、強化と操作にもそこその適性がある。

開発した『発』は「自分が『纏』の状態で、攻撃された箇所を『硬』にする」というもの。

自分の身に危険がある攻撃が行われた場合、自動的に『硬』で防いでくれるというものだ。

私の教えた『激』は高速で『硬』をしている箇所を変えるということ。

つまり彼女に攻撃するのは必然的に『攻防力100の箇所に攻撃を当てに行くような愚行』を選ぶ事となる。

まさしく『激』は彼女の『発』のためにある応用技と言えた。

ただ、弱点として一つ。

「——つきやあ!!」

「ふっふっふ……捕まえたあ……」

「ひっ……!」

……被弾箇所が増えれば必然的に攻防力が下がる上にオーラの消費も増える。

私の髪のように面による攻撃に対して、おまけに身体を拘束できる人間にはどうしても弱い。

彼女——ミトちゃんはあっさりと私に捕まり雁字搦めに、口と手足を縛られた。

「ンン——ツ!!」

「ぐっへっへーどうしてくれよっかなあ……!」

……ミトちゃんはこの後私に撥られ、悶絶して気絶。

「カトリアさんのバカあ……!」

「ごめん、ミトちゃん。……でもだからってジンの急所を蹴り上げるのはよくないと思

うの」

「——ッ——っっ!!」

案の定、目覚めたミトちゃんは涙目激昂。

八つ当たりにも男限定の急所を蹴られたジンは泣いていい。

なんなら胸も貸してやる。

……元男で痛みがわかる私が治してあげるから。

——と、まあ朝のミトちゃんとの組手でつい触手○○○的な意味で魔が差してしまつた私。

それから、私にかなわないからという理由の元、八つ当たりとして色々な意味で死にかけた哀れなジン。

そんな可哀想な彼に胸を貸してやり、せめて安らかに泣かせてやろうと思つたら遠慮なく揉まれてしまい、思わず1割の力で殴ってしまったが、私は悪くない。

……いや、まさか初めて首が取れた状態から死者蘇生をする事に——ゲフンゲフン。

そんなひと騒ぎがあつた今日。

「じゃ、午後は休みにしよっか」

「はい」

「えー修行しないのかよー」

「ジン、休息も大事だっていったでしょ？ 大人しく師匠の言うこと聞いときなさい」

「ちえ……」

機嫌を治したミトちゃんは素直に言うこと聞いてくれるので嬉しい限りだが、ぶーぶーとジンは不満そうだ。

いや、ジンのためなだけどね？ 覚えてないだろうけど一回死んでるんだからね？

……もしものことがあつたら不味いから休ませようと思ってるのに。

あ、いや、うん。ミトちゃんとジンにとつては何もなかったね。

記憶には御座いませんだもんね。

血しぶきの雨なんてグロイ映像はなかった。

「……でも、急に休むといつても何して過ごすんですか？」

「いやあ、ま、そーなんだよねー……実は無計画だったり」

「えー……無計画かよお……なら修行でもいいじゃんかー」

ジンの言う通り前言撤回して修行っていう手もあるけど……あ、そうだ。

「ちよつと心源流の道場行ってみよつか？ そろそろ常識的な念能力者の姿を見るべきだろうし」

「——はい？」

……そろそろ自分たちがどの辺にいるか知った方がいいよね。

二人を連れて《テレポーターション》で心源流道場前まで跳ぶ。

「入るよ、二人とも」

門を潜り抜け、見上げていた二人の手を引いて中に入る。

二人に見えないようにハンターライセンスを見せて、受付の女性に名前を告げて入らせてもらう。

「え、顔パスですか？」

「まあね」

「……」

私がハンターであることはバラしていない……なんだか言い出せないものでして。

道場の広間では丁度、道生達がい思い思いにグループを作り雑談しながら休憩をしていた。

「あ？ 誰だ、あの子連れの母親は」

「いや、よく見ろ。全然似てないぞ？」

「……ああ、ほんとだ。確かに似てない」

「……でも何たってウチに？」

「さあ？」

ちらほらと私たちの話が聞こえるが無視だ。

ただ、視線のきつい人たちに睨まれてかミトちゃんは少し私の後ろに隠れた。

対してジンは堂々たる態度で……の割には私に手をつながれて嬉しそうなお子さまにしか見えないのは何故だろう？

……ちよつと居心地の悪い空気の中、私たちは彼らの視線から抜け出して奥に進み扉に手をかける。

妹と弟曰く、念能力者とそれ以外の者たちを区切るためにあるこの扉は、『纏』で纏つてるオーラに反応して開けるようになっていているらしい。

なるほど。実に簡単だ。

——そして扉を開いてすぐ。

飛んできた人間を受け止め、その場で衝撃の緩和のために回転させ、地面に降ろす。

「や、ラディスト」

「え、あ……姉ちゃん」

「……来ちゃった！」

「来ちゃった！ じゃないよ、まったくもう……！」

稽古相手を投げてきた我が弟のラディストIIクルーガー。

会っていきなりため息を吐かれた件について。

……お姉ちゃんちよつと寂しい……！

「……おいリア姉。俺、仮にも師範代なんだけどさ」

「そんな怒らないでよ、もう……」

ラヂイストに別室に連れ込まれて身勝手すぎだと怒られた。

連れ込まれてつとどこだけ聞くと私とラヂイが——あー実の姉を殴るんだー！

ふう……まあ、私と違って立場とかあるし仕方ない。

でも此処くらいしか普通の念能力者に伝手があるとこないだもん。

念能力者で知り合いといえば暗殺者でしょ？ ハンター協会の会長でしょ？ あとは……最近念の指導を受けたらしい刀鍛冶の御影くんくらいだ。結果どいつもこいつも実際物ばつかり。

「ラヂイ、お願い！」

「はあ……わかってるんらしいよ。……見学も許す」

「やった！ じゃ、此処の念能力者戦わせてももらつてもいい？」

「見学つて言った……はあ。うん、もういいよ」

ラヂイストは「やれやれ」と額を押さえて言う。

呆れた視線で見られてお姉ちゃん辛い。……でも悔しい、感じちゃ……!

……ゴホン。

許可降りたーと道場に続く扉を開きながら言うと、男性と言い争っていたらしいジンがこつちに振り向く。

「どうしたの、ジン?」

「あ? てめえが此奴の師匠だつて?」

「……そうだけど? ちよつと待つてて、ジンと今話してるから後で」

一応突つかかかってきた男性のおかげで状況把握。

でももしかしたらがあるのでジンに聞く。

「それで?」

「お前の師匠なんて大したことない、っていつてケンカ売ってきた」

「……ふーん、なるほど。じゃそつち、何か弁明は?」

「実際大したことねーだろ? 事実『纏』すらしてねーみたいだし。知ってたか嬢ちゃん、念能力者なら普通『纏』使って日常生活してるもんだぜ?」

あーなんだろう。久々にお嬢さん扱いされた。

ケタケタと何がおかしいのか一人で笑っているけれど、ほかの人は全然笑ってない。

私の予想通りだったけど……なるほど、典型的な空気読めない人だった。

「ちなみにさ、さつきまで貴方いたっけ? ……おーいちよつと聞きたいんだけど、この人さつきまでいましたー?」

「い、いえ……今日は遅れてきたみたいで……」

丁度近くにいた、さつきラディストに投げられた青年に聞く。

顔が青ざめてるのは……ああ、うん。知ってるもんね。いつもより多く回されたものね。

「ちなみにさ、貴方、私の名前聞いてないのよね? じゃ、名のつとくね。……カトリア

Ⅱクルーガー。貴方たちの師匠の姉よ。……ラディストーこの人で試してもいいー?」

「なっ……!?!」

「……はあ……良いけど、殺すなよ姉ちゃん」

後ろに来ていたラディストに驚いたのか、それとも変わりようのない事実と現実と血の気が失せたのか。

につこりと、私はこちらに向いた彼に微笑んだ。

える、しってるか。ほほえみってほんらいこうげきてきなものらしいぜ。

友人の息子に先を越されたアラフォーの心境は複雑。

「さあ、どこからでもどうぞ？ 稽古するつもりでかかってきなさい」

審判ラディスト。

その他見学。

勝利条件は降参させるか無力化するか。

——生かさず殺さずが出来て初めて念能力者として一人前だと思ってる私にとっては他愛もないこと。……咄嗟の出来事とかにはまだ加減が効かないけど。

ほら、胸揉まれたりだとか。

そんなわけで事故を防ぐためにも降参させたいのだけど……むむむ。

……ちよつと脅そうか。

私は体の内に閉じ込めていたオーラを放出させた。

へブン状態とでもいうような開放感が体を走る。

ラディとの会話の後からずっとだけど、限界まで剛してたら流石に疲れた。

「……」

……ううん？ なんで白目向いてるん？

「……あのー、お姉さまちよつとよろしくて？」

「なんでそんなお嬢様っぽいのか？ 何、目覚めちゃった？」

「違うっ！ ……そんな濃密なオーラ出されたら普通、気絶するから」

……うん？

「あつるえー」

周りを見渡すと——日常的に浴びてる二人と、それなりに人外強度が近い肉親以外が全員気絶してました。

——あ、二人が気絶した。

「さ、仕切りなおし。よし、かかってこい」

「ぐべんだざい……」

、気つけて起こしたら、涙流して土下座で謝られた。

一体私が何をしたというのか。ただちよつとオーラ出しただけなのに。

心底問い詰めたいから、と掴み掛かろうとしたところでラティストに止められた。

「……ちよつと予想してたより弱すぎ。メンタル的な意味で」

「あ、あははは……」

「ネテロに伝えようかなー」

「——ごめんなさいマジでそれだけは勘弁してくださいお願いしますお姉さま」

「……はあ……」

ラデイが物凄い勢いで頭を下げたので許してやることにする。

——場所はラディストがオススメの料理店……ふむカルボナーラがあるからこの店は良い店だ。

長話になるから、と弟子二人には帰宅を促したのだが、遊びに行きたいというので一人1000ジエニー程握らせて外に出した。

……ミトちゃんがいるから死ぬことはないだろう。ジンも充分強いし。

頼んでいたカルボナーラが来たので私はフォークとスプーンを構えた。

「……ま、私にも非はあったから許しましょうか」

「姉ちゃんマジ天使」

「もつと褒めてもいいのよ?」

「姉ちゃんマジ女神!」

「……抱く?」

「はあ?! ば、バツカじゃねーの!」

態々私はフォークを置いて、ラディストに胸を寄せて上目遣い。……むつつり助平な

ラデイがちよつと反応しちゃうのは仕方ないね。

冗談なのにマジギレする弟可愛い。

……あー、よし。落ち着こう。

「ごめんごめん、許してラディスト。……こんなくだらない話するために呼んだわけじゃないんだ」

「はあ……で、何の用？」

「はい、これ」

ポーチから經由して《箱庭》から取り出したのは例のアレ。

「なに、これ」

「んー……残念道具？」

「残念って……——言葉通りの意味じゃないだろ」

「勿論」

残った念の道具って意味ね、と言って私は一口食べた。

「まったく。そんな、妖しいもの何処から手に入れたのさ。言つたら？ 蒐集癖も大概

にしろつて。……幾ら姉ちゃんでも怨念だとかになると話が変わってくるんだから

……」

「わかつてるよ。心配してくれてありがと。……でもちゃんと出自もハッキリしてる

し、怨念じゃなくて性質は執念だったから特に問題はないよ」

除念師として活動してるラディストが言うのだから真実味を帯びてくる。

実際怨念に憑かれた道具を見せてもらったことがあるけど……触れるだけでヤバそうだった。

でもだからって教育ママの如くしつこく言われると腹が立つてくる。

だからってなあ、とまだ何か言いたげなラディストの口に、丸めたパスタを突っ込んで黙らせた。

「それで、こいつの名称は《邪気眼》。別名としてつけるなら煩惱の具現化装置……とでも言おうかな。——さあ、これを君に授けよう！」

「……なんだって俺にくれるのさ」

えふん。スルー辛い。

「ま、まあ私が持つてても宝の持ち腐れだし……あと他の人に渡したくないし」

「ふーん……もしかしてそれなりにヤバかったりするの？」

「……相当。悪用すれば世界征服できちやうかも」

「んなもん渡すなし！ 返す！」

受け取って眺めていたラディストが黒い蛇の眼球の様なソレを投げつけてきた。
ああん痛い。

「もう……素直に受け取ればいいのに。……あ、じゃあお姉ちゃんが愛情込めて渡せば受け取ってくれる？」

「うっさいバカ姉！ ビスケットに渡せばいいだろ！ ……元中二病のアイツにピッタリじゃねーかつ！」

「……ねえ、その言葉ブーメランになってるの気づいてる？ 常闇ダークドラゴンの龍帝君」

「……死にたい」

「……ごめん」

今から自殺します的なオーラ出してた。所謂黒歴史。

……よくよく考えれば私も人の事言えないからこのネタでからかうのは止めよう。右腕が痛くなってきた。

「……じゃ、宝石……みたいにも見えるからビスケットに押し付けるという事で」

「……うん」

古傷を抉られたラデイの元気づけに店員さんにハニトーの追加注文をして、食後のデザートへと洒落込む。

……むせ返りそうなくらいホイップクリームつけたら怒られた。

「糖尿で死ぬわ！」

「いいやッ！ 私にはカンケーないねッ！」

弟が元気出たので良しとしよう。

※ハニトーは後で私が美味しく頂きました。

ジンとミトの両親が事故で亡くなるという大きな分岐点になるう出来事が、いつの間にかなくなっていた。……何を言って（ポル略）

そんなわけで遠慮していた二人のご両親への顔合わせと、いつも遅くまでお預かりしている事への詫びも含めて彼らの家にお伺いした。

それが丁度三日ほど前の事。すでにあの二人と邂逅から三年。

今日はその記念日、と言ったら可笑しいけれど、一年に一回の定休日。

二人には来なくていいと言伝をしている。

そんな休日を使って私は久々に友人の元へと向かっていた。

念能力で跳んだ先。表玄関の計128tの大門を軽快な音を響かせながら開いて。

「……あ」

「あ、シルバ君だー」

目と目が合う、瞬間――

「――うわああああ！ 化け物女が来やがったあああああ！ オヤジいいいい!!」

逃げられた。

これはひどい。

とりあえず気絶させ生け捕りにして目的地に向かった。

「ちわーつす、三河屋ーつす！ シルバ君をお届けに参りましたー！」

「三河屋……つてやつぱりお前か！ 来るんなら連絡くらいして来いっつったじゃねーか！」

「しーまーしーたー！ したらツボネちゃんに来るなど言われたんですーうー！」

「おま、それがかッ！ それで倅は亀○縛りで抱えられてんのか?！」

「……あ、ごめん。このシルバ君、23才推定童貞は私を見て逃げ出そうとしたので捕まえました。ゲットだぜ！」

「ゲットだぜつて……暗殺者舐めてんのか、お前は」

「やだ気持ち悪い。舐めるわけじゃないじゃない……きつもー」

「何時まで経つてもガキだな……はあ」

「……若いつて言つてほしいなー」

ゼノつてば失礼な奴だ。

私も人の事言えないけどさ。

「……ちなみにもうそいつ結婚してるからな」
……え。

いや、五歳って幾らなんでもペドいよね。ベア〇ド様も
びっくり。「この——（ry

シルバ君を思わずゼノに渡す前に地面に落としてしまい、呆然として時間が過ぎた
後。

ゼノに自室に連れられて、アーモンド臭漂う茶をだされた。

「……辛い」

辛くはない。お茶は淡く青酸カリで苦かった。

いや、何が辛^{つら}いって、ついこの間まで我が子のように可愛気のあったシルバが嫁さん
作ってるんやよ？

時の流れを感じるというか、人って成長早いものだな、って改めて思っ……はあ。

「……まあ、気持ち分かるがな？ ……というかお前も結婚すりゃいいじゃねーか」

「……………やだ」

「おい、やだって言うけど……今お前幾つだよ」

「……四十前半。結婚するつもりは欠片もない！ ……でも悲しいものは悲しいのっ

！」

「やっぱ女心は分かんねーわ」

お手上げだ、というようにやれやれと首を振る。

へっ！ 男心も混じってますしねっ！ 女心が分かってもわかるわけないよーだ。

「お前三十代に入る時も嘆いてたな。で、酒屋で浴びるように酒飲んでたんだろ？
引つ切り無しに電話掛かってくるから……あの時、リンが怖かったんだぞ。不倫だと疑われるわ、癩癩起こして料理が毒物しか使ってたたりだとか。俺でも致死量ギリギリな分量で」

「……。ごめん。ホントごめん」

心情的に理解できるから余計に申し訳ない。平伏しかできん。

……というか私に猫耳生やせれたのはその『うらみ』でなのか。衝撃の事実だわ。

「まあ、言っても仕方ねーし……もう言わねえけど。なんで結婚しねえんだよ、お前？」

「……うーん。だって結婚する必要性を感じられないし。……一人で生殖可能だし」

「はあ？ お前両性じゃなかったら？」

この世界では割と生まれてくることがあるらしい。……女性器と男性器を兼ね備えた人間が結構な確率で。

「勿論女ですことよ？ 私の体つき見て、女だって思わない方がどうかしてるんではな
くって？」

「変に女言葉使うな。キモイ」

「ひつど！ ……うー自分でも気持ち悪かったから言いたくなるのもわかるけどさ」

「……じゃあなんだって生殖可能だなんていうんだよ」

「うん。 ……まあ、簡単に言えば——女だけど性的興奮を感じたら生えてくる………ようにした」

によき、と生えてくるのだ。によきつと。

くいくいつと腕で男性特有の現象をジエスチャーしたら深いため息吐かれた。

……なにゆえに。

「ああ、うん。 ……前から思ってたがお前バカだろ。お前の能力は一応知ってるがよ。そんなことしちまえば生物的にも、念能力者的にも規格外で人から外れてるお前が、生殖行動したくなくなるのは目に見えてるだろうが」

「分かっててやったんだよ。——私だつて色々あるの。馬鹿みたい見えるかもだけどさ……」

ちよつとシリアス醸し出して言う。

それに対するゼノの反応といえは、

「いや、ただの馬鹿だろ」

「そんなバカにしてたら泣くからね！ 幾ら私だつて泣いちゃうからね！」

辛辣だった。

あれ、私の親友……酷すぎ？

「泣くなめんどくさい。……まあ、なんとなく。……初めて会った時から男勝りというか、女らしくなかったからな。幼女だから当たり前だけどよ。ああ、わりい。そういうのじゃねーな。……既に人格が成熟してたというかな。女だって認めてはいるが否定しているっていう感じがした」

ゼノ少年すげーな。普通気づかないだろう。……まあ、暗殺者の家系ってことであの頃から常人とは違う目を持っていたんだろうけど。

「……凶星かよ」

「あれ、私顔に出てた？」

「いや、出てなかったがな。……まあ、お前は性同一性障害なわけか。なるほどな。なんで付き合いやすいのか分かった気がする」

それ誤解です、ゼノさん。

「……ごめん、唐突に話ぶった切るけど、……もし私に男として過ごした経験が生まれた時からあったって言ったらどうします？」

「はあ？ ……なんだ、それ。どっかの宗教で言う輪廻転生かなんかか？」

「さあ？ 神様っぽいものにも会ってないし。……でも、もしかしたら神の悪戯だとか悪

魔の罠だったりするかもだけどさ。……ともかく私は男として女が好きなのもあるし、女として育てられたから男の人もいいな〜って思うけど……でもなんだかどつちも許せなくて」

「それってバイじゃねーのか」

「ちーがーいーまーすうーっ！」

俺は男でも女でも食える漢女なんだぜ？ とか言わないから。

……美しいものなら老若男女食う赤セ○バーじゃないんだから。

「悪かったよ。……まあ、お前がバイなら俺はとつくの昔に食われてるだろうからな」

「……私の事そういう目で見たの？ 昔から？ ……ひどい」

「冗談だって。真に受けんな。……その、なんだ。ちよつと可愛いな、とは思ってたけど

よ」

「きもっ！ マジ引く！」

「うぐう……お前というやつはあ！ ……過去の話だ！ 過去の！」

黒歴史ですね、わかります。

「ここで私が頬を染めながら不倫を誘ったら……。」

「……それに、お前と再会した時にはアイツ、リンもいたしな」

「なによ、ちよつと嬉しかったのに。……このまま不倫ルート入りかけてたのに」

「物騒なことを言うな。なんだよ不倫ルートって」

「……私がリンさんに腹を裂かれて、中に誰もいませんよ、て言われて。それからゼノが頭だけになってリンさんに抱えられながら、湖の上で nice boat する結末」

「やっぱりお前馬鹿で阿呆だな。何言ってるのか意味不明だし、不倫なんてしねーから」肩を竦めさせて断言して。無自覚に惚気るゼノはウザかった。

……部屋の入口にいる、私に向かって針を飛ばそうとしていたリンさんが頬を染めていた。

彼女が可愛らしいので無自覚にでも惚気たのはGJだ。

——鬱憤も晴らした後で、箱庭の中から熟成させた100年モノのワインを出してリンさんも交えて月見酒を。

途中でシルバの嫁さんのキキョウさんが襲撃してくるなどがあつたが、ワインが好きなように、飲ませたら大人しくなった。

翌日、シルバは私たちが飲んでる間、第一子であるイルミの世話をしていたらしい。

……あの厳つい顔で赤子を宥めるのが想像できなかった。

私だつたら泣くね、うん。

……というか既に息子が居たと知った時点で泣いたね。

——うわーんっ！

無邪気な幼いイルミを愛でてやっぱり子供は可愛いなあ、なんて思いつつゾルディック家を後にした。

うへへ、とにやけてたらゼノに《龍頭戯画》ドラゴンヘッドされて中断させられたのでちよつと不完全燃焼。ちくせう。

とりあえずくじら島に帰って弟子二人を抱きしめた。

……訂正、ミトちゃんだけ抱きしめた。ジンは絞め落した。

あのマセガキめ。今度やろうものならお望み通り胸で圧殺してやる。

——と、まあこんな具合に。

時に暗殺者一家にお邪魔してみたりしながら比較的平和に三年が経ち、弟子二人は一端の念能力者となった。

私基準の一端だから……まあ、師範代になったばかりの弟妹達くらいだろう。

……。あ、あれ？ それなりに強いかもしれない。

……ま、まあそれはいいとして。

——ジンはハンターになりたいと言いだした。

「……理由、聞かせてみなさい。ジン」

「やりたいことができた。……だから止めてくれるなよ、師匠。それにもう、受け付けは済ました」

「——ハンターになる理由になってないんだけど？」

「……」

ジンは自然体だ、構えはない。

故に予動作を予測することは難しい。

——そして行われる不意の一撃。

腕がぶれて、私の死角になるような位置から拳が飛んでくる。

「……ッ。そりゃあ俺の師匠だもの。これくらい防がれるよな」

「当たり前。……ねえ、ジン。一つ聞いてもいいかな。——やりたいことって、失踪したジンのお父さんを探しに行くため？」

「……それも一つ。だけど……」

また自然体に戻ってジンは指先を高速で、かつ気持ち悪く動かす。

「師匠の元にならずと居たら俺、いつまでたっても勝てねーじゃん！」

「んな理由だろうと思ったよッ！」

「——いつてえッ！」

ゴチン、とジンの頭から異音がなる。

……全ては私を打倒するため、なんだろうけどさ。

私に勝った後が問題だ。

結婚だと？ 私と？ ふざけんって言いたい。

そもそも、なんだって将来良妻になるだろうミトちゃんじゃないのさ。

歳も近いし、遠慮はしなくていい。

おまけになんだかんだ言いながら世話してくれて。

半歩後ろで控えつつ、間違ったときは先だって正してくれる。

……こんな良物件はそうそう居ないだろうに。

「それにミトも今なんだかんだ言ってるけど、大きくなるよ？」

「ううっ……いや、だけどそれは昔の俺に負けた気がするんだって！」

「……気持ちにはわかってやれなくもないけどね、そりゃあ」

おつきくなるよ、と言ってても私程じゃないかもしれない。

……いや、私の場合母上が規格外だったのもあるけど。

「だから、武者修行も含めて！ 頼む、師匠っ！」

「はあ……」

多分、私が許可しないとジンはゴンの母親にも会えないだろうし。

主人公不在というどうしようもない原作崩壊が起きるだろう。

いや、ゴンがいなくても世界は廻るけど。

原作云々の以前に、ジンに許可を与えないとおそらく大成することなく、くじら島で燻つたままだ。

私に断りを入れずにこの島から出て行つてもよかった。

やつていける、というのは道場に行つたとき分かつただろうし。

態々顔を見せて、許可をもらいにきたのだから……多分、ハンター試験に出るな、と言つたら参加を取り消して此処に残る。

だつたら許可を出せばいいのだけど……でもミトを知っているから尚の事容易に出せない。

ミトがジンに向けてる好意がどれくらいものかは知っている。

……例えばそれが未だ恋情になつていないとしても、ジンが息子を預けた時、どうなるかはわからない。

私としては……弟子達の想いに応えてやりたいけども。

二者択一。

ジンかミトのどちらかを、本人たちは自覚はないだろうけど、将来傷つけることにな

る。

「……うーん。ミトはどうするの?」

「アイツは連れてかない。……だって口うるさそうだし。おっかないし」

あーうん。決めた。考えなくとも、簡単な事だった。

……つまりどっちとも選べばいい。

「いいよ、許可してあげる。ただし条件付きで」

「……条件つてなんだよ」

「ふっふーん……今日すぐに出ていくってわけじゃないよね?」

「……もしかして」

「さあ? なんでしょうね?」

うげ、とこの家から逃げてそのままくじら島を出ようとしたジンを、私は『箱庭』の

中に落とした。

さて、と。

もう一人の弟子の所に行きますか。

皇帝と妖狐って聞くと気になるのは私だけ…だと…!?
バカなっ

「それじゃ、ご両親の了解も得たから。ミト」

「はい? いったい何の了解を……」

「ジンと一緒にハンター試験受けてきなさい」

「え」

「では、二名様ザバン市にご案内」

「ちよ、ちよつとま——!」

箱庭に堕ちていくミトを笑顔で見送って、私はザバン市へ。

ハンター試験頑張ってもらっちゃいという走り書きを、二人を《箱庭》から追い出す前にジンの背中に張り付け、くじら島の拠点に戻る。

いやあ……良いことした後は気持ちがいい。

これでミトちゃんも悲しい思いしなくて済むだろうし。

ジンも子供を勝手に作ったりしないだろうし。

……原作でのゴンの母親には悪いけれど、でもこれで良かったんだと思う。

まあ、イレギュラーな私がゴンの母親ということはないだろうし。

……あ、でも妹の例があるから言えないかも。

いや、生まないからそもそもありえないけど。

私からの卒業試験をクリアしてくれる日が何時かは判らない。

……まあ、もしザバン市に着いてすぐ書置きに念字で残した文章に気が付いたとして、卒業試験が終わるまではざつと三年ぐらいかな。

いや、卒業試験に気づかない可能性も……いや、ミトちゃんに言っておいたから破つて捨てたりはしないだろう。

「はあー……ちよつと本格的に動こうか。師範代二人の姉がなんの功績もないっていうのは世間的にもちよつと申し訳ないし」

背伸びをして家から出る。

……家から出て、家を《箱庭》に移動させた。

森の奥からのつそりとキツネグマの夫婦が現れる。

「やあ、ゴン。それにゴンの奥方。……急にこんなことになったけど、長い間お邪魔させてもらいました。また来るかもしれないけど、その時は宜しくね」

——ぐお。

問いかけに呼応するように二匹は唸る。

原作に出てきたキツネグマがコンだったし、彼がゴンでも問題ないよね。

「……………ん。じゃ、元気だね!」

首を縦に振り、二匹は森の奥へ帰っていく。

……………さて、ご近所様に挨拶も済ませたことだし、くじら島にはもう用はないかな。

面白そうな依頼がないか会長室に突撃しようしようしよう。

流石にアポなしで突撃するのは駄目かな、と思い直し、トゥルルと協会の会長室に電話をかけた。

「なんか依頼無い?」

『そんなことより儂と勝負せんか? 暇で暇で仕方ないんじやよ』

第一声が依頼の有無な私もだが、ネテロ会長も大概だな……………。

「……………嫌です。1万回は出来たんでしょ? 感謝の正拳突き100万回にでも挑戦してくださいよ、会長」

『それはもうやったんじやつつーの。それでも暇だから死合に誘ってるのではないか』

あつはつは、……………はあ。一体この爺さん、何を目指しているというのか。

アラウンドハンドレットだっていうのに。略してアラハン。

感謝の正拳突き100万回は既に日課なんですネ、わかりますん。

「マジっすか。会長マジパネエっす。あと試合の字が違いそうなんでお断りっす」

『……陳腐なゴロツキみてえだからそれやめろ』

「はい。……それで、なんか面白そうな活動とか無いですか？」

『つまりのお……ま、そうじゃなあ、ハンター試験の試験官やってみるか？』

あーそういうことも確かハンターの仕事だったけ。

まあ、でも今年は無理だ。

「……来年なら喜んでお受けしてたんですが……今年はウチの弟子二人が試験に出たので」

『別に良いんじゃないかな。身内鼻肩してくれなければ。……まあそういう事なら、あーっ

と……何処にやったか』

書類を物色する音が聞こえる。

『おお、これじゃ。ジャポンの都の王様……いや皇帝じゃな。正確にはその皇帝の住む宮廷からじゃが、魔獣の一種である妖狐が皇帝をたぶらかしてるんじゃないか、ということその真偽と、もし妖狐であれば討伐してほしいという依頼が来ておる——つておい、急に来るんじゃないやねえ！ 心臓に悪いわ！』

つうーつうーという音と共に私の握っていた公衆電話の受話器が落ちた。

「なんでそんな面白そうな依頼が来てるのに早く言わないのかな、このエロ爺は」

「理不尽じゃろ、それ! ……儂、卑猥なことしたかのお?」

「恍けんな。手合せの度に胸を触ろうとしてきたクソ爺。……去勢してもいいんですよ?」

「……………それは勘弁してほしいぜ。儂が悪かった」

見た目五十代過ぎたところか、というような実年齢百歳ほどのハンター協会会長は、股間を守りながら冷や汗を掻いていた。

「ふん。判ればいいんですよ、わかれば」

「この世界でも鍛えられないけれど、念での強化ができる。」

「ま、それでも蹴る方も同じくらい念で強化したら痛いどころの話じゃないけど。」

「ん、じゃ依頼書もらいますねー。あ、……そういやメンバー見つかりました?」

「まだよ、まだ。……鍛えていた奴ら一人除いて皆途中で逃げ出してしまったからのう

……………実に面倒くさい。まあ、一人残っただけでも幸いか」

……………会長から持ち掛けられた十二支んのメンバーの育成も随分長い。

「一から鍛えようと初め画策したのだが、脱落者が絶えないために今では一人しか残っていない。」

「この一人が中々しぶとく、私とネテロで行う教育も最後まで立っているのだ。」

まあ、この一人を含めてあと十一人。

結局十一人は現在活動を行っているハンターから逐次選出することになった。

長い時間をかけたのに一人という現状。

一から育てて、というのは一般常識内では面倒だ。

正直今、面倒になってきた。

人道だとか道徳観念抜きにしたら、一時間ほどで優秀な兵士を造ることは出来る。

だが、求めるのはハンターである。兵士ではない。

生きている人間にパワーレベリングをすればしたら、才能の塊のような人間くらいにしかできないのだ。

「それにしても始めからいるから凄いやねえ……何が彼をあそこまで頑張らせるのか」

周囲が脱落していく中、ただ一人初期のころから居るのだ。

尊敬を通り越して「よくもまあ」と呆れてしまう。

「さあ、の。自分のその大きな胸に手を当ててみればわかるんじゃないかの」

「……………このセクハラジジイめが」

……………そろそろ怒っても問題ないよね。

「睨むんじゃないよ。…………いや、割とマジでよく考えてみる。鏡を見た方がいいとも思うがな」

「……はあ？」

さっぱりわからん。

さつさといけ、と言われてしまったので追及できなかった。

正直何が何やらさっぱりである。

秘書の女性と副会長の男性に会長室の入り口で会い、思わず時間の流れを感じてしまった。

軽く会話をしながら、自分もこの人たちも歳とつたなあとか考えて依頼の受付処理を済ませた。

私が向かうはジャポン。我が魂の故郷。

キョートにある拠点である。

京町屋と呼ばれる後で知った造りの家に上がり込み、カンカンという音を聞く。

音の元へと近づいていくと、目的の人物を見つけた。

「や、御影君。こんにちわ」

「……」

カンカンという鉄の塊を叩く音のみが返ってくる

どうやら集中してしまって聞こえてない様子。

終わるまで見学することにした。

……終わつたのが二時間経つた後。

それにしても良いものを見せてもらった。

完成したのは包丁。なのだけど国宝級の日本刀のような美しさと清らかさ、そして強かさを感じた。

勿論念が籠っていて、不変の念がこもってる。

錆びず、汚れず、刃毀れせずといった具合の出来だ。

全ての工程が終わつた後、思わず拍手をすると、驚いて肩が跳ね上がり、ようやく私の存在に気付いたようだった。

「……すみません、お茶の用意も出来なくて」

「いやいや、気にしないで。急に来た私が悪いから。……それからどう、調子の程は」

「まあ、なんとか。全部カトリアさんのおかげです。……ありがとうございます」

「いいつて、そんな頭下げなくても。……それより、最近人間国宝に指定されたって聞いたけれど」

「あははは。お恥ずかしながら、まだまだ未熟ではありますが、不肖ながら人間国宝やらせてもらってます」

トン、と胸を叩き恥ずかしげに笑う。

「謙遜しないの。……お弟子さん、あそこから覗いてるけど。今何人ほど居るのかしら」
 「ははは。はい、わかりました。……そうですね。あそこで覗いている馬鹿達と、今日休んでいるのを含めると5人ですね」

「なるほど。…それで、今日奥さんは？」

「上で寝てます。私以上に集中したら周りが見えなくなる性質の人間ですから。…今日も、とうかここ二、三日徹夜でしたので」

「……流石と言えがいいのか。いえ、呆れるべきかしらね」

「……………はい」

長い溜とともに肩を竦めさせる。

苦労してるんだろうなあと思いつつ、似た者同士だなあとも思う。

旦那さんになっただろう御影君が造る担当なら、奥さんになった彼女は装飾担当だ。

今上の階で眠っているらしい奥さんは、御影君に念の使い方を教えるためハンター協会から派遣された元ハンター。

彼らの結婚には目くるめくラヴロマンスがあつたのだろうか、まあ、それは私の認知しえないことだ。

「にしても、カトリアさんは歳を取りませぬ。……実は魔女だったりしませんか」

失礼なことを言う。

まあ、魔女のように不老っていうのは間違っていないけれど。

「……念能力者の君もそんな歳をとってないでしょうが」

「……そうですが」

お弟子さん達には聞こえないよう顔を近づけて小声で。

見た目は20歳くらいにしか見えないが、それでも三十代後半だ。

そろそろ体が衰えてくるだろう年齢だが、すこぶる元気そうである。

……はて、お弟子さんの女の子二人がキャーキャー言ってるが何故だろうか。

……ああ。

「私は用事の途中で寄っただけだから、これで」

「……あ、はい！」

「うん。……頑張れ、十六代目」

「ええ、時間があればまたいらしてください」

畳から立ち上がって逃げるようにして道に出る。

色々な意味で頑張れ。

主に弟子たちから浮気だと誤解されて茶化される事と奥さんへの対応を頑張れ。

私は逃げるその足で、キョートにある宮廷へと向かった。